

# 彰 伝

—イマーム・ハッジ・スライマーン濱中 彰の生涯—

*Sulaiman Akira Hamanaka*

*~ All his life ~*

# 彰 伝

—イマーム・ハッジ・スライマーン濱中 彰の生涯—

## はじめに

ここでご紹介する『Akiraの留学記』は、私の夫・彰自身が書き上げたものである。当時、マレーシアで勉強していた息子の「お父さんの若い頃の話聞かせて欲しい」という要望に応じて、店にあったパソコンに向かって下書きもメモもなく自分の頭の中にある記憶をたどりながら、仕事の合間にコツコツと2週間という時間をかけて仕上げた。彰のホームページ上に掲載されたこの文章を読んだマレーシアの友人の好意によってマレーシア語に翻訳され、さらに多くの人たちの目に触れる機会を得て大きな反響をいただいた。また一方で、彰と2005年からお付き合いのある、日本の地域社会における多文化共生を研究する岡井宏文氏（当時、早稲田大学人間科学研究科博士課程）より、彰の足跡を記録に残したいというお話をいただき、それがこれを書き始めるきっかけとなった。

まず、この『Akiraの留学記』を読んでもいただく前に、「濱中彰」という人物についてお話しておかなければならないだろう。それは、一人の人間の根幹を形作る「バドミントン」と「イスラーム」という二つの柱の緊密な関係性についての話であり、それを語るには、まず彰の父・誠の70年余りに及ぶバドミントン人生を語るなければならない。家族の歴史を紐解きながら彰のルーツを辿る仕事は、関係書類を集めることから始まり、父や彰と関わった人たちの話を聞き取り、それらを照らし合わせていく仕事になるだろうと思われる。幸い、父は健在であり、彰は自分の言葉で語る

多くの文章を寄稿文やインタビュー、また会議・講演用の原稿を残し、事実の経緯を年表にまとめて自身のホームページ上に掲載していた。これらの資料を使用することで、彰の行動や考えを嘘偽りのない形で伝えることができるに違いないとの確信を得ている。従ってこれは、時系列を追いながら、あくまでも記録を残すという視点に立って、彰本人が語る言葉と共に「彰の自分史」を妻である私が伝えようとするものである。

多くの人たちに「彰の生涯の記録」をお伝えしたいという想いと、これを白寿を迎えた父と母への贈り物にしたいという願いから、『Akiraの留学記』の序章としての『彰 伝』の一日も早い完成を目指して、2021年5月（イスラム暦9月・断食月）、この作業を開始した。

濱中 曜子

## 目 次

はじめに.....	3
第一章 誕生から留学の日々 .....	7
彰の原風景.....	8
父とバドミントン.....	10
学生時代〈シンガポールからマレーシアへ〉 .....	13
異郷にて〈エジプトからリビアへ〉 .....	16
第二章 帰国から後の日々 .....	23
埼玉にて.....	24
新居浜とバドミントン.....	26
彰とマレーシア.....	33
新居浜 Masjid.....	38
第三章 達成から旅立ち .....	45
父と彰の夢.....	46
彰と国際交流.....	49
彰の想い.....	53
感謝の返礼.....	58
おわりに.....	65
後 記.....	69
最愛の人への手紙.....	72
彰の生涯（年表） .....	76
思い出のアルバム.....	84
Akiraの留学記（日本語） .....	89
Akiraの留学記（マレーシア語） .....	126

## 第一章 誕生から留学の日々

---

## 彰の原風景

彰は、濱中家の長男として1953（昭和28）年3月に愛媛県松山市で産声をあげた。予定日を大幅に過ぎていて、出生体重は5kg近くあったらしい。その2年後に次男が、さらに2年後には三男が誕生した。両親は経済的な理由もあったが、実のところ、彰の一時も目が離せない行動力に手を焼いて、三男が生まれた年に山口県の母方の祖父母に預けることにした。そこは山口県の南東部にあたり、山口県とは大島大橋で繋がっている瀬戸内海に浮かぶ大島という島で、松山市の三津浜港から山口県柳井港までフェリーで1時間半、さらに港から車で40分ほどの距離にある。彰が祖父母と暮らした家は、その島の最も愛媛県寄りにあつて海に面した突端に位置していた。そこから見渡す瀬戸内海はほとんど波立たず、いつもまったりとした風の風景だった。

島での生活は裕福で、祖父母の愛情を一身に受けて育った。祖父は、山でみかんを作っていた。それは、気候が温暖で海に面し



油宇の家から臨む瀬戸内海

た小高い山の斜面を利用して育てられ、その濃い味は一度食べたら忘れられなくなるような祖父自慢のおいしいみかんだった。彰にとって目の前の海が遊び場



であり、教えられなくても海で泳ぎ、大きくなっても素潜りや遠泳が得意だった。一番好きな遊びは、三輪車に乗って選挙運動の真似事をする事だったという。彰の「よろしくおねがいします」という演説に、いつでも足を止めて耳を傾けてくれるような長閑な場所で、彰は近所の人たちから「坊ちゃん」と呼ばれて可愛がられた。

彰の大好きだった祖父は彰が12歳の時、みかんの運搬用荷台のレール事故によって突然亡くなってしまった（享年63歳）。祖母は、島に専門の医者がないことを嘆き「医者になって欲しい」と懇願したという。その祖母は、彰がマレーシア留学中に脳溢血で倒れてからリハビリ生活を送っていたが、祖母の口癖は「贅沢をしてはいけない、節約するように」だった。いつもそう言って彰を諭していた祖母も、1991（平成3）年82歳で死去した。彰は「自分は、油宇のじいちゃん、ばあちゃんに育てられた」と、事あるごとに話していた。

彰は小学校入学の前の年に、松山市別府町の社宅に住む両親と弟たちの元に戻り、長男・彰6歳、次男・勉4歳、三男・均2歳の男ばかり三人兄弟の生活が始まった。その頃の父が語る息子の思い出話は「いつも、悪さばかりして逃げまわった」であり、母に「お前と一緒に



油宇にて

に死のう」と思い余って言わせるほどの行動で、彰は母の手を焼かせた。実の父母のように慕っていた祖父母の元を離れ新しい環境での生活を始めた彰に、父はバドミントンとの出会いを用意し、その楽しさを教えた。そして、母は学ぶことの大切さを根気よく教え、彰に自信を持たせて励ました。彰は、父と母の努力によって、新たな自分を発見しながら少しずつ成長していった。彰にとって祖父母と暮らした幼い頃の日々…素潜りで魚を捕まえ、みかん山を歩き、防波堤で釣り糸を垂れ、祖父の船で沖へ出る。そんな幼い頃に刻まれた油宇での懐かしい思い出が、彰の生涯の原風景となった。

## 父とバドミントン

彰の父・誠は、1929（昭和4）年暮れも押し迫った頃（戸籍上は1930年1月2日）、長崎県上県郡上県町（現・対馬市）に生まれた。彰の母は1929年8月、彰の本籍地でもある山口県大島郡油田村（現・周防大島町油宇）で生まれている。彰は、10歳までは父の姓の「大石」だったが、父の妻方家との養子縁組によりそれ以降は「濱中」となった。母方の祖父・三一は、1901（明治34）年山口県にて出生、第二次世界大戦時は朝鮮半島北東部にある咸鏡北道地区西湖津で大きな造船所を経営していたが、終戦の年に生まれ故郷に戻り、所有していた山でみかんの栽培を始めた。父は、高等小学校1年生の時に休学して朝鮮に渡り、祖父の造船所の手伝いをしていたが、祖父と共に帰国した。そして、戦後の教育制度改革に従って新制中学に復学して2年間学んだ後、県立松山工業高校に進学。20歳で学業を終えた1950（昭和25）年、丸善

石油松山製油所に就職した。

その職場で、父はバドミントンに出合った。それは、アメリカ出張から社員が持ち帰った5本のラケットに端を発する。「誰かバドミントンをしてみる者はいないか」と言われて、「やろう」と手を挙げたのだという。1946（昭和21）年に、日本バドミントン協会が創設され、父が丸善石油に就職した年には愛媛県バドミントン協会も設立されている。この5本のラケットから始まった集まりは、1955（昭和30）年に丸善石油松山実業団バドミントン部設立の運びとなり、1957（昭和32）年、第6回全日本実業団選手権大会（香川県高松市）に初出場した。父、27歳の時のことである。

1956（昭和31）年、第1回愛媛県実業団選手権大会が開かれ、この大会が因となって1961（昭和36）年10月には日本実業団連盟創立が承認されている。1964（昭和39）年、松山市で開かれた第14回全日本実業団選手権大会から、運営は県実業団連盟主管に移行され、大会使用球はこれまでの陸鳥から水鳥に変えられた。当時、父は松山市バドミントン協会理事長を務めていた。

1959（昭和34）年、彰が小学校1年生の時、父と一緒に愛媛県親子バドミントン大会に出場して見事優勝を飾った。これについては、「親子のダブルスですが、子供は前で立っているだけでほとんどは父が一人でプレーしていました」と語っている。1960（昭和35）年には第1回愛媛県バドミントン選手権大会が開かれ、父は翌年の第2回大会において、成年男子シングルスで見事優勝を果たした。その強い父を一番近くで見ながら、彰のバドミントン

との終生の付き合いが始まることになる。

1964（昭和36）年5月21・22日、第6回トマス杯国際大会が東京で開催された。これが、日本で行われた最初の国際大会である。トマス杯は男子バドミントン国別対抗戦で、3年ごとに開かれ、第1回大会は1949年イングランドで開催された。日本は、第3回大会（シンガポール開催）の香港アジア予選大会（1954年）に初めて参加していたが、この国際大会の日本開催は、正にバドミントンに携わる者にとって夢のような話だった。世界のトップクラスのバドミントンを、地方の競技者にも見せたいという思いは関係者にとっては共通のものであり、この大会に出場していた全英選手権男子シングルス5連勝の実力者デンマークのE・コップス選手を招いて親善試合をしようと考えて行動を起こした人たちがいた。これには、大阪合織（現在のゴーセン）の松王清志氏の尽力があったということが、この親善試合を実行した岡山県バドミントン協会の記録に残っている。当時、愛媛県の実業団チームとして、丸善石油松山以外にも愛媛大学、住友化学菊本、住友化学新居浜、住友金属鉱山別子が活躍していた。その住友化学菊本代表・越智勤也氏と、丸善石油松山代表の父が奔走して四国での親善大会開催にこぎつけた。あいにくの悪天候で船が出られなかったこともあり、松山市の済美高校体育館で1日だけの講習会となったが、体育館に集った多くの競技者に、世界のバドミントンを目の当たりにするという貴重な経験を与えたことの意味は大きかった。

この東京会場には、1957（昭和32）年から日本唯一のバドミントン専門の製造販売会社サンバタで働き始めていた、後に愛媛県

バドミントン協会の会長を務めることになる瀧山氏と、当時松山市バドミントン協会理事長の父と、1961（昭和36）年にサンバタの下請けからヨネヤマブランドのバドミントンラケット製造販売を開始した米山稔氏の顔があった。瀧山氏29歳、父34歳、米山氏40歳、これが、三人の長い交流の開始となる出会いである。

### 学生時代〈シンガポールからマレーシアへ〉

彰が1965（昭和40）年に入学した松山市立津田中学校には、まだバドミントン部がなかった。高校卒業まで父がコーチを務める丸善石油松山の体育館に通いながら社会人と一緒に練習を続け、父に倣って毎日のランニングも欠かさなかった。1968（昭和43）年、県立松山東高校に入学し、初めてバドミントン部として正式な大会に出場することになる。松山東高校には、1953（昭和28）年にバドミントン部が創設され、その他県内には、1951（昭和26）年に松山商業高校と新居浜西高校、翌年には松山南高校と今治北高校が部として登録されていた。彰は、2年生の愛媛県高校新人大会において男子シングルス優勝という結果を出し、翌年の愛媛県高校総合体育大会でも男子シングルス優勝、インターハイ出場を果たした。彰は、「バドミントン漬けの学生生活だった。バドミントンをするために学校に行っていたようなものだった」と、その頃のことを回想している。

彰が進学を決めた岡山大学のバドミントン部は、1966（昭和41）年度第10回中国・四国大学学生選手権大会から数多くの優勝を果たしていた。彰は、1971（昭和46）年、岡山大学工学部に入

学した年に、中国・四国大学学生選手権大会で男子シングルス3位、中国5大学大会では先輩とのダブルスで3位、さらに中国・四国・九州学生大会ダブルス3位の成績を残した。そして、シンガポール遊学から戻って出場した1973（昭和48）年、中国5大学大会では、岡山県の強豪校西大寺高校バドミントン部出身の小田氏とのダブルスで準優勝。翌年の同大会では男子シングルス優勝、さらに小田氏とのダブルス優勝を果たし、中国・四国大学大会でも団体と男子シングルス優勝、小田氏とのダブルスで3位という結果を出した。ダブルspartnerの絆は強く、彰が小田氏を語る時は必ず「俺のパートナーの小田」と前書きが付いていた。

時を同じくして世界では、ルディー・ハルトノが1966年16歳で世界戦にデビューしていた。1968年から全英選手権男子シングルス7連覇の偉業を成し遂げたインドネシアバドミントン界のスーパースターは、彰より4歳年上で世界中のバドミントン競技に関わる若者達の憧れの的でもあった。

彰は岡山大学2回生の年、ルディー・ハルトノに会いたいという熱い思いでインドネシアを目指した。しかし、途中下船したシンガポールに目的半ばにして腰を下ろし、シンガポールポリテクニク大学に籍を置くことになった。このシンガポールでの滞在中に出会った多くの人達との関わりが、その後の彰の人生を決める大きなターニングポイントに繋がっていく。1年後、日本に戻って大学に復学したが、その時すでに新たな出発を決意していた。彰は大学の卒業を待たずに、アルバイトで得た資金を持ってマレーシアに向かった。当時、同じ下宿で暮らしていた弟は「アルバイト三昧で、家にいるときは、寝ている姿しか見たことがなかつ

た」と彰との思い出を話してくれている。

こうして彰は、1975（昭和50）年、マレーシア・スラゴール州サバ・ブルナム市にあるアラブ高等学院に入学し、年下の学生たちと寮生活を送りながら新たな挑戦を開始した。

バドミントンはマレーシアの国技でもあり、子供たちは小さい頃からラケット

を持って余暇を楽しんでいた。暑さも和らぐ夕暮れになると、屋外のコートに近所の人たちが集まってくる。彰も、当然のように学友たちとバドミントンに興じたが、日本から来た同級生は驚くほどバドミントンが強かった。彰は、同市の社会人チーム・ガルーダにも所属して、さらにパワーアップしていた。そして、その年のサバ・ブルナム地区学生大会の男子シングルスで見事優勝を果たしてしまった。それは、翌年にシンガポールで開かれる第10回トマス杯のアジア予選の出場権利を有するものでもあったが、日本国籍を持つ彰にはその権利が無かったため、特別に通訳として同大会に参加を許可された。このクアラルンプルで開かれたアジ



サバ・ブルナム、アラブ高等学院の看板



学友たちと

ア予選には、日本から小島一平氏と銭谷欽治氏が参加していたが、その時起こった出来事が、マレーシアでは大きな話題になった。それは、サバ・ブルナム地区の学生大会において彰との決勝戦で敗れた選手が、日本のトッププレーヤーに簡単に勝利してしまったことに対する驚きだった。もちろん日本には届かなかったが、彰の予想外の強さが証明されたことがマレーシアでは広く流布されたという。当時、同じスランゴール州には、翌年18歳以下の国内大会にデビューする、後にマレーシアの国民的英雄となる16歳のミスボン・シディク少年も暮らしていた。

### 異郷にて〈エジプトからリビアへ〉

彰は、1976（昭和51）年12月、アズハル大学神学部入学のため留学先をエジプトに変更して、一人マレーシアから旅立った。すでにマレーシアでアラビア語を習得していたため、カイロ市に滞在する日本人留学生たちに「とんでもない日本人がいる」と驚かれたという。ある時、彰は、カイロ市から郊外へ向う列車の中でスリに遭遇した。カイロの市内を走るトロリーバスや長距離の大型バス、そして列車はいつも人で溢れ込みあっていた。彰は、突然その男の傍に寄り、耳元で囁いた。男は、はじめは威嚇的な様子を見せたが、最後には観念して財布を渡してその場を立ち去った。そのスリにとって、まさか目の前のアジア人が巧みなアラビア語で説教を始めるとは思ってもみなかったことだろう。彰は、このことを「財布を返すなら何も言わない。返さないなら大声を出して警察を呼ぶことになるだろう」と言ったと話していたが、周りの乗客たちは誰も気付かなかった。それは、彰のエジプト人



も驚くアラビア語力が証明される結果となった出来事だった。さらに、彰はマレーシア政府の援助での留学だったこともあり、在カイロ・マレーシア人学生会に所属して彼らと行動を共にすることが多かった。マレーシア留学で培われた語学も「マレーシア人より、マレーシア人のようなマレーシア語を話す」と言われるほど長けていた。

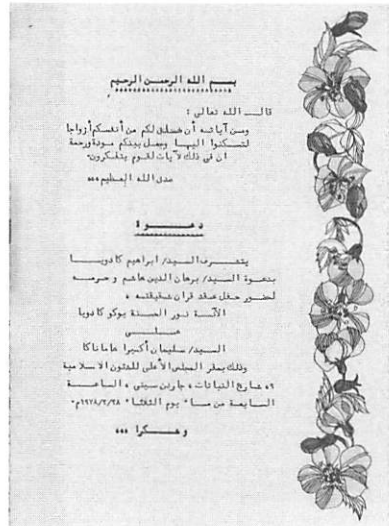
そして、この地に、驚くほどの速さで結婚を決めることになる、思いがけない出会いが待っていた。彰は、「生涯、結婚はしないかもしれない。したとしても、相手は日本人ではないだろう」と母親に話していたという。母は「日本人と結婚すると聞いて何よりそれがあった」と後に語っている。



エジプト・カイロ、アズハルモスクにて婚姻式

1978（昭和53）年2月28日、エジプト政府が用意してくれた会場で盛大な結婚披露宴が開かれた。それは大きな偶然と、多くの人たちの善意によって成り立った結婚だった。

彰は、家族で暮らすことを前提に、エジプトから留学先をリビアに定めた。その時のリビア



披露宴の招待状

の正式名称は「社会主義リビア・アラブ・ジャマヒリーヤ」といって、革命評議会リーダーのカダフィ大佐の指導のもとにあった。当時のリビアは社会福祉が充実しており、教育も医療も国が保証してくれるためお金がかからなかった。寧ろ、生徒には奨学金が与えられ、安心して勉学に励むことができるのが一番の利点だった。1979（昭和54）年1月、入学を決めたイスラムダアワ大学附属トガール校の寮の一部屋から新生活がスタートした。

この学校には、アジア・アフリカの国々から集まった留学生が寮生活をしながら学んでいたが、日本人は彰だけだった。授業は、すべてアラビア語で行われ、ここで2年間学習の後大学の入学が許可されることになる。寮の中庭にある広場では、放課後や休日には学生たちが集まりアジア系の学生たちはセパタクローやバドミントン、アフリカ系の学生たちはバスケットやサッカーをして楽しんだ。学生たちが催すスポーツ大会でバスケットの試合にも



リビア、イスラムダアワ大学長・  
宗教大臣シェイフ・スビ邸訪問

懇願されて加わったが、大きなボールが手につかず、バドミントンと水泳以外のスポーツは全く駄目だということが露呈される結果となってしまった。その年に生まれた長女は、留学生たちと一緒に1歳の誕生日をここで祝った。

1980（昭和55）年、無事に大学入学が決まり、大学があるトリポリ市の中心に転居した。大

学には単身者のための寮はあったが、妻帯者は住む場所を探さなければならなかった。新しい家は、市の中央にある「緑の広場」と呼ばれる大きな広場から放射線状に伸びた通りの一つ、スークトルクと呼ばれる市街地にあった。そこはその名の通り、トルコ人が営む市場（スーク）の外れに位置していた。優に2メートル以上はある重い扉を開けると屋根のない中庭が広がっていて、1階に2つ、2階に2つ、ドアで仕切られた部屋があった。1階にはマレーシア人夫婦とインドネシア人夫婦、2階にはインドネシア人夫婦が入居していて、その2階の空いている一部屋を借りることになった。彰は、大学ではチェス部に所属し、バドミントンの指導も任されていた。リビアでは宗教的な慣習もあって、女性の買い物には男性も同伴しなければならないため、金曜日の休日には家族全員で、離れた市場までベビーカーを押して買い物に出かけるのが常だった。ここで長男も誕生し、ますます彰に任される仕事も増えていった頃、政治的な諸問題が大学や市内にも広がり始めた。同年5月には、経済犯狩りの目的で行われたリビア・ディナール紙幣の切り替え政策のため、人々が交換所に押し寄せて長い列ができる事態となった。巨大スーパーマーケットはあったけれど品薄状態で、米や肉は配給制で列に並んで買わなければならなかったし、粉ミルクは全く手に入らなかった。また、翌年10月10日、隣国エジプト・カイロ市では現職のサダト大統領が暗殺されるなど、アラブ世界は緊張状態にも直面していた。

そんな中、1歳半になっていた長男のちょっとした怪我の通院がきっかけとなって、彰は家族を日本に返すことに決めた。そして、大学2年目の長期休みを利用して家族を伴い一時帰国し、妻子を松山の父母の元に預けて、残り2年間の大学生活を続けるた

め単身リビアへ戻った。妻子は、その後1年は愛媛県北条市（現・松山市北条）にある彰の父母の家で暮らし、翌年は妻の実家がある埼玉県上福岡市（現・ふじみ野市）に移り住んで、彰の帰りを待つことになった。

父がコーチをしていた丸善石油松山バドミントン部は、日本実業団選手権大会には1957（昭和32）年の第6回大会から出場し、1972（昭和47）年の第22回大会において、父の40歳男子3年連続優勝に対して全日本実業団技能賞が与えられた。その出場回数は連続19回（通算21回）を数えた。県選手権大会においても、1962（昭和37）年から男子シングルス15年連続優勝を重ねていたが、丸善石油松山は1982（昭和57）年にコスモ松山石油株式会社と社名を変更することになった。それを機会に、父は定年を待たずに53歳の年に退職を決めた。丸善石油松山実業団チームも1982年第32回大会を最後に、その姿を消すことになった。

彰は2009（平成29）年に発行された雑誌のインタビューの中でこのように語っている。「父が教えた選手たちが、コスモ石油の中で全国転勤となって各地で選手として活躍され、今では各地のバドミントン協会役員として、若手の育成をされています。会うと『あの時の坊主か』と懐かしんでくれます」。彰のバドミントンは、父と丸善石油松山バドミントン部に育てられたと言えるだろう。そして、父の思いは、確かに彰に受け継がれている。

彰の2歳違いの弟・勉は、1973（昭和48）年4月、彰と同じ岡山大学に入学し、シンガポールから戻っていた彰の下宿先で二人の共同生活が始まった。弟も負けず劣らず、父に鍛えられたバド

ミントンは強かった。1975（昭和50）年夏、彰がマレーシア行きを決めた時には部員百人を数えるバドミントン部のキャプテンを務める弟の統率力と人望は、兄を遥かに超えていた。

1981（昭和56）年、弟は父のバドミントン専門店開業の夢を叶えて「ラケットショップハマナカ」を松山市平和通りに構えた。父も、1982（昭和57）年以降は大会出場所属名を「丸善石油松山」から「ラケットショップハマナカ」に変更した。父と弟の事業も軌道に乗り、店舗は3年後、現在の西一万町に場所を移した。

弟は、国際審判員の資格を得ていた。1997（平成9）年にアジア・バドミントン連盟認定国際審判員、1999（平成11）年にアジア・バドミントン連盟公認国際審判員を取得した。さらに2004（平成16）年、世界バドミントン連盟認定国際審判員の資格を得た時には、日本ではまだ3人しかこの資格を持っておらず4人目の資格保持者となった。これは国際大会の審判に携わるためのもので、1934（昭和11）年に設立された国際バドミントン連盟IBF（International Badminton Federation）が基盤となって、2006（平成18）年に改称された世界バドミントン連盟BWF（Badminton World Federation）によって定められている。本部はイギリス・チェルトナムから、現在はマレーシア・クアラルンプルに置かれている。

彰は弟の資格試験挑戦を応援し、国際大会の放映中には、母譲りのよく通る弟の声を聴き分け「おう、やっとなるな」と、その活躍を喜んでいた。

## 第二章 帰国から後の日々

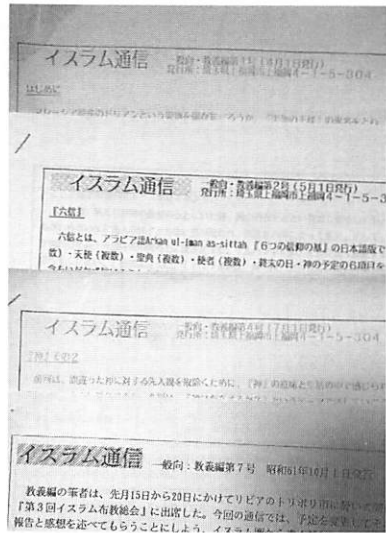
---

## 埼玉にて

彰は、1983（昭和58）年9月のハッジ（メッカ大巡礼）を終えて、翌年10月マレーシア～エジプト～リビアと巡った約10年に及ぶ留学から無事に日本に戻った。妻子は、埼玉県上福岡市（現・ふじみ野市）に住む両親と同居していたが、まず市内にアパートを借りて家族との水入らずの生活を始めた。リビアから布教師としての給料が送られていたが充分というわけにもいかず、アラビア語の通訳の仕事始めて依頼があればどこへでも出かけた。ある時は、新造船・進水式での「クルアーン朗読」依頼を受けて長崎へ出かけ、またある時は、鉄鋼関係企業の通訳として北海道室蘭市へ赴いている。

世界的には、1980年からイラン・イラク戦争が本格化し、イスラムについての国際的な印象もあまり良いものとは言えなかった。さらに情報も偏りがちで、国内においてもイスラムの正しい理解が十分に得られていなかった。彰は、宗教法人イスラミックセンタージャパンが主催する勉強会で宗教教義を担当し、都内に電車で通っていた。また、1985（昭和60）年4月から「イスラム通信」第1号を自らパソコンで作成して、月刊の発行を開始した。内容は、一般向けのイスラム教義に関する学習用だったが、第7号（10月発行）では、同年9月にリビア・トリポリ市で開かれた「第3回イスラム布教会議」出席の報告が掲載されている。1986（昭和61）年6月には、通産省が企画する「イスラム経済研究会」において講義を行った。議題は「1970年代後半から80年代前半にかけてのイスラム世界の社会的変遷」というものだった。彰は、その

中でマレーシアとリビアを例に挙げ、それぞれの実情を述べている。また、日本の宗教的行事を学ぶ目的で、隣の川越市にある葬儀社でアルバイトをした。大学の卒業論文は「日本における仏教」と題してアラビア語で書き上げており、日本人ムスリムの自分たちにとって日本での葬祭が、これから最も重要な問題になってくるだろうと予想していた。その後も長く、彰にとって墓地の問題は大きな案件の一つとなり、検討を重ねていた。



「イスラム通信」制作・発行

彰は、好きなバドミントンの練習も再開した。当時、千葉県の実業に就職していた元愛媛大学バドミントン部キャプテンだった真柄浩氏とダブルスを組んで、埼玉の大会で優勝している。上福岡市（現・ふじみ野市）や狭山市にあるレディースバドミントンチームの指導も行いながら、松山店から商品を預かって販売することもあった。多忙ではあったが、彰は意気揚々と日本での仕事を開始し、1985（昭和60）年12月にはここで次男も誕生した。帰国から2年、長女6歳・長男4歳、家族五人暮らしが始まっていた。

その頃、愛媛県松山市で父と弟が営むバドミントン・テニス専門店も軌道に乗り、父は次の構想を練っていたところだった。彰は、その時の事情をこのように話している。「松山のラケット



ショップハマナカが、人を雇って県内に支店を出そうとしていたので、『私にやらせてくれ』と嘆願して、東京での通訳の仕事を辞めて故郷の愛媛にUターンした。ちょうど円高で通訳業界にも不況が訪れ、さらに通訳という神経を使う仕事に嫌気がさしていたこともあって、実は渡りに船だったのである」。リビア国内の事情もあって、送られてくる給料が途絶えることが予想され、経済的理由も大きく影響して新しい生活が選ばれたのである。

## 新居浜とバドミントン

彰は、1988（昭和63）年2月、父が新しい出店を予定していた愛媛県新居浜市に家族と共に転居し、「ラケットショップハマナカ新居浜店」を同年11月1日に開業した。店舗を構えた場所は、市の中心地に古くからある有名な登道商店街の中にあって、元接骨院の木造の2階建を住居兼店舗として改装して出来上がった。彰が新居浜店を開業するにあたり、父のアドバイスは「役員の言うことをよく聞き、新居浜のバドミントンのために協力するように」というものだった。父が、出店を選んだ新居浜市には深い因縁があった。彰は、このような理由を明かしている。「私を新居浜に連れてきた張本人は、ドンと呼ばれる瀧山さんその人であったと理解している。瀧山さんが、私の父に支店を新居浜に出すように勧めていたのは、新居浜のバドミントンの質・量の両面での向上のために協力者を一人でも多く確保したいという思いからだ。そしてゆくゆくは、県都松山に勝るとも劣らないバドミントン王国新居浜を目指していたに違いない」。このドンと呼ばれる瀧山氏こそ、東京で行われた国内初の国際大会第6回トマス

杯で、父とバドミントンを介して友情を結んだその人だった。

瀧山氏は家庭の事情ですでにサンバタを退職し、新居浜市に在住していた。瀧山氏の帰郷を知った父は、1971（昭和46）年に、愛媛県バドミントン協会役員に早速推挙していた。瀧山氏曰く「京都の大学に在学中バドミントンと出会い、魅了されて夢中になった」。瀧山氏は在学中に関西学生連盟の役員を務め、卒業後は、日本で唯一のバドミントン専門の製造販売会社サンバタに入社し、バドミントン業界にも精通していた。彰は「中央とのパイプ役として、またイベントノウハウを熟知した頼もしい存在だった」と語り、常日頃「瀧山さんは私の新居浜の父だ」と言っていた。その瀧山氏は、彰に「新居浜を県のトップにしてくれるか」という目標を与えた。

新居浜は、愛媛県のバドミントン史にとっても特別の所だった。県におけるバドミントンの流れは、1950（昭和25）年秋、松山家庭裁判所の中庭で初代理事長・西本義彦氏を中心とした仲間たちによって産声を上げ、松山・新居浜・今治へと広がっていった。新居浜では、その翌年の6月に新居浜西高校の体育教官だった片上進氏が、岡山県在住の指導者を招いて西高校で講習会を行ったのが始まりである。この講習会に参加した西高生が、愛媛県で初めて高校にバドミントン部を作り大会に出場している。1952（昭和27）年8月に開かれた東北国体には、愛媛県代表として新居浜西高校バドミントン部の男子一名が選出されたという記録がある。1958（昭和33）年、第2回県実業団選手権大会では、住友金属鉦山・別子鉦業所が男子団体の初出場・初優勝を飾り、翌年の第3回大会でも住友化学菊本が男子団体優勝を果たした。1959（昭和

34)年、第9回全日本実業団選手権大会(香川県高松市)には、住友金属鉾山・別子鉾業所と住友化学菊本と住友化学新居浜の3団体が出場しており、当時の新居浜市の実業団チームの充実ぶりがうかがえる。

父が、本格的にバドミントンと関わるきっかけとなったのは「打倒新居浜」という目標だった。「まず、新居浜に勝つために練習に励んだ」と当時のことを語っている。

国立新居浜高等専門学校(通称・新居浜高専)バドミントン部も新居浜のバドミントンの発展に多大な貢献をしていた。1962(昭和37)年4月、新居浜高専は1964(昭和39)年に愛媛大学工学部が松山市に移転するまでの間、その敷地内にあった校舎の一部を借りて開校された。そこではすでに、工学部職員ら20名ほどがバドミントンの練習をしていた。バドミントンが盛んな愛媛大学の刺激を受けて、愛大生や教職員と共に高専生たちの活動も始まり、翌年には部として承認された。当時学生主事だった片上進氏(元・新居浜西高校体育教官)が指導を行い、1967(昭和42)年には、愛大卒業と同時にバドミントン部キャプテンだった平木弘一氏が新居浜高専教官として赴任し、バドミントン部顧問となった。

新居浜高専バドミントン部は、1981(昭和56)年、第5回全日本高等専門学校選手権大会において男子団体優勝を飾り、翌年度の大会も連覇を果たした。その後も、県選手権大会の常連となるような強い社会人選手を多く輩出し、実業団チームとの両輪で強い新居浜のバドミントンを支え続けた。平木氏は、愛大バドミントン部の頃から父とは懇意で、新居浜に移ってきた彰を何かと気

遣ってくれた。

新居浜は、家庭婦人バドミントンにおいても先駆者的立場だった。女性の活躍としては、1957（昭和32）年、第7回全日本実業団選手権大会の女子団体に、住友金属鉱山・別子鉱業所が出場した記録がある。1967（昭和42）年に住友化学体育館、1972（昭和47）年に住友重機体育館が相次いで落成され、この住友化学の体育館で社員の奥さんたちが現在のグリーンクラブを結成したのが、新居浜における家庭婦人チームの始まりである。その後、企業の体育館を利用した家庭婦人サークルが次々と誕生し、同時に市が主催するスポーツ健康教室出身の家庭婦人も校区サークルで活動を始めた。

1973（昭和48）年には、新居浜市バドミントン協会主催で県下初の家庭婦人大会である第1回新居浜市家庭婦人バドミントン大会が開かれた。1976（昭和51）年11月21日には、愛媛県家庭婦人大会が開かれたが、参加11団体のうち新居浜勢は10団体を数えた。

また、1980（昭和55）年6月13～18日第30回全日本実業団バドミントン選手権大会が、新居浜市民体育館新築こけら落としで開催された。この時、大会の準備・運営に家庭婦人が大きな力を発揮し、その尽力に対して全日本実業団連盟より異例の記念の楯が贈られた。それを優勝楯として、四国で初めての家庭婦人オープン大会となる第1回新居浜オープン家庭婦人バドミントン大会が翌年2月15日に開かれる運びとなった。平成13年度22回大会からは『アザレアオープン』と名称を変えて盛大かつ充実した内容の大会が続けられている。1978（昭和53）年、瀧山氏の尽力により、5年後の日本家庭婦人バドミントン連盟設立に先駆けて、愛媛県

家庭婦人バドミントン連盟が設立された。愛媛県家庭婦人バドミントン連盟は、2000（平成12）年から名称を愛媛県レディースバドミントン連盟と改め、1987（昭和62）年から瀧山氏が会長職を務めた。

愛媛県チームは、1983（昭和58）年、第1回全日本家庭婦人大会に初参加しているが、1990（平成2）年、全国家庭婦人選手権大会クラブ対抗の部において、新居浜のチーム「双葉」（監督・瀧山一甫氏）が初優勝を飾り、その後、4回連続優勝の偉業を成し遂げていることは特筆すべきである。優勝チームは、3年間出場ができないというルールのため、4回連続優勝がどれほど偉大なことかが理解される。

新居浜市では「スポーツの盛んな町」のスローガンのもと、1970（昭和45）年、第1回市民体育祭が開催された。当時は8校区（学校区域）の参加が記録されているが、行政の強い後押しで各校区の小中学校体育館や講堂で行われたバドミントン教室「スポーツ健康教室」によって次々と愛好者を増やし、ほとんどの校区にサークルができるまでになった。第5回市民体育祭には男子14校区、女子13校区の参加を数えた。また、待望の市民体育館が100円の入場料で利用できることもバドミントン愛好者を増やす要因となっていた。

まず、彰は、店の開業を前にバドミントンをしたいと訪れた四国電力に勤務する3人の若者と一緒に、社会人クラブチーム「スマッシュ」を立ち上げた。松山東高校の後輩松野木聡氏から、松山で結成されていた「ハルトノファミリー」の「新居浜ハルトノ」

を作らないかという提案も大きく影響していた。「ハルトノファミリー」とは、インドネシアのスーパースター、ルディー・ハルトノの名を冠した岡山大学OBが中心となって立ち上げた、50名ほどの会員を持つ松山市の社会人チームだった。それに対抗して彰が作った「スマッシュ」は、競技志向の強い勝つための練習をするチームとして出発し、週1回の定期練習を行いながら結成から2年目には、県大会で優勝者を出した。そして7年後には県大会の団体戦で優勝するという結果を出すに及び、彰は瀧山氏との約束を果たすことができた。

次に、社会人の活動と共に実行しようと、彰が考えたのは普及活動だった。店は、宮西小学校校区にあったが、ここは新居浜の中でもジュニアの普及が遅れていた。彰は、校区にジュニアクラブを作ることで、中学にもバドミントン部ができ、さらに高校にもっと部活を増やせば、子供から社会人までバドミントンを広げていけると考えた。1990（平成2）年4月、宮西ジュニアクラブが誕生し、自身も宮西小学校体育館で練習を開始した。同年参加した第30回県選手権大会では、弟と30歳男子ダブルスで見事優勝している。前の年に生まれた次女は、この宮西小学校でバドミントンを始めることになる。

平成に入り徐々に不景気の波が押し寄せてきた頃、彰は、今後の普及への問題点も思考しながら次の行動に出た。それは、次世代の人材養成とサークル間の交流を念頭に置いた新たな試みでもあるリーグ設立の構想だった。それについてはこう語っている。「不景気が到来したのは、平成に入って暫くしてからのことである。市民大会参加人数が減少傾向に転じていたことに危機感を覚

え、バドミントン愛好者が減らない方法はないかと考えた。当時、大阪府のバドミントン協会でも活躍していた大学の同級生で高校教諭の土居毅氏と意見交換しながら、リーグ結成を思いついた。新居浜のソフトボールリーグや大阪社会人リーグなどを参考に、約1年間検討を重ね、瀧山氏から『本部がしっかりしていれば続くだろう。やってみなさい』という助言をもらった」。1993(平成5)年、市協会の合意を得て、新居浜リーグが翌年4月から5部制29チームの参加でスタートした。そして、それは設立10年目を待たずに、11部制67チーム参加人数700名に達するという結果を出した。

彰は、「すべての年代層にバドミントンができる環境を作ること。そして、すべての小学校・中学校・高校・校区にバドミントン部を作り、それらの指導者が連絡を取り合って選手の養成ができるようになることであり、さらに上を目指す選手にはその環境の中で計画性のある指導を受けさせられること。また、トップになれない選手に対しても、楽しくバドミントンを続けられるような環境を準備することである」。さらに、その結果については「誰



新居浜市バドミントン協会役員(片上氏・瀧山氏他)、  
2001年創立50周年記念

が一番貢献したというものではなく、指導者陣の熱心さとその数、役員それぞれがいろいろな分野で力を発揮していたからに他ならない。大きな流れというものがそうさせるのであ

り、そのような大きな流れは一人で作り出せるものではない。多くの人たちが協力し、かつ分担して出来上がるものなのである」と、自らの想いを寄稿文の中に綴っている。

## 彰とマレーシア

彰は、1999（平成11）年からマレーシア・スランゴール州にあるバドミントンチーム「ヌサ・マハスリ Nusa Mahsuri」との交流を始めた。現役の国際選手も所属しながら、次世代を担うジュニア選手や一般の受講生も受け入れ指導していたこのチームは、マレーシアにおける国民的英雄であり、首相の次に有名人とまで言われているシディク五兄弟の長男ミスボン氏が率いるチームである。ムハンマド・ミスボン・シディク氏は、1960年2月スランゴール州バンテン市生まれ。1976年から国内大会のシングルス優勝を重ね、国際大会では1982年全英オープン男子シングルス準優勝を果たしている。その時の優勝者はデンマークのモルテン・フロスト選手だった。その他、数々の国際大会で輝かしい戦績を残していたミスボン

氏は、1996年36歳の時にクラブチーム「ヌサ・マハスリ」を発足させた。ミスボン氏のバンテン市にある生家には、道路



ミスボン氏の実家にて、御両親と共に



に面した敷地入口に大きなシャトルのオブジェがあり、これが来客者には大事な目印になっている。敷地内の建物に囲まれて屋外にバドミントンコートが造られ、各部屋には複数のベッドが用意されていた。ミスボン氏の記憶にはないが、彰は1978年リビア行きを前にしたマレーシア滞在中と1984年リビアからの帰国の途中にマレーシアに立ち寄り、ミスボン氏不在中のバンテン市にある実家を訪ね、お土産を届けている。

ミスボン氏が、その足跡を残したバドミントンコートに立った日本人の一人、愛媛大学バドミントン部出身の高橋徹氏（現・松山市バドミントン協会常任理事）は愛媛大学大学院在籍中、マレーシアでのバドミントン修行を希望していた。それを知った彰は、推薦状をマレーシア語で書き上げてミスボン氏の両親に手渡すように促した。1999（平成11）年3月、その手紙を携えてバンテン市にあるミスボン氏の実家を訪れた高橋氏は、滞在の許可を得て日本人として初めて「ヌサ・マハスリ」のメンバーとして練習する望みを叶えた。

ミスボン氏の指導方法は門外不出だったが、彰はそれを何とか口説いてミスボン氏から公開する許可を与えられていた。ミスボン氏は彰の要望に応じて、2004（平成16）年2月、元デンマークナショナルチームのコーチとしてジュニアのビクター・アクセルセンの指導もしていたサリム・サメオン氏を愛媛県に派遣した。2ヶ月間に及ぶ滞在の間に各所で講習会を開き、彼はミスボン氏からの指示通りマレーシアのコーチングの技を惜しみなく披露した。彼の真面目な人柄は子供たちや指導者の信頼を得て、充分にその任務を全うした。



「ヌサ・マハスリ」クラナジャヤ体育館にて、新居浜の中学生とコーチたち

さらに、彰は2004（平成16）年10月と2008（平成20）年8月には、新居浜市のバドミントン部の中学生やジュニアクラブのコーチを連れて、「ヌサ・マハスリ」の練習に参加するプロジェクトを実行した。そして、その後も交流を重ねながらお互いの信頼関係を構築していった。「子供たちの目の輝きが違っています。世界のスピードを見て、練習の励みになってくれれば嬉しいです。新居浜の選手で、技術が全国レベルの選手は、海外合宿にも連れていきます。外国の選手と一緒に練習することで国内では味わえないスピードが体験できます」と、彰は雑誌のインタビューで応えている。

2006（平成18）年10月には、東京で開催された第25回ヨネックス・ジャパンオープン大会に出場するために来日した、ハフィズ・ハシム選手（2003年全英オープン男子シングルスチャンピオン）と「ヌサ・マハスリ」メンバーのズルハリ氏、当時マレーシアナショナルチームコーチのミスボン氏が、彰の希望を聞き入れて大会前に愛媛県を訪れた。新居浜市山根体育館において、愛媛



「ヌサ・マハスリ」バドミントン講習会（山根体育館）

県バドミントン協会と新居浜市バドミントン協会共催の1日だけの講習会が行われた。世界のバドミントンプレーを目の当たりにするという貴重な体験ができた、後にも先にもこれ一度となるだろう大イベントだった。新居浜での2泊3日滞在后、一行は次の目的地愛知県に向けて出発し、彰もこれに随行した。この年のヨネックス・ジャパンオープンでは中国のリン・ダン選手が優勝したが、翌年の大会ではミスボン氏がコーチするマレーシアのリー・チョン・ウェイ選手が見事優勝を果たした。

父が、1964年のトマス杯に訪れたコップス選手を松山に招いたように、あれから42年後に彰もまた、父と同じ思いでこれを踏襲した。

2011（平成23）年、県の依頼を受けてミスボン氏の推薦によりイズワン・イブラーヒーム氏がやって来た。これは2017（平成29）年の愛媛国体に向けての選手強化が目的だった。イズワン氏は当時25歳、教員資格を持つ小学校教師でもあった。来県の年には、全日本ジュニアナショナルチームのコーチとして東京へ派遣

され、桃田賢斗選手も参加した韓国遠征に帯同した。翌年、桃田選手が世界ジュニア大会で優勝を飾ったという話題はマレーシアにも伝わり、同時にイズワン氏も時の人となっていたという。彼は松山で産まれた二



イズワン氏による熱心な指導

人の娘と共に、2015（平成27）年愛媛県滞在約4年半に及ぶ仕事を終え、故郷のクランタン州コタバル市に帰った。その後、イズワン氏はその州のジュニアチームの指導に従事し、翌年1月には彼が指導するジュニアチームの子供たちを引き連れて来県し、松山市で交流試合を行ってさらなる親睦を深めた。

愛媛県バドミントン協会は、2020年東京オリンピックのマレーシア・バドミントンナショナルチーム事前キャンプの候補地として手を挙げた。他には、大分県と秋田県が名乗りを挙げていたが、2011年から続く愛媛県とマレーシアの強い絆を示して2016年10月19～25日、マレーシアジュニアナショナルチームとマレーシアパラバドミントンチームの選手を招き、新田高校で合同練習・交流試合が企画された。その時に参加していたチョンキン選手は、この後、韓国で行われた世界ジュニアオープン大会でU16男子シングルスチャンピオンになっている。

2017年8月、今度は愛媛県バドミントン協会役員と県ジュニア強化選手・監督がマレーシアを訪問し、彰は県バドミントン協会松野木理事長に随伴した。1日目にはクランタン州のバドミント



東京オリンピック事前キャンプ地  
招致決定調印式（マレーシア）

ン練習場を訪れ、指導に汗を流すイズワ  
ンコーチと松山遠征  
に参加していた子供  
たちとの再会を果た  
した。翌日には場所  
をクアラルンプルに  
移して、マレーシア

バドミントン協会を訪問し、会長ノルザ氏・理事長ローレンス氏・総監督フロストハンセン氏・企画担当ヤップ氏、及びクランタン州協会会長ナハルディン氏と4時間に及ぶ会議が行なわれた。この2日間の重要な話し合いにおいて、彰のマレーシア語が大きな効果を挙げた。その労が報われ、2020東京オリンピックマレーシアバドミントンチームの事前キャンプ地として愛媛県が正式決定され、2018年7月27日にはクアラルンプルにおいて中村愛媛県知事、佐川砥部町長ら県役員臨席のもと調印式が行われた。彰の役目は、これをもって無事に終了し、大きな肩の荷を降ろすことができた。

## 新居浜マَسジド

「ラケットショップハマナカ新居浜店」の開業から15年、商店街の大きなスーパーマーケットが退去し小さい店もその数を減らしていく中で、木造だった店舗もさらに老朽化が進み、移転を考えなければならなくなった。15年前と同様に地の利を得た瀧山氏が、また抜群の立地の移転先を見つけてくれた。この時、彰は念願だっ

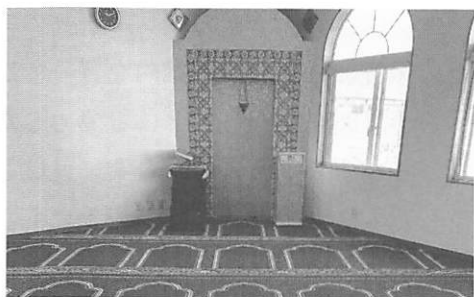
た Masjid (イスラム礼拝施設) を併設することを決心し、その建物の条件として百人集まっても十分に耐えられる2階であることを要望した。屋上には、中央に大きいドームと左



新築移転ラケットショップハマナカ  
新居浜と新居浜 Masjid とドーム

右に小さいドームの計3つを配置し、それぞれのドームの天辺にはマレーシア・コタバル市から取り寄せた真鍮の三日月を取り付けること、色は萌えるような若草色にすることを決めた。工事は2003(平成15)年6月から開始され「新居浜 Masjid」を2階に据えた「ラケットショップハマナカ新居浜店」が同年9月、同市一宮町に完成した。

Masjid 内のミフラーブ(メッカの方向を示す場所)に飾られているタイルは、香川県の観光施設内のトルコ店から購入したイスラム模様のトルコ製の物を、知り合いの大工さんに貼り付けてもらった。床は鉄骨の上に置いた土台の上に薄い敷物を直貼りしていたが、現在の Masjid に敷かれている絨毯は、2013(平成25)年に愛媛県を公用で訪れていた駐日サウジアラビア王国特命全権大使アブドゥルアジーズ・トルキスターニ



駐日サウジアラビア大使より寄贈された絨毯

氏が、マスジドに立ち寄った際に寄付を約束し、後に贈られた物である。その他マスジドには、彰が留学中に集めた宗教関係のアラビア語の貴重な書籍、留学生が帰国時に置いて行ったインドネシア語・マレーシア語の本類、マスジドに訪れた人たちのお土産の品々、寄付された無料の配布冊子・書籍の数々が大事に保管されている。マレーシアへ出かけた際には礼拝着・礼拝帽・礼拝用絨毯・キブラコンパス等々を買い付け、入信者にはこれらを無料で配布していた。そして、彰は常々、マスジドは単なる礼拝のためだけの施設ではなく、本来は学問研鑽の場としての役目もあるのだと語っていた。

マレーシアでは、1981年第4代首相に就任したマハティール首相が人材育成の一環として「ルック・イースト政策」を打ち出し、東方の国・日本や韓国の成功に学ぶために留学生や研修生を派遣して自国の発展につなげようと考えていた。1988（昭和63）年、市内泉宮町に新居浜店が開業した当時は、そのためもあって新居浜高専にマレーシアからの留学生が大勢来ていた。彰は、彼らや彼女らの父親代わりとしての役目も果たし、入学式・卒業式さらには学校行事にも積極的に参加していた。国へ仕送りをしている学生には、ラケットのガット張りのアルバイトを依頼して援助した。休日には車で四国案内を買って出て、各地の珍しい風景や食べ物を見聞を広めることにも協力した。留学生との交流は途切れることなく続き、日本の企業に就職した学生や日本人と国際結婚をしたムスリムたちの相談相手にもなっていた。

2002（平成14）年8月、新居浜市別子山村にある宿泊施設を利用して「イスラムキャンプ」というイベントを実施した。神戸モ

スクからエジプト人シェイフのイマーン・モフセン氏を招き、希望者を募ってイスラム学習会と野外活動を共にした。初の試みであったが、彰はこれを恒例の行事にしようという考えも抱いていた。

2004（平成16）年8月には、屋上に大小3つのドームも出来上がり、彰の思いが込められた「新居浜マスジド」も多いに活躍した。彰は、マスジドは地域に開放されていなければならないと考えていたので、留学生間の交流や留学生家族の日本訪問時の宿泊、バドミントン交流に訪れた選手たちの滞在場所として、さらには遠方から講師を招いての講習会や講演会、また留学生が教えるマレーシア語教室や、彰が担当するアラビア語教室に使われた。また、地域のバドミントン関係の会議や集会にも用いられ、多くの人たちが集った。

新居浜マスジドには、市内に住む就労のインドネシア人、高専留学生のマレーシア人、中古車販売を営むパキスタン人などが数名でジュムア（金曜日礼拝）を行っていたが、平日は、授業や仕事があるため誰も訪れないこともあった。

1988年新居浜市に転居当初は、イード・ル・フィットル（断食月明け大祭）の集団礼拝を3年続けて新居浜高専の校内の一室を借りて行なったが、その時の様子が愛媛新聞で紹介されている。その後、彰は2003年「新居浜マスジド」開設まで、松山市にある愛媛大学内の講堂での礼拝に参加していた。当時、大学・大学院には出身地もさまざまな家族連れの留学生が多かった。「新居浜マスジド」開設後は、隣の西条市にある大企業で働くインドネシア人ムスリムたちと共に工場の敷地内で行った。多い時には百人ほ



ど参加したこともあったが、2013（平成25）年の工場の閉鎖に伴い、そこで働く人の数も減っていった。

四国4県は高速道路で繋がり、新居浜市からは九州に渡るための愛媛県最西端まで2時間半、岡山県と瀬戸大橋で繋がる香川県まで1時間余り、また大阪を結ぶ淡路島に及ぶ徳島県まで2時間、高知県にも1時間少々で行くことができる。この Masjid の名称を決める際には「Masjid 愛媛」「四国 Masjid」等々候補があったが、彰は「新居浜」という名前に拘った。「新居浜という所にある Masjid」なのだから「新居浜 Masjid」以外にないだろう、という彰の一声で決定した。彰は色々な意味で、この「新居浜 Masjid」を四国内の情報集積地としての「ハブ・Masjid」にしようと考えていた。もちろん、四国内にとどまらず大分県・広島県・岡山県もその行動範囲圏内に含まれ、さらには、ネットで世界中に繋がる「新居浜 Masjid」が、すでに構想されていたのである。

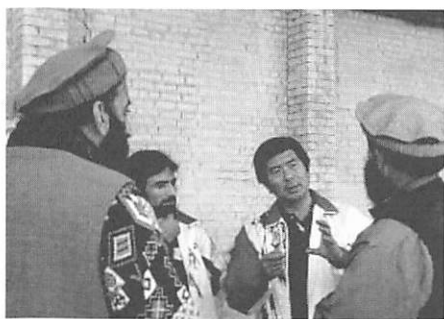
1997（平成9）年5月21日、彰は Islam HP を公開し、その中に Islam 相談室を開設した。これは最も古い日本語で書かれた Islam 関係のホームページであり、彰は、「日本国内に向けての Islam 情報発信であり、ネット上のムスリム社会の誕生である」と説明している。

2001（平成13）年12月9～21日には、Islam HP においてアフガン難民支援活動を行い、800万円以上の募金が集まった。その募金が有効に利用されるようにと、日本在住のパキスタン人の友人サイエド・ヤーセル氏と共にペシャーワルにそれを持参し、無事に届けた。その時に得た友情の印の「アフガン帽」は彰のお気

に入りで、今も大切にモスクに飾られている。

彰は、『日本に生きるイスラーム—過去・現在・未来—』に掲載された寄稿文の中で「ムスリムは、日々の礼拝を一人で行うよりは複数で行おうとし、ラマダーン月（イスラム暦9番目の月・断食月）には、日没と同時に仲間と一緒に断食明けをし、タラウィーフ（断食月の夜中）の礼拝を集団で行う。このようにムスリムは行を行おうとすれば自然と集まり始めるものである。また、遠く離れた異国の地に生活していれば出身を同じくする仲間たちと語らう場も欲しくなるものだ。…民族単位でグループを作ること何の問題もなく、その中でお互いの信仰を高めあい、協力し合うことは重要だ。ムスリム社会の一員として、さまざまな民族が集うモスクに足を運ぶことも重要である。日本人は土地の者として、企画運営面で大きな役割を担うことができる」と語っている。

2015（平成27）年1月2日、次女の婚姻契約式を新居浜モスクで執り行った。多くのムスリムの仲間たちが、遠くは広島県や松山市から彰の呼びかけに応じて集まってくれた。イスラム



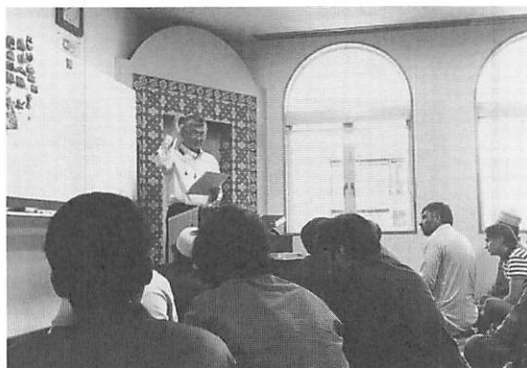
パキスタン・ペシャワールにて友人ヤーセル氏と共に



垂れ幕とアフガン帽姿のムスリムたち

の婚姻は二人以上の証人の前で契約書にサインをして成立するもので、彰は花嫁の後見人として立会い、友人のムスリムにイマームをお願いして滞りなく式を終えることができた。式の後には、いつも立ち寄ってくれるインドネシアやパキスタンのムスリムたちが持ち寄った手作りの料理やケーキで二人のために祝宴を開いた。極めて質素ではあったけれど、「心のこもった良い式だった」と多くの人たちから嬉しい感想が寄せられ、彰は心からそれを喜んだ。

彰は、「ジュムア（金曜日）のフトゥバ（説教）」をアラビア語で行っていたが、ある時から日本語でしようと思った。先に紹介した本の中で「マスジドにおける日本語でのイスラム指導の需要が高まってきつつある」と胸の内を語っていたように、色々なフトゥバを集めて勉強しながらコツコツと自らの言葉で話すフトゥバ集を作成していた。2017（平成29）年6月25日、翌年6月15日のイード・ル・フィットル（断食月明け大祭）の礼拝は、五十名以上の参加を集めて新居浜マスジドで行われた。彰は、自身が作り上げたマスジドにおいて、大勢のムスリムを集めてイードの礼拝



イード・ル・フィットルのフトゥバ  
新居浜マスジドにて（2018年）

のイマームを務め、日本語でフトゥバを行うという大きな仕事を完遂した。「新居浜マスジド」誕生から14年の歳月が流れていた。

## 第三章 達成から旅立ち

---

## 父と彰の夢

2017（平成29）年9月30日～10月10日第72回愛媛国民体育大会（国体）「笑顔つなぐ愛媛国体」（37競技・22991名参加）が実現した。愛媛県で行われた初めての国体は、1953（昭和28）年10月22～26日第8回大会で、四国4県において28競技が行われた。その時のバドミントン競技は、香川県善通寺市で開催されている。また、第48回国体1993（平成5）年は、「東四国国体」の名のもとに徳島県と香川県の2県開催となり、それは四国の4県がともに誘致を要望した結果、最終的に愛媛県と高知県が下りることになったものである。

県バドミントン協会も愛媛国体決定から5年間4度の国体視察（東京都・長崎県・和歌山県・岩手県）、さらに海外遠征・交流試合による選手強化への取り組み、そして多くの協会関係者やバドミントン競技者の協力によって、ついに愛媛県単独国体実現の日を迎えた。長く父の口癖は「愛媛で国体をやらんといかん」だった。全国規模の大きな大会を開催するためには、それを可能にする競技人口の底辺がしっかり作られていなければならないし、また逆にそれができれば、それを可能にできる力があるという証拠にもなる。地元開催国体の招致と運営は、25歳からの歳月をバドミントンの道一筋に邁進した父に与えられた、夢の達成でもあった。確かに、父のバドミントンにかける情熱は、中途半端ではなかった。それは、父の人生そのものだった。

父は2014（平成26）年秋、『旭日雙光章』を叙勲した。授章式

は東京で行われ、彰は、母も伴って三人で上京した。父の授章式が終わるまで母を連れて上野を散策し、2002（平成14）年にマレーシアへ両親を連れて出かけて以来の親孝行ができた。その後、2020（平成29）年には愛媛県功労賞を戴いた。それを伝える愛媛新聞の記事には「濱中氏は、県内のバドミントン競技の創生期か



父・誠、授章式出席（東京）



旭日雙光章 叙勲

ら国体などの選手で活躍し、指導者としても多数の優れた選手を育成。1950年の県バドミントン協会設立に関わり2003年には会長に就任し、長年県内の裾野拡大に力を注いだ。日本バドミントン協会理事や全日本ジュニアチーム監督なども務めた」と書かれている。

父は、1989（昭和64）年に台湾で開かれた「世界シニアバドミントン選手権大会」に出場、男子60歳代シングルス優勝を果たして世界一に輝いた。さらに、台湾モーニング大会においても6回の優勝を数え、以来、台湾バドミントン界と強い絆で結ばれている。

彰は、大学2年の夏に神戸から船に乗った。インドネシアのバ



憧れのルディー・ハルトノ氏と弟と共に

く世界デビューしていた。ヨネックスの創始者米山氏も回顧録で「インドネシアの大会に行き、まだ高校生だった彼の才気と際立つ強さに魅せられた」と話している。彼は、人柄でもプレースタイルにおいても多くの人を引き付け魅了していた。デビュー当時はダンロップ社と契約していたが、米山氏は何年もかけてラケットの提供を続けて契約にこぎつけた。「ハルトノとの契約がヨネヤマの世界的なブランドとしての確立に拍車をかけた」と語り、現在に至るまでハルトノ氏とヨネックスのビジネスパートナーの関係は続いている。

そのハルトノ氏が、2013（平成25）年11月15～18日、松山市で開催された第30回全日本シニアバドミントン大会に、インドネシアから来県した。中村愛媛県知事が公用でインドネシア・ジャカルタを訪問した際、知事の趣味でもあるバドミントンの話しをしたところ、直ぐにその場でレジェンド、ハルトノ氏との対面が実現した。そして、愛媛県で開催される全日本シニア大会に参加を依頼したところ、彼は快く承諾してくれたという。大会最終日には、県武道館においてハルトノ氏と中村知事のダブルスのエキジビション・マッチが行われた。それを一目見ようと県内在住のイ

ドミントン選手ルディー・ハルトノに会いたいという、夢を叶えるためだった。ルディー・ハルトノは1949年インドネシアのスラバヤ市に生まれ、16歳で華々し

インドネシア人たちも駆けつけ、もちろん、彰も大会会場にいた。傍にいたインドネシア人が、「インドネシア語で話したらいいのに」と勧めたら「いや、いいんだ」と彰は言ったという。「ハルトノに会いたい」と日本を出発した日から41年の時を経て、ハルトノ氏64歳、彰60歳。憧れのハルトノ氏と並んだ写真の中で、彰は夢の達成を果たした。

### 彰と国際交流

彰が新居浜に移り住んだ時には、すでに「若者塾」という県が主催する国際交流のための活動があった。これは、当時、愛媛大学留学生が運営する「松山インターナショナル」を参考に、新居浜市で日本茶の卸販売店を営む大久保真樹氏によって創設されたものである。当時その塾生だった土井美智子氏の仲介で、彰も、その活動に参加した。土井氏は、新居浜出身で日本語教師資格を持ち留学生や外国からの転入者に日本語を教えていたため、彰が移転するより以前から、新居浜高専の留学生とは懇意だった。「若者塾」は、彰も加わり国際交流パーティーを企画し、1990（平成2）年に第1回インターナショナルパーティーが開催された。転入者を対象に高専留学生も含めて百人ほどが参加した。その後は、毎年恒例の行事となって、1997（平成9）年からは名称を新居浜SGGが主催する「グローバルパーティー」に引き継がれ、2020年で30回を数えている。土井氏は、新居浜市の『ボランティア日本語教師養成講座』の講師でもあり、彰は事あるごとに土井氏の協力を仰いでいた。

2019（平成31）年3月24日の設立総会を経て、土井氏を事務局



長とする「新居浜市国際交流協会」が発足した。これは、地域の外国語教育の普及と国際化の推進を目的とするJETプログラムの一つ「国際交流員（CIR）」派遣事業を主眼として創設された。JETプログラムとは、我が国では1987（昭和62）年から開始され「外国語指導助手（ALT）」・「国際交流員（CIR）」・「スポーツ国際交流員（SEA）」の3つの職種があり、地方自治体が総務省・文部科学省及び一般財団法人自治体国際化協会（CLAIR）の協力の下に実施しているものである。その地域の多文化共生を目的とする「新居浜市国際交流協会」の最初の「国際交流員（CIR）」として、マレーシア人女性ヌル・ファラナス・アブマンスル（通称ファラ）さんが採用された。ファラさんは2007（平成19）年から6年間、日本の大学（一橋大学修士課程修了）で学び、卒業後は在マレーシア日本大使館で4年半勤務していた。

彰は、新居浜市が国際交流員を募集する情報を得て、市長に愛媛県とマレーシアのこれまでの交流について述べた文章を作成して提出したが、この3枚に及ぶ嘆願書が人材選別に大いに役立ち、最終決定に影響した。彰は、土井氏を訪ねて「マレーシアから、本当にすごい人が来てくれることになった」と喜びを語り、対面が叶うことはなかったが彰にとって十分に満足が得られる結果となった。2019（令和1）年8月5日、「新居浜市市民部地域コミュニティ課国際交流員」ファラさんが新居浜市に着任した。

マスジドを維持していくためには、電気代・水道代・ガス代の諸経費も必要となるが、まず何よりも大切なのは人の力である。彰はマスジドの宿泊を無料で提供したが、長期滞在の場合はお金よりも労働を求めた。絨毯に掃除機をかけること、階段のゴミの



イード・ル・フィトルの礼拝、西条市パナソニック工場にて

掃き掃除をすること、食事の準備をすること等々を促していた。

隣の市に住むインドネシア人女性ヌル・バイティ(通称カリナ)さんは、1998(平成10)年にインドネシアで日本人男性と結婚して来日し、当時、松山に住む愛媛大学インドネシア人留学生ワヒュー氏から紹介されて、彰との交流が始まった。ワヒュー氏は、彰と一緒にMICC(松山イスラム文化センター)を立ち上げた人でもあった。カリナさんは、西条市にある大企業の工場で働く、多いときは百人近く滞在していたインドネシア人就労者の相談役も務め、彰を工場敷地内で行っていたイード(断食月明け大祭)の礼拝に誘った。2005(平成17)年の新居浜グローバルパーティーには、カリナさんの掛け声で工場勤務の大勢のインドネシア人が集まり、盛大な民族舞踏を披露した。マスジドでの催し物には、必ず手作り料理やお菓子を持参し、大勢の人を集める労苦も厭わなかった。彰の頼みにはいつも快く応じてくれて、彰もまたカリナさんに全幅の信頼を寄せていた。彼女は、「マスジドのために何かすることは善行だから」と言って、突然立ち寄っては

マシドの掃除や整理整頓をして帰る。このような一人一人の力が、積み積もって大きな力になっていくことを、彰は期待していた。

彰が、エジプト・カイロ市にあるアズハル大学に留学した際、マレーシア人学生会でペルリス州出身のマフムード氏と懇意になった。アズハル大学に在籍し、アラビア語に長けていたマフムード氏の尽力がなければ、エジプト宗教庁が執り行ってくれる結婚披露宴も実現していなかっただろう。彰が、留学先をエジプトからリビアに変えてその地を去って以来、長く連絡を取り合うこともなく過ぎていた。2013（平成25）年、当時マレーシアに留学していた息子は、大学の友人に誘われて出かけた先でマレーシア人のウスターズ（イスラム学識者）を紹介された。その時「Hamanaka Akira」の名前が語られ、彰の結婚の仲人も務めてくれたマフムード氏との30年ぶりの再会が果たされることになった。マレーシアでは、毎年恒例の「世界クルアーン朗誦・暗誦大会」がテレビ放映されているが、そこでアラビア語の司会を務める有名人がウスターズ・マフムード氏であり、さらにペルリス州の宗教教育機関の顧問も務める人だった。



マフムード氏宅訪問（マレーシア）

2016（平成28）年12月マフムード氏一家が来日し、新居浜マシドに留学生たちを集めて講演が行われた。そして、マフムード氏の進言によりペルリス州のスル

タン（王様）から新居浜マ  
スジドへのプレゼントが約  
束され、翌年12月にはサダ  
カ（喜捨）が送られた。因  
みに、マレーシアにある13  
のうちの9つの州には現在  
もスルタン（君主・王様）  
が座している。スルタンと



ヘルリス州王子より喜捨  
（駐日マレーシア大使館）

は、東南アジア島嶼部のイスラーム化の過程で在地の君主が王権  
の正当性を強化するために用いた称号であり、国家元首のアゴン  
（国王）は、これら9つの州のスルタンによる5年の任期で持ち  
回る輪番制になっている。彰は、この王様からのプレゼントをマ  
スジドで行われるムスリムの勉強会の食事代やその他のマスジド  
の費用として使うことを決めた。

### 彰の想い

2000（平成12）年10月18～20日にインドネシア・ジャカルタ市  
で開かれた第6回「世界イスラムダァワ協会総会」に参加した際  
の講演で、彰は次のようなスピーチをしていた。「私は、高校の  
世界史の先生たちを集めてイスラムに関する講演を行いました。  
終了後先生たちと意見交換を行いました。第1の感想は『自分  
たちのイスラムに対する知識の間違いが多いことに気付いた』と  
いうことでした。日本の中学や高校の世界史という科目は、日本  
人に正しい歴史認識をさせるために最も基本となる科目です。そ  
の科目を指導する教員が、間違ったイスラムイメージを持っている

たのでは、生徒に正しいイスラムが伝わるはずはありません。私がイスラムを自分の宗教として選ぶきっかけになったのは、高校の世界史の先生に正しいイスラム情報を教えてもらったからです。世界史の先生こそ正しいイスラム観を持って指導してもらいたい、と私の希望を述べました」。これが彰の行動の原点であり、いつも正しい知識を得て、それを正しく伝えるということを自分の役目と考えていた。

1999（平成11）年、彰は新居浜市立船木中学1年生の社会科地理の授業にゲストティーチャーとして招かれた。それは、彰がいつも「西原先生」と呼んでいた西原隆氏の依頼によるものだった。西原氏は筑波大学バドミントン部出身で、1983（昭和58）年に新居浜市の中学校に赴任し、初めて中学校にバドミントン部を作り優秀なバドミントン選手を育てた人物でもある。西原先生は、その授業の様子を「マレーシアでの生活、特に農村部の様子、高床式住居、雨季・乾季の違い、多民族国家での生活を資料も交え、説明していただいた。また、リビア砂漠地帯の生活、降水量の少ない地域での水確保の工夫など、体験に基づく話で、生徒の興味、関心を高めてくださった」と語り、その時、彰は自分がイスラム教徒であることを明らかにしたうえで、「あまり宗教色の濃くない話にしましょう」と伝えたという。

西原氏の筑波大学バドミントン部時代の後輩でもある甲南大学教授・鶴木千加子氏は、西原氏の紹介で彰の存在を知り、彰を介して自らが指導する甲南大学バドミントン部と「ヌサ・マハスリ」との交流を2008（平成20）年に開始した。ミスボン氏と鶴木

氏は、世界大会において隣り合うコートで試合に臨む機会もあり、すでに旧知の仲だった。当初はマレーシアを訪れて練習に参加していたが、後に「ヌサ・マハスリ」からコーチを招いて日本でのバドミントン合宿



息子のようなサリム氏と、  
新居浜マスジドにて

を行った。2010（平成22）年に初めてそのコーチとして招かれたのは、2004年以來の付き合いで彰が最も信頼を寄せるサリム・サメオン氏だった。2019（令和1）年まで毎年恒例の行事となった夏の甲南大学の合宿に必ず差し入れを持って陣中見舞いに訪れ、彰はサリム・サメオン氏の日本の父として、その活躍を見守り続けた。

日本に帰国直後、埼玉県在住の折に交流のあった真柄氏は、独自にフットワークマシーン「鬼越・オニゴエ」を開発していた。彰は2011（平成23）年、真柄氏と共にマレーシアの「ヌサ・マハスリ」にそれを持参し、デモンストレーションに臨んだ。もちろん、彰のマレーシア語の解説付きである。その際、マレーシアのバドミントン関係者、マレーシアやインドネシアの新居浜高専卒業生たちから東北大地震への義援金を預かり、福島への支援活動を行っている大塚マスジドにそれを届けている。さらに、2016（平成26）年には、当時女子シングルス世界ランキング1位のインタノン選手使用モデル「鬼越・オニゴエ」を携えて、タイ国立バドミントンチームを訪問した。彰は、バンコクで久しぶりにリビア



タイ訪問、ノーリー氏と真柄氏とインタノン選手と共に

留学時代の友人プラ  
パート・ノーリー氏  
と再会し、宗教学校  
の先生をしている旧  
友との親交を深めた。  
もちろん、二人の共  
通語はアラビア語  
だった。真柄氏は、

いつも彰のことを気に掛け、事あるごとに新居浜を訪れては彰の話に付き合ってくれていた。そして彰は、真柄氏の研究開発に対して協力を惜しまず応援し、その訪問をいつも楽しみに待っていた。

彰が語るバドミントンの話は、世界中の選手のこと、試合内容から技術的なことまで豊富な内容で飽きさせなかった。饒舌で、語り始めたら止まるところを知らなかった。彰から新居浜リーグの代表を引き継いだ須川卓二氏（現・新居浜市バドミントン協会会長）は、「話が次から次へと進んで、なかなか帰るに帰れず数時間付き合ってしまうことがよくあった」と、その時の様子を話している。また、新居浜西高校バドミントン部のキャプテンだった尾田征司氏は、中学1年生当時から店を訪れ、彰とは親子のような関係だった。2006（平成18）年からは、愛媛県と新居浜市のバドミントン協会の役員を務め、彰と一緒に広報を担当し最も近くで彰の人となりを見てきた人物でもある。尾田氏は彰のことを、このように語ってくれている。「反対意見であっても、即座に反対せず、一度飲み込みます。明らかに反対意見でも数秒、もしくはゼ

ロコンマ数秒でしょうか…飲み込んだ上で冷静な反対意見、相手を尊重する対話術、これはなかなか真似できません」「相手の話を一度飲み込む懐の深さ…これは随一の深さだと認識しています」。

「ラケットショップハマナカ新居浜」が開店して間もない頃から、テニスラケットを背負い、作務衣と下駄履きでやって来るお客さんがいた。その人は、山根隆顕さんと言って、近くの宝蔵院河内寺の住職さんだった。この高野山で修行した、とても型破りなお坊さんの山根氏と彰は何故か馬が合い、話は尽きなかった。彰は「サンスクリット語を教えて欲しい」と言い出したという。山根氏は当時のことを「今まで坊さんに、そんなことを言った人はいなかった。凄い人だと思った」と語っている。マシジドの本棚にサンスクリット語の参考書があるのは、そんな理由からだった。

彰が考えた店のキャッチフレーズは、「バドミントンプレイヤーのオアシス」だった。砂漠などの乾燥地域における緑地・水場を意味する「オアシス」は人が集う場所であり、そこでは情報交換や物の売り買いが行われる。彰は、誰でも気軽に立ち寄り、自由に語り合える場を提供しようと考えた。そして、彰にとっても店はまさに「オアシス」であり、店の主人としてこの仕事は「趣味と実益を兼ねる」という言葉がそのまま当てはまるものだったに違いない。そして、そんな彰を知るムスリムの仲間たちの誰もが皆、彰のことを「スポーツウェアを着たイマーム（導師）」と、親しみを込めて呼んでいた。

常に新しいことを考え、その頭脳は休むことを知らなかった。そして、決して闇雲に動くことはせず、動く時はすでに頭の中で、



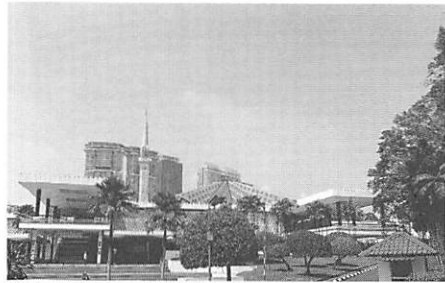
事の次第が詳細に理解されていた。行動は大胆であったが、その精神は繊細だった。また、一つのことを開始して軌道に乗せた後は、それを自分以外の頼りになる人材に任せて託し、自分はまた次のことに向かっていた。何よりも楽しいイベントが大好きで、たくさんの人たちと交わることを好んだ。病にある友人の処には必ず見舞いを持って駆け付け、しばらく顔を見ない知人の消息を気に掛けては安否を心配するような、まさしくその人格は「ムスリム」だった。

彰の「知りたい」という知識欲は旺盛で、興味はすべて知識欲に繋がっていた。小さい頃から、母が手を焼く程の行動力は中途半端ではなかったし、何かに夢中になった時の集中力と探究心は、まさに父譲りだった。彰は、父が新居浜にやってくると必ず「とうちゃん、やろうか」と言って、将棋盤と駒を運んできた。二人で将棋盤に向かって過ごす様子は、真剣というより寧ろ楽しげな光景だった。

## 感謝の返礼

彰は、マレーシアが大好きだった。「自分の第二の故郷だ」とも言っていた。機会があれば1年に数回訪れることもあったが、いつも決して観光旅行ではなかった。とにかく、ホテルでゆっくりすることはなかったし、どちらかという和日本にいる時よりもずっと忙しい毎日を送ることが常だった。彰がマレーシアに滞在していると知ると、是非会いたいという人たちとの面会が後を絶たなかったし、旧友を尋ねてどこへでも出かけた。新居浜高専留

学生の同窓会や、結婚式にも招かれて旧交を温めた。シンガポールでは病気のコメン家のお父さんを訪ね、またマレーシアでは入院中の留学時代お世話になった校長先生を見舞った。また、



Masjid・ネガラ (マレーシア国立モスク)

時間がある時はモスクを訪ね歩いたが、それは大きな有名なモスクではなく、宝探しのようない珍しいモスク巡りだった。今は余り見られなくなったという、マレーシア語でポンドック (pondok) というイスラム教育機関内に建てられている木造のモスクや、小さいけれど古い建築様式のモスクを見つけては感激していた。そして、それらは必ずホームページ上に掲載し感動や知見を分かち合った。19歳の時に、彰自身が入信したモスク・ネガラ (国立モスク) では、観光客のための日本語ガイドも自ら買って出て、時間が許す限りそれに務めた。

彰とマレーシアの間には、特別な感情があった。それは、自身に受けた数々の恩に報いる彰なりのお礼の心でもあった。その後、彰が歩む人生を決定付けることになったマレーシアで、それに関わった大勢の人たちの善意に対して、彰は感謝を忘れなかった。常に、マレーシアのために何かをしたいと考え、宗教だけに限らずバドミントンでもマレーシアとの繋がりを大切にしたい。

2016 (平成28) 年3月21日、NHK・BS1で放送された『『世界の最強のコーチと子供たち』バドミントン編』には、ミスボン・シディク氏が招かれた。これは、彰の存在がなければ成し遂げられ



ミスボン邸テラスにてバドミントン談義

日本滞在中のイスラム教徒である彼へのおもてなしの注意点を伝えることも忘れなかった。無事に放送の運びとなり、彰はその責任を十分に果たすことができた。

マレーシアの大学に留学していた息子は、2015（平成15）年6月13日、シンガポール在住のマレー系ムスリマ（イスラム教徒の女性）と結婚式を挙げた。彰が、新郎の父のスピーチを流暢なマレーシア語で話し始めると、披露宴に詰めかけた人々がざわつき顔を見合わせた。彰は、その中で「これから二人が、日本とシンガポールの友好の懸け橋になるように期待している」と



次男の結婚披露宴でスピーチ（シンガポール）

ないことだった、と関係者が口を揃えている。彰は、ミスボン氏との交渉を一手に引き受け承諾を取り付けた。ミスボン氏の過密スケジュールの日程調整を行い、

語った。イスラムを知るきっかけとなったコメン一家のお父さんとお母さんはすでに他界していたが、そこには三人の息子と一人の娘の家族たちが顔を見せてくれ

ていた。1972（昭和47）年の夏に、初めてシンガポールに降り立ったあの日から数えて43年の後、またこの地と縁が繋がった瞬間だった。



孫と会う、結婚40年記念旅行（シンガポール）

2018（平成30）年10月には、シンガポールで彰にとって四人目の孫が誕生した。店の休みを利用して生後10日目の孫に会うためにシンガポールを訪れた。それまで何度か立ち寄ってもほとんど用件だけを済ませて帰る旅ばかりだったが、この時は結婚40年目の記念のシンガポール観光旅行を楽しんだ。彰にとっては、シンガポールで人生最初の旅が始まり、孫との対面を果たしたこのシンガポール旅行が人生最後の旅となった。

彰は、世界各国で開かれる会議にも依頼されて出かけた。それぞれの国に対応して言語を選びアラビア語・マレーシア語・英語で講演したが「上手く話せなかった」と言っては残念ながら、「うまく話せた」と言っただけで素直に喜んだ。彰にとって最後の講演は、2018（平成30）年11月24日に松山市北条の聖カタリナ大学において、「身近にみるムスリム」



聖カタリナ大学での最後の講演会

というタイトルで行われた。日本のムスリム社会を語り、その中で自らイスラムの礼拝も指導してみせた。講演終了間際には酸欠状態となって少し体調を崩したが、後日「これまでの中で一番良かった、最高の出来だった」と目を輝かせて興奮気味に感想を語っていた。

彰は、いつも「自分は本当に幸運だった」と言っていた。「その時、その場所に、その人がいなければ、それは成し得なかった」「今の自分があるのは、自分の力だけではない。多くの人たちの力添えなくしては、今の自分はない」ということを、彰は自らの体験から学んでいた。彰がすべき感謝の返礼は、自分がしてもらったように援助を求めている人に対して力添えをすることであり、日本との関係を求める人たちに対しては労苦を惜しまないお世話と接待に努めることが自分の仕事だということを深く胸に刻み、また、そうすることを心から楽しんでいた。

彰関わった最後の仕事は、彰が去った7ヶ月後に松山市で行われた「マレーシア代表バドミントンチーム愛媛キャンプ」(2019年12月22～29日)だった。マレーシアから、東京オリンピックに出場する主立った選手たちが訪れ、12月25日には県武道館において『国際フレンドリーマッチ in 愛媛』が開催された。彰は、この企画に携わり協力を惜しまなかった。唯一、その日に彰の姿がそこになかったことだけが予定外だった。大会運営関係者は、「無事に実行の運びとなったことは、偏に彰さんの尽力の賜物だった」と語ってくれた。

2017（平成29）年1月2日、父と母の88歳（米寿）を家族総出で祝った。その席で、母は「兄弟が仲良くしてくれていることが一番嬉しい」と語り、父は雄弁に自らの「バドミントン史」を語ってくれた。彰は、父の若い頃の話が聞けたことに感激した様子で「貴重な話が聞いて良かった」と嬉しそうに話していた。その時の記念写真は、家族にとって大事な宝物になっている。



「米寿の祝い」家族の宝物

おわりに

---

濱中彰は、2019（令和 1）年 5 月 5 日（イスラム暦 9 月 1 日・断食月）に永眠した。この『Akira の留学記』を入院する 2 週間ほど前に書き上げ、その折には続編も予定していたが、それは叶わなかった。彰は、「非結核性抗酸菌症・肺 MAC」という肺疾患と付き合っていた。「自分はこの病で死ぬことになるかもしれない」と言いながら、「もしもそういうことになったら、こうしてほしい」という希望も伝えられていた。和歌山県橋本市にある橋本霊園のイスラム墓地に埋葬することは、亡くなる 2 年前から決めて許可も得ていた。自身が車でこのルートを走り、撮影して「イスラムのホームページ」上にこの霊園までの案内も掲載していたため、埋葬に集まってくれた人たちを迷うことなく導けたことは、彰の仕事が有意義であったということを示す結果となった。

病名を知ってからは、東京で働く長男一家を新居浜に呼び寄せて、息子に店を任せる道を選んだ。ゆくゆくは、商売から身を引いてイスラム関係の仕事に集中したいという希望を持っていた。また新しい、何か楽しいことを考えていたのかもしれない。今、息子は父の「お前に任せた。しっかりやれ」という言葉に従って、立派に二代目を務めてくれている。

彰が旅立った年の秋、店に一人の男性が訪れた。松山東高校時代の 2 年後輩で、1 年間バドミントン部だったというその人は、1 年間の思い出だけで「はまなか」の名前を頼りに訪ねてくれたのだった。当時の彰の印象を「ただ一人後輩を怒らない先輩で、まるで仏様のような人だった」と語って帰った。

2021 年の夏、突然若い男性がマスジドにやって来た。「はまなか先生はいますか」と尋ねた青年は船乗りで、明日、高知からイ



インドネシア行きの船に乗るのだという。すでに亡くなったことを告げると「もっと早く来るべきだった」と言ってその場で泣き崩れた。会ったことがなかった彰を自らの師と仰ぎ、是非会いたいと訪れたのだった。彼は一人、マスジドで礼拝を済ませると出航のために立ち去った。

彰を語るには、この二人の話で充分言い尽くすことができるという思いに至る。まさしく、彰の人生は「バドミントン」と「イスラーム」の両輪で懸命に駆け抜けた、66年1ヶ月24日の生涯だった。

2009（平成21）年、「月刊インタビュー 5月号」に掲載された記事の中で、彰は自身のこれまでの「バドミントン史」を語っ



「座右の銘」

ている。そして、そのインタビューの終わりに「最後に、濱中さんの座右の銘を教えてください」という質問に対して「いつも心に思う言葉は『何事も真剣で、神への感謝を忘れない』です。イスラームの言葉です」と答え、その言葉を自筆でホワイトボードに書き示して、それをかざしてみせた。正しくそれは「スポーツウェアを着たイマーム」の顔だった。

父と母は、白寿を迎えてなお、元気で店の仕事を続けている。「濱中彰」という人間を大事に慈しみ育ててくれた父と母へ心からの感謝と共に、この『彰 伝』を私からの贈り物としたい。そして、またいつの日か続編が書けることを望みながら、この作業を2022年4月（イスラム暦9月・断食月）に終了する。

濱中 曜子

## 後 記

### — 弔 辞 —

2019（令和1）年12月、愛媛国体の選手強化の目的で来県し、4年間松山に滞在していたマレーシア人コーチ、イズワン・イブラヒーム氏が脳内出血により、クランタン州コタバル市の自宅で倒れ入院先の病院で逝去されました。（享年33歳）

2020（令和2）年12月、三男濱中均が肺癌により永眠しました。（享年63歳）

2021（令和3）年7月、マレーシア・バドミントンナショナルチームのコーチ、ミスボン氏の妻ラティーファさんが、コロナ感染により入院先の病院で逝去されました。（享年58歳）

ここに、魂の平安を願い、謹んで哀悼の意を表します。

## — 感 謝 —

コロナ禍の中、直接お会いしてインタビューする機会を与えていただきました、瀧山一甫様、松野木聡様、真柄浩様、土井美智子様、ヌル・バイティ村上様ありがとうございました。

長く相棒として広報の仕事に携わった尾田征司様（愛媛県バドミントン協会広報委員長）には、貴重な写真の提供を頂きました。

岡山大学在学中、ダブルスのパートナーだった小田和文様（岡山県バドミントン協会副理事長）から頂いた『岡山バドミントン五十年』より参考資料をお借りしました。

お二人のご厚意に感謝致します。

岡井宏文様（共愛学園前橋国際大学専任講師）には、2005年の「全国 Masjid 調査」から「全国 Masjid 代表者会議」に至るまで大変お世話になりました。夫・濱中彰に成り代わりお礼を申し上げます。

2020（令和2）年1月20日、愛媛県新居浜市某所にて『濱中彰 思い出の会』と『濱中誠・喜代子 白寿の祝い』の宴を開きました。ご多忙中、御出席いただいた「新居浜市バドミントン協会役員各位」「愛媛県バドミントン協会役員各位」「愛媛県庁職員各位」「松山東高校同級生各位」「岡山大学バドミントン部卒業生各位」「ヨネックス株式会社営業担当者各位」「新居浜市国際交流協会各位」「新居浜市ソフトテニス協会各位」「ヌサ・マハスリよりサリ

ム・サメオン様」「鬼越製作者 真柄浩様」「元・県議会議員黒川洋介様」に、瀧中家一同より心からの感謝の意を表し、最後のご挨拶とさせていただきます。

## — 参考資料 —

- 『創立50周年記念誌』（新居浜市バドミントン協会発行）
- 『創立50周年記念誌』（愛媛県バドミントン協会発行）
- 『岡山バドミントン五十年』（岡山県バドミントン協会発行）
- 『五十年史』（日本実業団バドミントン連盟発行）
- 『越後の雪だるま』（米山稔監修、新潟日報事業社、2015年）
- 『ヨネックス米山稔 負けてたまるか。』（米山稔著、日経ビジネス人文庫、2005年）
- 『日本に生きるイスラーム—過去・現在・未来—』（サウジアラビア大使館文化部、2010年）
- 『月刊インタビュー2009』（5月号・4月20日発行）
- 「愛媛県バドミントン協会ウェブサイト」
- 「イスラームのホームページ」

## 最愛の人への手紙

拝啓

濱中彰 様

貴方は、どこへ出かけても出先から必ず「そっちはどうだ」と電話をかけてきました。そんな時私は、多少困ったことがあったとしても「心配しても仕方ないでしょ」と思いながら「こっちは大丈夫ですよ」と答えるのが常でした。今は、私から尋ねます。「元気にしていますか…そちらはどうですか」。

貴方と同じように、私にとっても「その時、そこに貴方がいなければ、今の私はない」と言える大きな偶然がありました。人は、これを「縁」というのでしょうか、それは確かに、私の人生にとって大きな導きであったと理解しています。結婚の経緯を聞かれて先輩に答えた「結婚してやったんですよ」という言葉は、あながち間違いではありません。それが真実に一番近いかもしれません。エジプトのカイロで知り合ってから、ある日の夕方、一人タハリール広場の歩道橋の上で沈む夕日を見ながら、突然「私はこの人の為に生きる。私の人生はこの人の為にある」という覚悟が腹の底から湧いた時のことを、今でも覚えています。そして、私は貴方が見えるようにノートの隅に～Saya cinta padamu～(好きです)と書きました。

エジプトの田舎を二人で旅していた時、案内人に誘われて連れ

ていかれた場所でのことを覚えていますか。深く掘られた穴の前で拳銃を見せられて、私は始めて見る銃というものを物珍しく眺めていましたが、貴方はすぐさま私の鞆から、私が大事にしていた「金色のモンブランの万年筆」を取り出し、それを差し出しました。その後、私たちは無事にもと来た道に戻ることができましたが、それが「追い剥ぎ」だったとは夢にも思いませんでした。「私たちは、あの場所で殺されて穴に埋められていてもおかしくなかった」と、後で貴方に聞かされるまでは。恐怖を覚えることもなかった私は無知による怖いもの知らずで、貴方は賢さによる勇敢さだったと認識した出来事でした。

リビア留学1年目の学校の授業中、居眠りをした私は、貴方から後にも先にもこれ一度だけという恐さで怒られたことを思い出します。それは、パレスチナから避難してきていたパレスチナ人の先生の授業でした。内容はパレスチナの歴史でしたが、アラビア語が分からなかったことや、育児疲れもあってウトウトしてしまった私に「先生が、どんな思いでそれを伝えようとしているのか…居眠りをするとは、何て失礼なことをするのか」と、部屋に戻ってから厳しく説教されました。今でも、そのことを心から反省しています。

涙あり、笑いあり、冒険ありの苦楽を共にした40年に及ぶ結婚生活でした。それができたのは、根気よく私を導いてくれた貴方の懐の深さ所以だったと心から感謝しています。

私たちは、最後の日を知り得ません。その日は神の承諾のもとにやってきて、私達はそれを許されて旅立ちます。「何事も真剣で。神への感謝を忘れない」という貴方の言葉を守って、私もその日

を待ちたいと思います。

貴方が生涯で得た多くの人たちとの出会いを記したこの『彰伝』によって、貴方の想いが国を超えた友情の絆となって、世界中の仲間たちとさらに強く結ばれていくことを願いながらペンを置きます。敬具

妻・曜子

追伸

ただ一つ残念なことは、「私をハッジに連れて行って欲しい」という希望が叶えられなかったことです。でも、私は必ずこの『彰伝』を携えて、ハッジに行けるように努力することを約束します。

砥部焼の体験工房に、マレーシアから来県したバドミントンナショナルジュニアチームの選手たちを連れて出かけた時、私にコーヒーカップをお土産に買って来てくれました。ふっくらしたカップの外側には、アラビア語で絵付けがしてありました。

نور الحسنه نوکو هاماناكا شكراً دائماً



彰自筆アラビア語絵付  
「砥部焼コーヒーカップ」

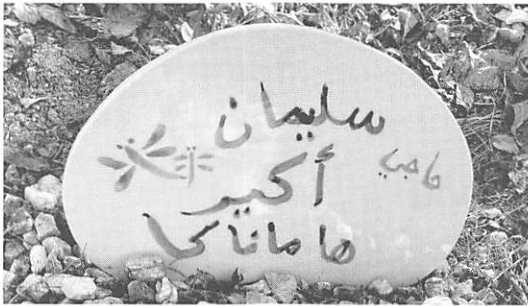
(ヌール・ル・ハサナハ濱中曜子いつもありがとう。)



私にとって、貴方からの最高の贈り物です!それは今、私の机の上に大切に置かれています。

そして、私からも砥部焼の墓標に添えて貴方へ

أَنَا أَيْضًا، شُكْرًا جَزِيلًا



墓標「Haji・Sulaiman・Akira・Hamanaka」  
(和歌山県橋本市イスラム霊園)

(私もまた、本当にありがとうございました。)

## 彰の生涯（年表）

- 1901（明治34）年 祖父・三一 出生
- 1909（明治42）年 祖母・梅 出生
- 1929（昭和4）年8月 父・誠 出生
- 1930（昭和5）年8月 母・喜代子 出生
- 1936（昭和11）年 日本初バドミントン製造販売会社サンバタ創業
- 1946（昭和21）年 日本バドミントン協会設立
- 1950（昭和25）年 愛媛県バドミントン協会設立、丸善石油松山入社（誠）
- 1952（昭和27）年 第1回全日本実業団バドミントン選手権大会（東京都）
- 1952（昭和27）年4月 妻・曜子 出生
- 1953（昭和28）年3月 彰 出生  
松山市バドミントン協会設立  
10月22～26日 第8回四国国体（四国4県）
- 1955（昭和30）年1月 弟・勉 出生  
丸善石油松山実業団バドミントン部創設
- 1956（昭和31）年 第1回愛媛県実業団バドミントン選手権大会（松山市）
- 1957（昭和32）年 第6回全日本実業団バドミントン選手権大会（高松市）  
丸善石油松山バドミントン部、誠初出場  
6月 弟・均 出生
- 1959（昭和34）年4月 松山市立味生小学校入学、父と親子バドミントン大会優勝
- 1961（昭和36）年 ヨネヤマブランドのバドミントンラケット製造販売開始
- 1962（昭和37）年7月 濱中家養子縁組
- 1963（昭和38）年 松山市バドミントン協会理事長（誠）
- 1964（昭和39）年5月 第6回トマス杯国際大会（東京都）  
祖父・三一 死去（享年63歳）
- 1965（昭和40）年4月 松山市立津田中学入学
- 1966（昭和41）年 ルディー・ハルトノ世界戦デビュー（16歳）

- 1968（昭和43）年4月 県立松山東高校入学
- 1969（昭和44）年 県高校新人大会シングルス優勝
- 1970（昭和45）年 県高校総体団体・シングルス優勝、インターハイ出場  
愛媛県バドミントン協会理事長（誠）
- 1971（昭和46）年4月 岡山大学工学部進学  
中四国大学学生選手権大会男子シングルス3位
- 1972（昭和47）年 シンガポール遊学（シンガポールポリテクニク大学）  
彰、マレーシアのマスジド・ネガラにてイスラム入信  
（ムスリム名スライマーン）  
全日本実業団技能賞受賞（誠）
- 1973（昭和48）年3月 シンガポールから戻る
- 1974（昭和49）年 中四国大学学生選手権大会団体・男子シングルス優勝
- 1975（昭和50）年 マレーシア留学（アラブ高等学院）  
マアハド・サラフッディーン・アブドルアジズ・シャー入学  
サバ・ブルナム地区学生男子シングルス優勝  
サバ・ブルナム市社会人チームガルーダ所属  
第10回トマス杯アジアゾーン予選大会通訳（クアラルンプル）
- 1976（昭和51）年12月 エジプト留学  
アズハル大学ディラーサルト・ハッサ入学（カイロ）
- 1977（昭和52）年12月 アズハル大学ウスールッディーン学部（神学部）入学
- 1978（昭和53）年1月 妻・曜子、アズハルモスクにてイスラム入信  
（ムスリマ名ヌール・ル・ハサナ）  
2月 結婚式・披露宴（エジプト宗教庁主催）
- 1979（昭和54）年1月 リビア留学  
イスラムダアワ大学附属トガール校入学（トリポリ・トガール）  
4月 長女・らはま誕生
- 1980（昭和55）年9月 イスラムダアワ大学入学（トリポリ・スークトルク）
- 1981（昭和56）年2月 長男・まはで誕生  
「ラケットショップハマナカ」開業（松山市平和通り）
- 1982（昭和57）年8月 妻子、愛媛県北条市（現・松山市北条）在住

- 1983（昭和58）年 3月 丸善石油松山 退職（誠）  
                   8月 妻子、埼玉県上福岡市（現・ふじみ野市）在住  
                   9月 彰、ハッジ（メッカ大巡礼）に行く
- 1984（昭和59）年       「ラケットショップハマナカ」移転（松山市西一万町）  
                   10月 イスラムダアワ大学卒業 帰国
- 1985（昭和60）年 9月15～20日 『第3回世界イスラム布教会議』（リビア・トリポリ）  
                   12月 次男・あたら誕生
- 1988（昭和63）年 2月 愛媛県へUターン  
                   9月 「スマッシュ」クラブチーム結成  
                   11月 「ラケットショップハマナカ新居浜店」開業
- 1989（昭和64）年 4月 新居浜市バドミントン協会常任理事（彰）  
                   6月 次女・ばらか誕生  
                   第2回世界シニアバドミントン選手権60歳シングルス優勝  
                   （誠）
- 1990（平成2）年 4月 宮西ジュニアクラブ結成  
                   新居浜市バドミントン協会副理事長（彰）
- 1991（平成3）年       祖母・梅 死去（享年82歳）
- 1994（平成6）年 4月 新居浜市リーグ設立  
                   MICC（松山イスラーム文化センター）設立
- 1996（平成8）年       ミスボン氏、バドミントンチーム「ヌサ・マハスリ」発  
                   足
- 1997（平成9）年 5月 「ラケットショップハマナカ」のサイト開設  
                   愛媛県バドミントン情報サイト開設  
                   （後の愛媛県バドミントン協会オフィシャルサイト）  
                   イスラーム相談室開設（後の「イスラームのホームページ」）
- 1998（平成10）年 4月 新居浜市バドミントン協会理事長（彰）  
                   現在と同じデザインの「イスラームのホームページ」を  
                   Biglobe に開設
- 1999（平成11）年 6月 「ヌサ・マハスリ」と接触
- 2000（平成12）年 4月 愛媛県バドミントン協会理事（彰）
- 2001（平成13）年       新居浜市バドミントン協会創立50周年

- 10月 「ヌサ・マハスリ」と協力体制
- 12月 アフガン難民支援活動（バキスタン・ベシャーワル訪問）
- 2002（平成14）年4月 愛媛県バドミントン協会サイト、オフィシャルサイト昇格
- 8月 第1回「イスラムキャンプ」（新居浜市別子）
- 12月 両親とマレーシア旅行
- 2003（平成15）年4月 愛媛県バドミントン協会会長（誠）
- 6月 「ラケットショップハマナカ新居浜店」移転工事開始
- 9月 「ラケットショップハマナカ新居浜店」「新居浜マスジド」完成
- 2004（平成16）年2～4月 「ヌサ・マハスリ」サリム・サメオン氏来県・指導
- 4月 愛媛県バドミントン協会広報委員会独立
- 8月 新居浜マスジドドーム完成
- 「ヌサ・マハスリ」オフィシャルサイト開設
- 11月 世界イスラムダアワ会議（リビア・トリポリ）
- 2005（平成17）年4月 愛媛県バドミントン協会常任理事（彰）
- 2006（平成18）年10月 ミスボン・シディク氏とハフィズ・ハシム選手講習会
- 2007（平成19）年4月 新居浜市バドミントン協会副会長（彰）
- 2008（平成20）年7月 OICマイノリティ・ムスリム・シンポジウム（ソウル）
- 2009（平成21）年2月 第1回全国モスク代表者会議（東京）発足
- 2010（平成22）年12月 マスジド観光国際会議（マレーシア）
- 2011（平成23）年 「ヌサ・マハスリ」からイズワン・イブラヒーム来県
- 12月 イスラムメディア会議（インドネシア・ジャカルタ）
- 2012（平成24）年3月 新居浜市体育協会功労賞 受賞（彰）
- 2013（平成25）年7月 サウジアラビア王国特命全権大使、新居浜マスジド訪問
- 11月 第30回全日本シニアバドミントン大会（松山市）
- ルディー・ハルトノ氏招待試合
- 2014（平成26）年 秋 『旭日雙光章』叙勲（誠）
- 2015（平成27）年10月 イズワン・イブラヒーム氏帰国
- 10月 和歌山国体視察
- 2016（平成28）年1月 クラントン州ジュニアナショナルチーム交流試合（松山市）

- 10月 マレーシアバドミントンジュニアナショナルチーム・バラバドミントンチーム愛媛遠征（松山市）
- 10月 岩手国体視察
- 10月 新居浜市体育功労賞 受賞（彰）
- 12月 マフムード氏一家来日、講演会（新居浜マスコ）
- 2017（平成29）年1月 「誠・喜代子 米寿の祝い」（松山国際ホテル）
- 6月 新居浜マスコでイードの礼拝
- 8月 愛媛県バドミントン協会役員と強化チーム選手・監督、マレーシア協会とクランタン州協会訪問
- 10月 第72回9月30日～10月10日愛媛国体開催  
文部大臣杯体育功労賞 受賞（誠）  
アラブ高等学院元校長先生宅訪問（クアラランブル）
- 11月 マレーシア・ペルリス州王子と謁見（駐日マレーシア大使館）
- 2018（平成30）年5月 イスラム会議（ドバイ）
- 6月 新居浜マスコでイードの礼拝
- 7月 東京オリンピック事前キャンプ地調印式（マレーシア）
- 10月 最後の外遊（シンガポール）
- 11月 聖カタリナ大学にて講演会
- 2019（令和1）年4月28日 入院（間質性肺炎）
- 5月5日未明 濱中彰 永眠（享年66歳）
- 5月6日 和歌山県橋本市橋本霊園イスラム墓地埋葬
- 8月5日 国際交流員ファラさん新居浜市着任
- 12月25日 マレーシア代表バドミントンチーム愛媛キャンプ  
「国際フレンドリーマッチ in 愛媛」開催（県武道館）
- 2020（令和2）年1月18・19日 第1回濱中彰杯・ジュニアバドミントン大会開催
- 1月20日 「濱中彰 想い出の会」「濱中誠・喜代子 白寿の祝い」  
愛媛県功労賞 受賞（誠）

思い出の  
アルバム  
〈日本編〉

新居浜「スマッシュ」  
発足メンバーと優勝ト  
ロフィー（1990年）



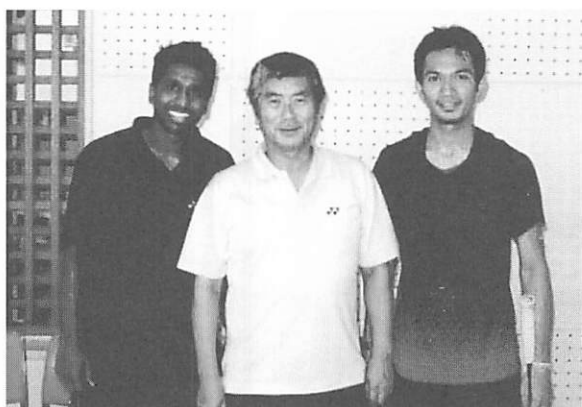
新居浜市バドミントン協  
会創立50周年式典（中  
央）瀧山氏と（左）父・  
誠（2001年）

新居浜高专卒業パ  
ーティー（右）サイフ  
ディーン君と家族  
（2005年頃）





新居浜マスジドにて  
ミスボン氏と子供達  
(2006年)



甲南大学合宿訪問  
サリム氏とイズワン氏  
(2011年頃)



新居浜マスジドにて (中央) サウジアラビア大使と参加者 (2013年)



新居浜 Masjid にて  
イズワン一家のお別  
れ会 (2014年)



新居浜 Masjid にて (左三人目) ウスターズ・マフムード氏と参加者 (2016年)

ラケットショッ  
プハマナカ新居  
浜店 (右) 長男  
とスタッフ理恵  
さん (2017年)





愛媛県松山空港にて  
マレーシアバドミントン協会会長ノルザ氏と（2017年）



愛媛県松山空港にて マレーシアバドミントンチーム記念撮影（2018年）

思い出の  
アルバム  
〈海外編〉

エジプト・カイロ  
披露宴会場前にて親  
族と友人（1978年）



リビア・トリポリ スーク  
トルクの自室前（1980年）

リビア・トリポリ  
イスラムダアワ大学  
にて親友ノーリー氏  
と（1983年）





マレーシア・スランゴール ミスボン邸にてシディク兄弟と (2004年)



マレーシア・クラナジャヤ「ヌサ・マハスリ」の体育館にてメンバーと (2004年)



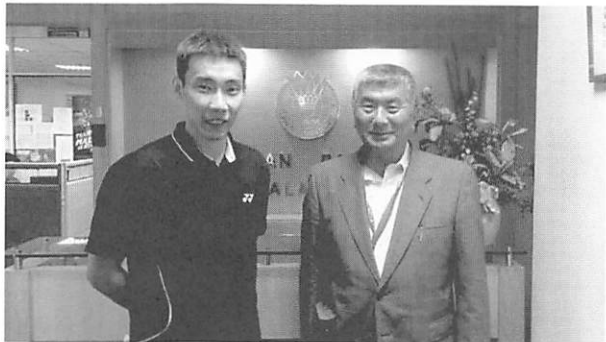
マレーシア・クアラルンプルにて新居浜高専校長・教官と卒業生 (2010年)



シンガポールにて（二段目中央・彰）次男結婚式後の集合写真（2015年）



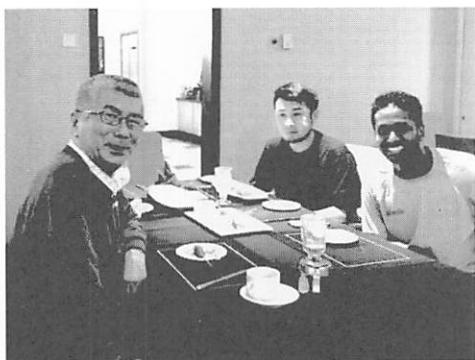
シンガポールにてコメン家の皆さんと（2015年）



マレーシアにて  
リー・チョンウェイ選手と（2016年）



マレーシアにて（右  
三人目）アラブ高等  
学院元校長先生お見  
舞い（2017年）



マレーシア・クアラルンプル  
にてサリム氏と次男と夕食  
（2018年）



アラブ首長国連邦・ドバイ  
「イスラム会議」にて韓国  
代表リー氏と（2018年）

# Akiraの留学記

---

## ① 日本編その1

私が生まれたのは1953年。戦後復興が急激に行われつつあった時期だった。ただ、製油所に勤める父は、働けど働けど、一家が満たされるほどの給料はもらってきてなかったようで、母はご近所の縫物をしながら家計を支えていた。まもなく弟ができ、口減らしのために長男である私は祖父母のところに預けられた。

日本の経済は急激に発展し、父の給料も生活に足りるほどの額をもらうようになったようだ。私は幼稚園から両親の元に戻され、次男、三男とあわせて5人家族になった。父はこのころからバドミントンに憑りつかれ、会社に練習場を作り、愛媛県バドミントン協会の役員もするようになった。余暇としてバドミントンに打ち込めるというのは、生活にゆとりができた証拠である。

私たち兄弟は、父の影響で自然とバドミントンの道へ進んでいった。高校は進学校の松山東高校に入ったが、当然バドミントン部に所属し、血のにじむ努力の成果として愛媛県チャンピオンになり、インターハイにも出場した。当時は、とにかく情報量が少なく、世界であっても日本であってもトップクラスの選手に誰がいてどういうプレーをしているか伝わってこなかった。当時の世界チャンピオン、ルディー・ハルトノ（インドネシア）についてさえ、本人の写真と試合結果程度しかわからず、それは逆にあこがれの念を強くすることになった。そして、ルディー・ハルトノの情報ほしさに、「インドネシア」という国へのあこがれへとつながっていった。



進学校に学ぶ者にとって、時とともに受験への緊張感が伝わってくる。そういう時、逃避行動も生まれてくるのは当然のことだ。国立理科系のクラスに居ながら、インドネシアへのあこがれは、外語大学インドネシア語学科に行きたいと思うようになり、書店でインドネシア語の学習書を求めてみた。また、国立理科系のクラスにとっては消化科目である世界史の授業は重要ではなかった。先生は、生徒に居眠りされないように気を引こうと頑張り、西洋の視点で書かれた現在の教科書から離れ、平等な視点で見た世界史を学んでいこうと興味深いことを言ってくれた。その中で、あまり注目されていないイスラム世界について、先生は「7世紀アラビア半島で生まれたイスラムが、瞬く間に中東に広がり、世界へと広がり、現在も拡大し続けている事実は、イスラムという宗教の魅力が人の心を捉えているからに違いない。受験生である君たちには時間がないかもしれないが、もし時間があれば聖典コーランを読んでみればいい。素晴らしい書物である」と言ってくれた。結局、その言葉に動かされ、図書館で聖典コーラン日本語訳を閲覧した。格調高い古語でかかれ、ムハンマドの挿絵すらも入っていた。この古いコーランに惹かれ、借りたまま自分の所有物にしてしまった。

受験からの逃避行動として、私はインドネシア語の本に目を通し、イスラム関係の書籍も読んでいった。しかし、インドネシア語で外語大学を受験するのは非現実的で断念せねばならず、イスラムの書籍を読むのもいつの間にか忘れていった。結局、国立大学理科系の学部に進学した。

親元を離れ一人での下宿生活が始まった。大学入学と同時にバ

ドミントン部に入部し、練習に没頭した。当時の岡山大学バドミントン部は国内最強の国立大学で、厳しい練習は当然のことで、また、100名以上の部員を有するマンモスクラブでもあった。上下関係は厳しく、同級生との仲間意識も強かった。練習後、先輩に誘われ一緒に食事に行ったり、下宿に集まり食事会をしたり、麻雀の相手をしたり、夜の生活も忙しかった。

ある日バドミントン部の同級生が泊まりに来た。某宗教団体の勧誘が目的だった。その夜は、彼が一方向的に説明をした。二晩目もやってきたが、今度は私が質問を始めた。そして3晩目は、私が理想的な宗教とはこうありたいと語り始めた。その時に使ったのは、過去かじってきたイスラムの断片的な知識を、自分の中で体系化しながら話していった感じだ。結局、この出来事があったことにより、イスラムという宗教がわかりはじめた。しかし、だからといって、イスラムに興味を持つようになったわけではない。

バドミントンとは、授業以外の時間、朝から晩まで関わっていて、バドミントン中心の日々であった。しかし、そういう心隙から、高校時代に芽生えた海外へのあこがれがよみがえってきた。だいたい、自由のある大学に進学したのは（合格したのは防衛大学と岡山大学だった。自由のある大学ということで岡山大学進学を選んだ）、隙を見て海外飛雄を考えていたからだ。もちろん最終目的地はあこがれの地インドネシアだ。資金集めのため、アルバイトをはじめ、渡航計画を練った。当時は飛行機の移動は高く、新聞をさがしていると、小山海運が提供するシンガポールまで6万円で行ける安い船旅があった。資金集めの最後は親からの仕送りの4ヶ月前倒しをお願いして、結局親をだますのに成功した。

船旅は現実のものとなった。予想を覆して貨物船ではなく、イギリスの豪華客船オーカディス号であった。ただし、船底近くのドミトリーのような部屋となった。船底部屋には、海外飛雄を夢見る若者たちが集まっていた。豪華客船は、神戸を出港後、長崎、香港、シンガポールと寄港し、オーストラリアに向かっていた。私たちのほとんどは、シンガポールで下船の予定で、それまでの日々、お互いの夢を語り、情報を交換して、仲良くなっていった。

## ② シンガポール編

オーカディス号は常夏の国シンガポールに着岸した。日本の若者たちの多くは、バックパッカーが集まる Katong の YMCA ホステルに宿をとった。ここには、東南アジア一円から集まったシンガポールの大学やビジネススクールに通う学生が住んでいた。もともと、芝生に覆われた庭を有する金持ちの邸宅と離れを改装したもので、計10ほどの部屋があり、それぞれ2名から6名が入っていた。私が入ったのは、マレーシアとフィジーからの留學生がいた部屋で、一緒に来た日本人3名と一緒にいった。

この日から日本人たちの活動は始まった。世界一周の自転車旅をスタートさせた者、東南アジアをヒッチハイクする者などは、次々と抜けていった。シンガポールで港湾会社の起業を目指す者や、ここに根を下す覚悟の者は、情報収集に毎日でかけていった。漠然とした海外雄飛の夢しか持っていない私は、特に目的もなく、ホステルに残っていた者たちと行動を共にすることが多かった。

毎朝、近くのアパート群の下にあった屋台村から新聞と朝食を買ってきて、しばらくは新聞を熟読していた。当初は、辞書ばかり引いていたが、徐々に会話ができるようになり、留學生が居れば知らない単語の意味を口頭で聞くようになった。また、ホステルの中にシンガポール工科学院バドミントン部主将のマレーシア人がいた。彼に連れられて定期的に練習に通うようになった。

親をだまして金をゲットし、シンガポールにやってきたのだが、ここにきて岡山にいるはずの私がシンガポールに暮らしていることを親に手紙を書き暴露した。海外との行き来がまだ少なかった

時代なので、親はどれほど驚いたことだろう。しかし、せっかく外国にやってきたのだから、英語をものにして帰りたいと説得した。それからというもの、ビジネススクールや大学の語学コースに熱心に通うようにした。また、親は、滞在期間中開催された国際試合シンガポールオープンバドミントン大会に参加の日本人選手にお金を託してくれ、生活費も帰りの交通費も私に届けてくれた。

YMCA Katongの大半は長期滞在の留学生。その中に私も溶け込んできた。アクロバティックなバドミントンをするインドネシア人、先述のシンガポール工科学院バドミントン部の主将、いつもギターを弾き楽しませてくれる中華系のマレーシア人、同室のフィジー人、同じく同室の哲学するインド系マレーシア人などが親しい友達となった。ひとり、目立たない心惹かれる者がいた。朝早くでかけ、暗くなってから帰ってくるシンガポール工科学院に通う真面目そうなサラワク人だ。

ホステルに帰るなり、食事に出かけようとしていたので、「こんな遅い時間にまだ屋台街は開いているの？」と聞くと、「締まっているけど、いつも食事をお願いしているところがあるので大丈夫。」と言う。私も一緒に連れて行ってもらうことにした。やはり屋台街は締まっていたが、彼は近くの個人宅に入っていった。屋台街でナシ・チャンポールを売っているおばちゃんの家だった。

礼拝が始まるころだった。父親が先頭に立ち、2列目に男子3人、3列目におばちゃんが立っていた。5分ほどで礼拝は終わり、父親が振り向き、子供たちを次々と説教した。一番下の子は泣き始めた。おばちゃんが後ろからなだめていた。「これがイ

スラムの礼拝？」とサラワク人に聞いた。「そうだよ」。礼拝という行為の中に、一家団欒があり、家長への尊敬があり、説教があり、母親の後ろからの慰めがあった。日本では失われつつある一家団欒が日々の義務の礼拝とともに存在していたのだった。私はこの時、サラワク人に「この人たちがムスリムならば、私はムスリムの家庭を築きたい」と言った。もちろんサラワク人もムスリムであった。それからというもの、ホステルの中でも彼の部屋を訪れ、イスラムのことを聞くようになった。

その時、マレーシアをヒッチハイクしていた拓殖大学の学生がホステルに帰ってきた。土産話を聞いていると、クアラルンプルの国立モスクに、拓大OBの日本人ムスリムが住み込んでいるという。彼はその先輩の部屋に泊めてもらいイスラムに入信してきたばかりだという。またヒッチハイクに出発するというので、クアラルンプルまで一緒に連れて行ってもらうことにした。私の目的はイスラム入信であった。

クワンタン、トレンガヌー、コタバルと東海岸をヒッチハイクで北上していった。東海岸は貧困ながらもムスリムが多い地域であり、住民は素朴でいい人たちばかりだった。コタバルからクアラルンプルは遠い距離だったが、ヒッチハイクで進み、ついに拓大OBが住み込んでいる国立モスクに到着した。

その拓大OBはモスクに来た目的を聞いてきたので、「入信するためにやってきました。その前に日本人ムスリムにひとつ質問をしてみたいのです」と言った。その質問とは、単なる確認でもあった。内容は、日本の社会は酒を酌み交わす文化で成り立っているのではないか？ということであった。逆に彼から厳しい言葉があった。「旅行先でムスリム名をもらいたいだけで、入信して、

あとはイスラムを忘れていく日本人は多い。イスラムを選ぶからには、本物の信仰者になり、イスラムの指導者になってほしい。それでなければ入信などしてもらいたくない」というものだった。「私は本物でありたい」と答えた。「それならば、次のものを暗記できれば入信を許そう」と信仰告白の言葉、ファーティハ章、クルアーン短章 3 つ 4 つのメモを渡してくれた。あっという間に暗記し、私は国立モスクで入信することになった。私を連れてきてくれた拓大生は私を置いてまたヒッチハイクの旅に出かけていた。入信して、すぐに割礼をし、傷も癒えてから、シンガポールに帰ってきた。

ムスリムになってシンガポールに帰ってきた私は、屋台街のおばちゃんの家で温かく迎え入れられた。コメン家といった。3人の息子たちとともに礼拝の列に並ぶようになった。そして、昼間シンガポールイスラム協会 (MUIS) が開いている新入信者のための英語イスラム教室に週 2 通うようになった。しかし、私はまだ一人前になりきらないうちに、岡山に帰ることになった。もう休める期間を過ぎていたからだ。

### ③ 日本編その2

岡山に帰ると学生生活の再開である。退部して出かけただけに、封建的なバドミントン部に再入部するのは難しかった。入部したいのなら、2年生でありながら、1年生扱いとして掃除は率先して行い、大会出場も部の執行部からの許可を待つしかなかった。

1年前は中国四国でシングルス3位、大学のエース級だったものが、平の1年生からのスタートとなった。さらに、以前と違うことは、ムスリムだったことだ。

イスラムのホームページ管理人ページに当時の様子を描いた部分があるので紹介しよう。

「私はマレーシアの Masjid Negara で入信した後、岡山で学生生活を送っていました。いまだによく覚えているその頃のエピソードがあります。当時は周囲に誰もムスリムがおらずイスラムに関する情報源は、市販されている書籍と大学の図書館だけでした。その時のラマダーン月前に、東京のあるイスラム団体からラマダーン月時刻表が送られてきました。それを私は、大切に壁に貼って、毎日それを見ながら断食をしていました。「断食とは日中飲食をしない」という言葉のみを、真に受けてやっていたのです。だから、確かに飲食はしていなかったものの、たばこだけはしっかり喫っていました。また、その日の断食明け時間が来て、感謝とともに食事をしながら、西の空に高く輝いている太陽を眺め、その美しさと一日断食を終えた充実感を味わっていました。断食時刻表は、東京時間だったので、西の岡山はまだ太陽が高かった



のです。笑い話のようです。大学生にもなって断食時刻表の見方もわからないのかと言われてれば、ごもっともなことです。印刷された断食時刻表と、「断食とは飲食をしないこと」としか情報はなかったもので、仕方のないことです。

当時の私の礼拝とはいえば、これまた驚きです。入信して1ヶ月ほどシンガポールの子供たちと並んで、見よう見まねでやったことのある数回の礼拝の記憶くらいでした。礼拝したいと思った時に一人で、頭を付けたり立ったりやりましたが、動作も回数もでたらめでした。ただ、心の中はアッラーに対する畏怖と感謝を込めてやっていた記憶は残っており、いままで行ってきた礼拝の中で、最も集中していた礼拝のひとつと言えるほどです。これが、当時の私だったのです。

私のホームページ作成の目的の第1とは、こういう純粋なムスリム青年にイスラムの情報を与えることではないかと思うのです。その当時の私が、このホームページに出合っていたら、どんなに感謝しただろうと言えるようなホームページを作りたいですね。礼拝はどうするの？ 断食はどうするの？ この場合ムスリムとしてどういう判断をするの？ そういったものに、答えられるようなホームページにしたいものです。イスラム相談室を3年前に作った時から、私の対象とした相手は27年前の私自身だったのです」。1999年12月30日

しばらくして、私の部員として地位は、学年通りに戻され、大会にも参加できるようになった。そして、大学3年から、力を発揮しはじめた。結局4年生では、中国四国学生シングルス1位と

地域の頂点に立った。バドミントン選手として練習に励んだおかげである。一方、イスラムを学ぶ努力をしなかったため、私のイスラム知識はシンガポール当時のままで、信仰も徐々に色あせてきつつあった。このままでは、いつか私の心からイスラムが消えてしまうのではないかという不安を感じていた。ここは思い切って、一人前のムスリムになるために留学をしなくてはならないと考えるようになった。

マレーシア編へ続く

#### ④ マレーシア編

イスラムを学びたい。でも、どこに行けばいいのかわからない。私が知っているのはシンガポールだけだった。コメン家を頼り、シンガポールイスラム協会（MUIS）を頼りやってきた。全日制で学べるイスラムの学校は当時シンガポールにはなかった。

私は、昔、拓大生と一緒に辿った道を、ヒッチハイクで再び一人で辿ることにした。ただ、以前と違うのはムスリムであり、マスジドに寄り道をしながら、自分が暮せるいい場所を探しながらの旅だった。結局、これといった収穫はなく、国立モスク（マスジド・ネガラ）に辿り着いた。昔いた日本人はもちろんおらず、マグリブの礼拝を待ちながら黄昏時に旅の疲れを癒すように座っていた。このくたびれた外国人青年に、たまたま通りかかった若者が声をかけてきた。「どこから来た？」「日本から」「何をするために？」「イスラムを学ぶ場所を探しに」。実は、この出会いが私にとってこれからの留学人生をスタートさせるきっかけとなるのであった。

マレーシアは比較的新しい国で、イギリスから独立したのが1957年。そして、最初の国家プロジェクトとしてマスジド・ネガラが完成したのは、1965年秋のことであった。私がマスジド・ネガラに辿り着いたこのころ（1975年）は、各州のトップのコーラン読みを集めて国のために学ばせるタハフィズ・アル・クルアーン（コーラン暗記学院）が発足して間のなくのことであったようだ。そして、私に声をかけてきた若者とは、この学院の学生長バ

スリ師であった。後で聞いた話だが、彼がマスジドの周りを散歩することは稀で、その日はたまたま散歩したくなったそうだ。これも運命だった。この出会いがなければ、私は収穫なしで、シンガポールに帰っていたことだろう。さて、この素朴なエリートは、彼らを管轄している総理府宗教庁（現在の JAKIM）に掛け合ってくれた。「イスラムを学びたい外国人にもその場所を提供してやってほしい。そういう制度がないのなら作るべきだ」。しかし、首都クアラルンプルにイスラム中等学校はなかったのである。奨学金制度も、以前の日本人ムスリムがどこから受け取っていたかはわからないが、おそらく Perkim という新入信者支援をしていた宗教団体だったのではなかろうか。その時はまだ総理府宗教庁にそのような制度はなかったようだ。結局、その後時間はかかったが、総理府宗教庁から私に奨学金が出るようになった。

バスリ師は学院に掛け合ってくれて、一時的に彼らの寄宿舎に泊めてもらえることになった。さらに、バスリ師は私の留学先を探してくれた。以前このマスジドに住んでいた日本人ムスリムはマレーシア国民大学に通っていた。制度として、日本人がマレーシアの大学に進むのは、高校卒の資格があれば、手続きさえすれば入ることができるし、マレーシアの大学は主に英語で授業がすすめられていたので、日本人留学生にとってはたやすいことだと想像できる。しかし、本当にイスラムを学びたいならば、イスラム中等学校でマレー人子女といすを並べて学ぶのが理想だと言っていた。私は最初から本物を学びたくて、バスリ師にマレー人の文化を吸収ながら、一緒にイスラム中等学校で学びたいと伝えたのだった。

当時クアラルンプルが属する州は、スランゴール州であった。私の学校探しはスランゴール州内でなければならぬと宗教庁から条件を付けられた。州内にはわずか 2 つしかなく、クラン市のイスラム・カレッジと、ペラ州との州境サバ・ブルナム郡の中等学校のどちらしか選択肢はなかった。

バスリ師の出身校がサバ・ブルナムの中等学校だったので、そんなに優秀な学生を世に出す学校なら、と見に行くことにした。その学校は、以前は、ポンド (pondok) と呼ばれていて、カリスマ性のあるシェイフの周りに学生が集まってきて共同生活をしながら、学問だけではなく、農作業なども一緒に行っていたようだ。主に女子生徒はシェイフの自宅に隣接した 2 階建ての大きな寄宿舎に、男子生徒は学校を囲むように点在する 2 畳ほどの高床式の小屋に 2 人か 3 人ずつ住んでいた。水道も電気もなく、わずかに本が読めるだけの小さいブリキ缶のランプで学び、瓶にためた雨水とヤシの葉っぱや木を燃料として炊事を行っていた。生徒の持ち物は親元から持ってきたコメと 1 枚のサロン (腰巻布)、と学校の制服のみであった。昔は、生徒に年齢制限はなく、10 歳から 40 歳くらいまで学んでいたらしい。それが教育制度の改革により、州政府管轄下で、一人一人に机とイス、教室には黒板を備えた校舎となり、12 歳から 18 歳までのちょうど日本の中高一貫校へと変わったのである。カリスマシェイフは校長へ、他の先生方は教員となり、定められたカリキュラムで学び、その過程を修了すれば、大学へ進学することになった。しかし、まだポンド時代の面影は女子生徒の寄宿生活、男子生徒の小屋での生活に残って

いたようだった。

バスリ師と校長先生宅を訪れ、学校を視察して回った。校長先生はアハマド・ユソフ師といい、この地域では知らない人がいないカリスマシェイフだった。昔であれば、シェイフの二つ返事で私の入学は今日にでも OK だったろうが、州政府のイスラム事務所にて入学申請をするようにとのことだった。次の日、宗教庁の推薦状などを持ち、州政府のイスラム事務所を訪れた。外国籍の生徒を入学させるのは初めてのケースだということで、慎重に審議されたのか、何時間も待たされた挙句、また後日来ることになった。2 回目の手続きは、イスラム事務所から入学許可の書類をもらい、すべての手続きは終わった。

早速、お世話になったタハフィズ・アルクルアーン（クルアーン暗記学院）の仲間と別れ、晴れてサバ・ブルナムの中等学校へ入学した。正式学校名は Sekolah Arab Menengah Tinggi Salahuddin Abdul Aziz Shah（サラフディン・アブドゥル・アジーズ・シャー アラブ高等中学校）である。私のために校長は近代的な家を用意し、そこに同校在学中の三男と、親戚の男子学生も一緒に入り、3 人での生活となった。そして、私の振り分けられた学年は中学 1 年生であった。中学 1 年は 2 クラスあった。50 名ほどのクラスだが、この年の 1 年生にはサバ州からの短期留学生としてまるまる一クラスの生徒が約 1 年間いることになった。サバ州の教育レベル向上が目的の短期留学だったようだ。

私はこの時 22 歳。中等学校を普通に進級していくと 28 歳で卒業

し大学進学となることになる。それは、長すぎる。高校卒の資格が欲しいわけでもないのに、飛び級を許してもらえないだろうか？と校長先生に申し出た。クラス50人中5番以内の成績を取れば、次の学期は1学年飛び級するというもので、学期の間に1年分の勉強を独学で行うという条件も付けた。校長はもちろんOKだが、イスラム事務所の許可が必要だったので、出かけて、熱弁をふるい許可をもらった。イスラム事務所にとっては何もかも新しいことで困ったことだったろう。そして最初の学期末テストがあったが、飛び級どころか50人中49位という惨憺たる結果に終わった。

中等学校には、部活動として、スポーツ部というのがあった。日が高い夕方に集まりサッカーをし、風が止んだ夜から同じメンバーで野外でのナイターバドミントンになり、最後は残ったメンバーだけでセパ・タクローをするというものである。夕方のバドミントンは花形で寄宿舎の女子も応援に駆け付ける。バドミントンのヒーローは学校のヒーローでもあった。そこに、私が参加しはじめた。マレーシアが、いくらバドミントンが国技のような国でも、田舎の高校生が日本の大学でバリバリに練習していた青年に勝てるわけではない。男前でもあったヒーローの人気は色あせはじめ、ニューヒーロー日本人が登場し始めたのだ。そのうわさはあっという間に郡下に広がり、サバ・ブルナム最強の社会人チーム『ガルーダ』からスカウトされ、社会人チームにも練習に通うようになった。バドミントンはどこに行っても人と結び付けてくれた。

スポーツ部の活動が盛んになったのは、中等学校バドミントン大会郡予選を間近に控えていたからだだった。各学校2名の代表を

選出し、何週かにわたり郡の体育館でシングルストーナメントが行われた。一般の高校は当校のような宗教学校よりも生徒数も多くレベルも高いのが一般的で、大会での優勝は私でも難しいと感じられた。さて、男前の元ヒーローが登場した。学校と女子学生の期待を一身に受けコートに入ったが、いいところなしにあっさりと負けてしまった。期待が大きかっただけに、落胆の声も大きく、次の日の朝は「弱すぎ」と言われるようになった。ニューヒーローの私は別の日の登場となり、やはり期待を一身に背負って戦うことになった。私のうわさは何倍にも大げさに伝わり、対戦する相手がみんなビビって自滅してくれた。私は「あれよあれよ」という間に、最終日の準決勝・決勝に進んだ。決勝の相手はセンスのいいプレイヤーで、勝つのは難しそうだったが、接戦で自滅してくれ、優勝が転がり込んできた。

学業は順調で授業もわかるようになり、2回目の学期末試験では3番を取り、飛び級を果たした。以降、学期末試験では毎回5番以内を取り、2年間で6年分の勉強をしたことになった。1年目は、学校近くの家に住んでいたので、マグリブの礼拝は学校の隣の Masjid で行い、それからイシャーの礼拝まで約1時間少々、毎晩のようにたばこを喫いながら語らう地元の長老たちの輪に加わった。長老たちも私の参加を歓迎し、教科書では学べない信仰への知恵の含まれた寓話を話してくれることが多かった。このお話は、大いにプラスになり、徐々に信仰がついてきたように感じた。2年目からは、森の中の一軒家に引っ越した。踏み分け道を通って帰宅するため、毒蛇との遭遇が怖く、夜の移動は避け、必ず明るいうちに帰宅するようにしていた。そこでは、ハーフィズ



(コーランを全部暗記している) の学生とふたり住まいであった。一日 5 回の礼拝後は必ず 1 時間のコーラン独唱することを慣行とした。それを聞きながら間違いがあれば、友達が訂正してくれた。この 1 年間で私のコーラン読みは格段にレベルアップしたはずだ。

ビザの更新、宗教庁の呼び出しで、クアラルンプルに行くことが時々あった。たまたま、マスジド・ジャメに礼拝に行った時に、あるマレー人から呼び止められた。私が日本人であるというのを確認して、Warak と呼ばれる信仰篤き不思議な老人がいるから会わないかというのである。彼は日本人で、人の心が読めて、超人間的能力があるのだとか。何か怖そうで不思議世界の話の彼のエピソードとしていくつか聞かせてくれた。真剣に語る彼の話を信じて、その日本人に会いに行くことにした。まずは、人の心が読めて、信仰心がない者に玄関の敷居をまたがせないという関門があるらしい。

後日、その日本人が住むマラッカに向かった。彼が営む自転車屋さんの住所と屋号を確かめ、「アッサラームアライクム」とあいさつして敷居の前に立った。確かに日本人らしき老人が「ワアライクムッサラーム」と答え、メガネの奥から笑みが漏れてきた。私は第 1 関門合格し、敷居を超えて彼の仕事場へ入った。「3 日間滞在している間に、イスラムを教えてもらいたいのです」と伝えた。彼は言葉少なく「じゃあ、付いておいで」としか言わなかった。アザーンを聞くと、仕事を置いて、東京のサラリーマンのような素早い足取りで隣のマスジドに向かった。閉店すれば、家に急ぎ、服を着替えてマスジドに行く。晩御飯を食べると、またイ

シャーの礼拝に行き、その後スーフイーのズィクルを行っていた。私は3日間バイクの荷台に乗せてもらい着いて回った。言葉で教えてもらったものはないが、きびきびした彼の動きと、彼のしぐさに言葉では伝えられないイスラムの奥義があったような気がする。最終日師は言った。「日本にはイスラムがない。だから、行きたくない」と。私の心にグサッと突き刺さる大きな批判だった。「日本にイスラムを植えなければ」。奥さんが師について語ってくれた。「彼はコーランを読めないし、あなたほどのマレー語力も、イスラムの知識もないかもしれない。でも信仰心はマレー人の誰にも負けない」とのことだった。

この訪問の後クアラランブルに戻ってマスジド・ジャメに行くのと、また不思議マレー人に会った。「君がダアワで成功すれば、また、ここで会うことになるだろう」という言葉を残して別れた。以降何10年もの間、マスジド・ジャメに行くがその不思議マレー人にいまだに会うことはない。

マレーシアでは、信仰、コーラン読み、イスラムの基礎学力、マレー人としての文化の習得ができたように思う。入信6年目にしてやっと信仰心が芽生えたと自覚するようになった。

学期の区切りには休暇があった。休暇になれば、寄宿舎や小屋に住む学生が一斉に親元に帰っていく、実は私も親元としてシンガポールのコメン家に帰っていった。私は年齢的に子供たちの列にはならず、コメン氏を Abang(兄)と呼び、奥さんを Kakak(姉)と呼んだ。ムスリムとして成長を続ける私を見ながら、誇らしげにご近所に紹介してくれた。そして、私が休暇を終わりサバ・ブルナムに帰るときは、服や食料をたくさん持たせてくれ、お別れ

の駅でKakakは涙を流しながら別れを惜しんでくれた。「コメン家の一員だから、シンガポールが里だから、いつでも帰っておいで」と言ってくれた。

私が第6学年（高校3年生）に進級し、次は大学という段階で、私は宗教庁長官に留学先の変更許可を申し出た。「このまま私が留学を続ければ、次はNilam Puriという宗教大学か、一般大学の文学部宗教学科に進むことになるが、それは私にとって、いつまでもマレー語とアラビア語という二つの外国語を使いながら、学び続けることになる。私はここまでマレーシアに育ててもらったが、ここから本場アラブでアラビア語だけでイスラムの勉強をしていきたい」と伝えた。長官は残念だったが、私の選択を尊重し、認めてくれた。

エジプト編へ続く

## ⑤ エジプト編

本場に行きたいと言ったものの、手続きなど何もしていなかった。ただイスラムの最高学府アル・アズハル大学に入りたいという気持ちだけで、ビザなし、あてもなしで飛び込んだのだった。ちょうど、マレーシアの留学のスタートが、ヒッチハイクの末に行きついた目的地マスジド・ネガラでバスリ師との偶然の出会いがあったからこそ、留学につながったのだが、その時と同じ状況で飛び込むことになる。

困ったときは、ここを訪ねたらいいと長官からもらったメモが、アッパースイーヤにある「マレー人会館」の住所だった。私は、行く当てもないので、空港からまっすぐマレー人会館を目指した。荷物を持って入り口に立っていると、通りかかった学生が声をかけてくれた。クランタン州出身の学生だった。私の経歴を聞き、部屋に通してくれた。彼は、マレーシア学生会の執行部に私をサポートしようと掛け合ってくれていた。とにかくその夜は、彼の部屋にこっそりと潜り込むことになった。学生会は、マレー人会館を管理しているマレーシア大使館と交渉し、私の奨学金取得と留学手続き完了まで、マレー人会館に無料で住ませ、食事も無料という夢のような条件を引き出してくれた。私がマレーシアで総理府宗教庁の奨学生だったのが影響したのかもしれないし、マレーシア学生会と大使館の良好な関係がすべてを与えてくれたのかもしれない。

アル・アズハル大学の寮には数名の日本人留学生がいるという

ので、連れて行ってもらった。日本ムスリム協会から派遣された留学生たちで、ディラーサート・ハッサでアラビア語の勉強をしている留学2年目の学生たちで、ほぼ同世代か少し上の年齢だった。私のように何も手続きをしていない日本人の登場に、先輩日本人留学生たちは、手続きのお手伝いをしなければならなかったのだろうが、ノウハウも語学力も自信がなかったようで、マレーシア学生会にお願いしたらということになった。

私の奨学金取得と留学先の手続きを担当したのは、学生会きってのやり手で、あらゆる難しい手続きを可能にしてきたマ・ダウド氏だった。当時のエジプトでの手続きは、何度も窓口に通わされ、門前払い、たらい回し、書類の行方不明などがよくあり、言われるがまま通っていると一つの手続きが何ヶ月もかかることがある。スムーズに手続きを終わらせるには、辛抱とアラビア語力と人間関係が必要だ。私の手続きはゼロからのスタートで、普通の人には手に負えない手続きだった。マ・ダウド氏だからこそできる手続きなのである。彼は、わずかな日数で奨学金手続きを完了させ、シェイフ・アル・アズハルに表敬訪問も決めてきた。そして、他の日本人と同じディラーサート・ハッサへの入学手続きを完了させ、アル・アズハル大学の寮にも入寮できた。結局、すべての手続きを3ヶ月ほどで終わらせたのである。その間中、マレー人会館でお世話になったことになった。

マレー人会館ではいろいろな経験をさせてもらった。マハティール副総理、アンワル・イブラヒーム氏など後のマレーシア政界の中心人物の講演会があり、懇親会では学生に混じって懇談に加わったことがある。また、マ・ダウド氏もクランタン州出身

だったし、クランタン州出身の学生の部屋に出入りし、座長のようなマワルディ氏から個人的にイスラムを教えてもらったりした。氏は、クランタンの偉人 Tok Kenali のひ孫で一目置かれたシェイフだった。

当時、世の中はオイルショックの時代に入り、しばらくしてアラビア語ブームがやってきた。それでイスラムに入信し、アラブ諸国のイスラム大学への長期留学を目指した日本人がいた。それが彼らムスリム協会からの留学生たちであった。長期留学までしなくても、観光ビザで入国し、カイロ大学やアメリカン大学のアラビア語講座で学んでいたものも多かった。多いときは50名を超えていたと聞いている。

ちょうど同じ時期、私はアル・アズハル大学の寮に入り貧乏な学生生活を送りはじめた。奨学金は、寮費と朝食代、昼食代が引かれて5ポンドの現金をもらった。このお金で、夕食、バス代、書籍代などすべてを賄わなくてはならず、何かを削らなければ生活はできなかった。昼食は半分食べ、残り半分は夕食へ回した。近距離のバスにはほとんど乗らず、徒歩で済ました。日本人の付き合いで集まることがあったが、貧乏学生の私は、よほどのことがない限り参加することはできなかった。ただ、日本大使館近くに住むムスリムアラビスト K 氏宅は、若い学生たちが出入りしやすい場所だったし、街に出れば私も寄った。もう 1 か所、アングロスイスというホステルにはたくさんの日本人が中長期滞在していたので、集合場所になることが多かった。

私が K 氏と知り合ってもなく、K 氏の妹がエジプトにやっ

てきた。エジプト好きで、イスラムに興味を持っているということで、K氏からイスラムを教えてやってほしいと頼まれた。週1くらいの割合で妹にイスラムの信仰についてのお話をしてあげた。しばらくして入信するという事になった。ちょうど、K氏の結婚相手も入信の必要性があったので、二人を連れてアル・アズハル・モスクで入信させた。私が入信まで導いた最初のケースだった。妹をさらに一人前のムスリマに育てるため、知り合いのインドネシア人女学生が共同生活しているマンションと一緒に住まわせてもらった。インドネシア人たちからイスラムを教えてもらい、ゆくゆくはアル・アズハルの女子学部へ入学することを目標とした。でも、実は内心アングロスイスで日本人の中で過ごすよりは、特別に私のテリトリー内に置きたかったのが本心であった。K夫妻からは、「妹はムスリマになり、結婚相手もムスリムでなくてはならない。もらってくれないか。それが二人にとって一番いい」と言われ、大きな味方を得た。妹も慣れない民族の中で緊張の生活が続き、私が訪ねる度に笑顔がこぼれ、いつも私の訪問を心待ちにしていたようだった。私はイスラムを学び貧乏な学生生活をしていたので、結婚などは一生ないのではないかと思っていたが、ここで一気に恋愛が生まれ、結婚への運びとなった。

結婚については、マレーシアのペリス州出身のマフムード氏が、イスラム最高評議会（エジプトイスラム庁に当たる）に結婚式を上げてもらおうと言い出した。日本人同士がアル・アズハルで出会い結婚するという過去にないケースという理由で手続きを続けた。そして、イスラム最高評議会を動かし、最高評議会議長官とアル・アズハルのシェイフの出席で、日本国大使も招いて結婚式が大々的に行われた。

一文無しの私が結婚式まで挙げてもらい、さらに、結婚によって妻と妻が貯めてきたお金も転がり込んできた。そのお金でマンションを借り新婚生活が始まった。もちろん、学業も順調で、ディーラーサート・ハッサは毎日通い、2年目アル・アズハル大学宗教学部1年生へと進級する手続きも完了した。ディーラーサート・ハッサは、アル・アズハルの学生寮の敷地内あり、毎日徒歩で通えた。大学入学前の予備課程としてイスラム基礎科目をアラビア語で学習でき充実した内容だった。

それ以外に私が欠かさず熱心に通ったのは、寮のモスクで週3の割合で開催されていたタジュウィード教室である。最初はひとりの日本人ムスリムと一緒に通っていたが、あまりにもシェイフからの訂正とやり直し指示が多く、精神的にめげて来なくなった。20名ほどの各国からの学生に交じって通い続けたが、やはり、私に対する訂正とやり直し指示は多く、正確なマハラジュ(調音点)、口室の形、口の形の細かい指示がOKと言われるまで繰り返された。少なくとも、一緒に行っているマレーシア人やインドネシア人よりは自分の方が正しい読みをしていると思っていたが、彼らに対して、ほとんど訂正はなかった。ある時、先生に聞いてみた。「私は、友達のマレーシア人よりも下手な読みをしていますか?」「正直言えば君のコーラン読みは生徒の中でも一番うまいくらいだ。しかし、イスラム諸国から来ている者は上手に読めなくても、他にたくさんのコーラン読み専門で学んでいる者がいる。だから彼らは大体読めればいいのだ。しかし、君は違う。君にタジュウィードを完璧にマスターしてもらわなければならない。日本人には君以外にコーランをちゃんと読める者はいな



いからなのだ。だから、厳しく訂正する」。そんなものだと思っていた。ただ、自分の発する音声と、耳に伝わる音声は違うので自惚れの思い込みでは間違いで、やはり先生の耳に届いた音声への訂正は素直に聞くようにしなければならないと思っていた。また、趣味としてファジュルの礼拝前のコーラン読みをモスクに聞きに行った。当時の有名カーリー(コーラン読み手)としてシェイフ・マハムード・ハリール・フサリー、シェイフ・アブドル・バースイト、シェイフ・アリー・ルバンナーなどがいたが、コーラン読み割り当て表のようなものが販売されており、モスク名とカーリーの名前をチェックして、彼らの生のコーラン読みを聞きに行ったのである。あまり、頻繁に行くのでそのうち顔を覚えてもらったようで、着いたら温かい視線が飛んできた。

私のエジプト滞在後半のある日のクルアーン教室後、先生は私を呼び止め「おめでとう。これで日本民族のファルド・キファーヤ(民族または社会の誰かひとりが達成しなくてはならない義務)は達成された」と言ってくれた。私がエジプトで得られた勲章の一つである。

金曜礼拝は、寮のモスクか、マレー人会館近くのモスクに出かけることが多かった。後者には、マレーシア人留学生と近くの町工場や建設現場の労働者が集まっていた。私が育った2つの国の人々を見られる象徴的なモスクであった。マレーシア人は、金曜日は洗濯の行き届いた清潔な服装でモスクに入り、エジプト人は、薄汚れた作業着の礼拝者が多数いた。よくマレーシア人はそういうエジプト人を批判していた。『清潔は、信仰の半分である』な

のにと。モスクでは、「フトバ（説教）」の間に修復工事のための募金箱が回ってくる。募金したければこっそりとお金を入れ、募金できなければ隣に回すという形式で行われている。マレーシア人も私も日本円にして10円とか100円入れるくらいのものだが、私の隣にいた労働者風のエジプト人が高額紙幣を複数枚重ねて入れた。3万円くらい。内心信じられなかった。彼の月給は3万円もないはずだ。モスクのためにそんな大金を入れられるその気持ちは何なのだろう。

マレーシア人は清潔な部屋で、一人で礼拝することが多いが、エジプト人は路上で礼拝している人がいれば、服が汚れるのも厭わず、すぐに列に加わる。礼拝は早い時間にジャマア（複数）で行うことをよしとするものだ。イスラムの肝心のポイントは、エジプト人がより押さえているのかもしれない。そういうエジプト人を、私は好きなのである。

私はかなり後になって、タイ南部のイスラム小学校に寄ったことがある。教室で講演したあと、その学校を後にするときに、寄付として10万円ほど置いて帰った。やっとエジプト人の列に並べたのかもしれない。

リビア編へ続く

## ⑥ リビア編

さて私たちの結婚は、日本の親からの承諾をもらっておらず、また、お世話になったシンガポール、マレーシアにも挨拶まわりをしなくてはいけないと思い、久しぶりに帰国した。ちょうどこの1970年代は日本赤軍が国際テロ事件などを起こし、アラブというとキナ臭い匂いがしていたので、私の両親も心配していたようだ。見たことのないムスリマの結婚相手となるとさらに心配だったのだろう。しかし、妻本人と会って、両親の不安は吹き飛んでいったようだ。

その後、シンガポールのコメン家へのあいさつ、マレーシアの中等学校へのあいさつ、そして最後に宗教庁長官へのあいさつと回った。宗教庁長官ナワウィ氏はアル・アズハル大学で留学を続けることに難色を示した。エジプトは奨学金が少なく、生活のために働かなくてはならなくなる。そうなるとイスラムの勉強は中途半端になるだろう。イスラムの勉強はどの国でやっても同じだ。十分な奨学金を出してくれて勉強に打ち込めるサウジアラビアやリビアに行くことを薦めるとアドバイスをくれた。そして、私たち夫婦は、宗教庁の好意で敷地内の宿泊所に無料で住まわせてもらい留学手続きをすることになった。いまだに、マレーシアにいる限り宗教庁の奨学生であるという理由をこじつけてもらったようだ。

サウジアラビアの宗教大臣がマレーシアを訪問した。これがチャンスとばかり宗教庁長官との会談後、私も入室させてもらい。

長官は私を紹介し、サウジアラビアに連れて行ってほしいと申し出てくれ、大臣も了承してくれた。早速、大臣ご一行と一緒にサウジアラビア入国ができるのかと思いきや、大臣秘書が大使館に伝えたので、あとの手続きは大使館でやってくれとのこと。大臣の許可があるので、留学は決まっているようなものだと言ってくれた。しかし、サウジアラビア大使館に手続きにいくものの、なかなか前に進まない。何か月も待たされた。妻は妊娠して徐々におなかが目立つようになってきた。これ以上待てないのことも長官に伝えた。最善の方法として、長官はサウジアラビアの手続きを諦め、リビア大使に連絡を取ってくれた。そして、2、3日で私のリビア留学は決まった。

お腹の大きい妻を連れてリビアのトリポリ空港に到着した。大使館発行のビザは問題なかったのだが、イスラムダアワ大学からのお迎えが無かった。仕方がないので、タクシーに乗って大学本部に行った。何かの手違いなのか、私の名前は本部には届いてなかった。アラブではありがちなことなので驚きはしなかった。また、この時点から本当の手続きをして、ゲットできるのもアラブであった。奨学金、入学、夫婦で住める場所をお願いした。

イスラムダアワ大学はまだできて間もない大学で、やっとこの年第1期卒業生を出し、予備校といえる高校が開校したばかりだった。大学の学長は、シェイフ・スブヒ宗教大臣が兼務していた。多忙な大臣だが、この大学の授業をほぼ毎朝見回るほど教育に熱心な大臣だった。アル・アズハル大学と違う点は、何万人もの学生を世界中から集め大講義室でマイクを使って授業をし、

出席など取ることはなく、欠席しても試験前にノートを借りれば進級試験は何とかなるのに対して、一方のイスラムダアワ大学は1学年40名程度。欠席すればすぐにわかるし、時々教授が寮の部屋をノックすることもあったので、授業をさぼることはできなかった。追試はあるものの全教科合格でやっと進級がかなうもので、ごまかしは効かず、毎年生徒は真剣に進級試験に立ち向かうしかなかった。

まず初めに学年振り分けの口頭試験があった。高校ができたばかりだったので、試験は形だけでほぼ全員高校2年生からスタートである。中にはインドネシアの博士課程だった学生が、高校2年生編入で何年分も予定が狂った学生もいた。私の場合は、お腹の大きな妻同伴で、妻も学生として授業に通うというので、学校側も男子寮の中に特別に家族部屋を作ってくれた。私の同学年は約80名でほとんどが男子学生だったが、妻とタイ人の二人だけが女学生だった。高校2年生から大学卒業までの6年間、80名の学生のうち、進級がかなわず、下の学年に取り残されたり、途中で退学する者などがでてきて、結局入学から卒業までストレートで進級した者はわずかに20名少々だった。もちろん上の学年から落ちてくる者もいたので、卒業時の同窓生は約50名であった。日本の大学では考えられないほどの厳しさだ。

ここでの生活は申し分なかった。まもなく第1子（長女）が生まれ家族3人での生活になったが、寮には朝昼晩の食事つき、家族用に毎回食堂から部屋へ食事を運んできて食べていた。奨学金も十分に贅沢はできないものの金銭的に事欠くことはなかった。ただ、男子寮の中に家族で住む妻は、どれほど度胸が据わってい

たことかと感心する。

高校2年生の進級試験は、教授からの内申点50点満点、試験の点数50点満点で、二つの合計が50点以上あれば合格というものであった。試験開始前1週間で各教科の内申点が明かされて、私は啞然として教授に詰め寄った。東南アジアの学生のほとんどが30点から40点の内申点をもらっていた。つまり合格まで試験で10点から20点獲得するだけでいい。私には内申点20点であり試験で30点以上の結果を出さなくてはならない。「私と東南アジアの学生は何の差があるのですか?」「彼らはみなネイティブで幼少よりイスラムを学んでいる。君は入信して間もないので、まだイスラム理解が伴っていない」「教授、それは納得いきません。私は少なくとも、一マレーシア人のつもりでイスラムを勉強してきました。イスラム理解だって劣っているとは思えません。それからこの内申点は新入信者へのいじめではないですか」。しかし、この内申点に思い当たる節が無くはなかった。それは授業中妻に日本語で解説したりしていたから、日本人夫婦は授業中におしゃべりをしていると勘違いされたかもしれない。結局そのまま試験となり、たいへんな試験勉強の末、40点近くを獲得し進級を果たした。教授もそれからずっと私のことを気に留めてくれ、「君は授業を理解できている。」と言ってくれた。

この試験の成績上位者は1番から20番まで貼り出され、勉強の励みになった。また、大学では成績上位者は貼り出されたうえ、驚くことに上位5人には多額の報奨金が支給されていた。

2年間の高校過程は無事終わり、大学へ進級した。家は、旧市

街地スーク・トルクにインドネシア人留学生3家族と一緒に家を借りた。石畳の道路に面したところに、扉がひとつあり、その扉を抜けて中に入ると中庭があり、それを囲むように2階4部屋と台所がある伝統的なアラブの家である。そこに4世帯で住んでいた。妻とすれば、男子寮内での緊張した生活から解放され、奥様方と一緒におしゃべりができるようになってある面よかったようだ。また、妻は第1子ができて学生という身分は返上していたので、この時は完全に主婦になりきっていた。私は自宅から大学へ毎日通う生活となり、買い物と一緒にスーパーマーケットや市場に出かけるようになった。しかし、時とともに欧米諸国からのリビアに対する経済制裁が厳しくなり、欲しい食材が買えない状態になっていった。

リビアに着いて間もなく日本人補習校の教師の仕事をお願いされた。週1休日の時だけ小中学生の日本人子女に国語と算数を教えるのだが、リビアにいる間中、6年も勤めあげた。さらに、大学生になってからは、企業などに頼まれて通訳をすることもあった。奨学金で生活費は足りていたが、これらのアルバイトをすることによって、多額のお金が入ってきた。しかし、リビアディーナールから外貨への換金は制限があったので、溜まっていくのはリビアディーナールだけだった。

スーク・トルクに移ってしばらくして第2子（長男）が生まれた。リビアの経済制裁を心配して、義兄であるアラビスト K氏が、1年間仕事先として日本企業のリビアトリポリ支社を選んでくれた。子供たちのこと、生活のことを心配してくれたのだろう。よく遊びに来てくれたし、手に入りにくい食材も運んできてくれた。

ある日のこと、長男が急病となり私は抱きかかえて病院に行ったのだが、朝から午後遅くまで待合室で待たされた。リビアは社会主義国で医療費無料だが、病院数に対して患者数が多く、こういう状況の時にでも待たされることを知った。病院の状況、経済制裁下を考えれば生活しにくい国となってしまった。ついには、大学2年生が終わると同時に、家族を日本に送り届けた。妻と二人の子供は、私の両親と共に、愛媛県北条市（現・松山市北条）で暮らすことになった。

家族の居なくなった私は、3年生から大学の寮に移り勉強三昧の日々を送ることになった。ちょうど一時帰国時に連れてきた日本人ムスリムE君が高校へ入り、後進指導の遣り甲斐もできてきた。勉強ばかりしてきた私の轍を踏まず、会話を中心にアラビア語のレベルアップを最優先するようにとアドバイスした。

さて、私の成績は高校時代から徐々に上がってきた。大学2年生では、日本人では無理だろうと思われていた10番以内にまで躍り出た。ただ、報奨金までは手が届かなかった。ところで報奨金はいくらだったかということ、日本円にしてほしい1番60万円、2番30万円、3番20万円…だったかなと記憶している。

大学3年の進級試験はとんでもない報奨が用意されていた。上位20名にはハッジ切符と路銀、上位5名には例年よりは多い報奨金であった。ただし、条件として自分の国のハッジ団を率いて指導に当たるということであった。私の成績はこの年、得意教科が多く2番となり、報奨金とハッジ切符をもらった。ハッジ切符は、とんでもない世界旅行である。トリポリーロンドンー東京ー



ジェッターローマートリポリというものだった。母国に帰ってハッジビザを取得し、母国からのハッジ団の一員としてメッカに向かうというものだ。しかし、日本からのハッジ団はその年はなく、東京のサウジアラビア大使館でハッジビザを取ったのは私一人だけだった。

私は一人でジェッタに着き、メッカを目指した。途中ハッジの登録事務所に寄って、ハッジ登録をしたが、日本からのハッジ団はいないので、顔で判断されて、ウイグルハッジ団の一員に入れてもらった。メッカの宿泊所は、バングラデシュ系の大家さんが管理するお宅で、ウイグル人約50名と私一人だった。ウイグルからはもう一団が別の家に約50名泊まっていたようだった。彼らのリーダーのダームッラー師は私と同じ家におり、唯一アラビア語ができる人だったので、私は師の補佐をさせてもらった。メンバー100名のほとんどは60歳以上の高齢者ばかりで、彼らの手を引きながら、感激的な価値あるハッジをさせてもらった。滞在中、偽札事件、他国ハッジ客とのトラブル事件などいろいろな事件に出くわし、ウイグルの人たちを守り、頑張ることになる。ハッジ記については別の機会に書いてみようと思う。

リビア留学の6年間はいい同級生に恵まれ、授業時間以外もよくダアワに関する議論を行った。とくに、仏教国タイからの留学生との議論はそのままだ日本に当てはまることが多く、将来の日本のイスラム社会をシミュレーションしながら語り合うことが多かった。この時考えていたことが、実際に今の日本で話し合われていることに驚きを感じる。

勉強を通して知識を補充しながら、自分の信仰心の増減を振り

返ることに十分な時間があった。また、信仰に刺激を与えた夢がある。それはいまだにはっきりと覚えている夢である。リビアの高校時代、夢の中で預言者が流し目でちらりとこちらを見てすぐに去っていき、私は追おうとしたこと、次は、大学2年スーク・トルク在住時代に、がけから落ちていく長男を助けられずに声を上げる私がいたことだ。預言者の夢への登場はどんな意味があったのかわからないが、どちらの夢も私の信仰心の足りなさへの警告だと捉え、次の日から急に真剣に礼拝に取り組んだ。

ところで10年にわたるマレーシアとアラブの留学生活の中で、語学習得に苦勞したのではないかと思われるかもしれない。しかし、どこにいても語学習得に苦勞したと感じたことはない。私が学んでいたのはイスラムであって、言語は単なるイスラムを学ぶための手段（ツール）なのである。だから、語学で苦勞するわけにはいかないのである。

最終学年大学4年生の卒業試験は、イスラム諸国出身のほとんどの学生にとって将来を左右する大切な試験だった。成績評価は、合格にはムムターズ (excellent)、ジャイイド・ジッタン (very good)、ジャイイド (good)、マクボール (acceptable) の4段階ある。しかし、卒業証書にマクボールと書いていれば、教員としての就職は難しく、それならわざとに落第して来年の卒業試験を受けた方がいいそうなのだ。誰でも少しでもいい結果を取れるように卒業試験は頑張る。私も頑張ったが、3年生より順位を落とし5番でジャイイド・ジッタンであった。この1年間の勉強時間はかつて経験したことのないほど頑張ったつもりだ。この年、一

番厳しかった教科は、「フトバ（説教）」である。一人前のシェイフとなるには必要不可欠な科目だ。教授たちを前に、与えられたテーマに沿って即興でフトバを行わなくてはならない。アラビア語力はもちろん、コーラン暗記、多数のハディースの蓄積、説得力が求められ、総合的能力が必要な科目だ。コーラン朗読ミスは0点となるので記憶に自信のないアーヤは使えない。私をはじめアジア系の学生には厳しい教科であった。

とにかく、晴れて卒業した。私は、日本に帰る前に、シンガポールのコメン家とマレーシアの宗教庁長官ナワウイ氏に卒業報告と感謝の挨拶に行った。長官は私に就職先を用意してくれていた。それは1983年にできたばかりの国際イスラム大学の教員であった。そこで、私は長官に言った。「マレーシアには私のようにイスラム大学を出たシェイフは山ほど居ます。でも日本にはほとんど居ないのです。いい仕事がなくとも日本に居続けることが大切なのです。私は「イスラムの杭」として、日本の社会で生きていきます。杭としていつも立っていれば、イスラムを求める者が頼ってくるはずです。マレーシアが私を育てたのは、マレーシアのテレビで拍手喝采を受ける変わった日本人を作るためではなく、日本にイスラムの杭を立てるためではなかったのですか?」。ナワウイ氏は解ってくれて、私を送り出してくれた。この年が、長官として最後の年だったようだ。氏は次の年、国際イスラム大学事務局長として天下りしたらしい。

留学記終わり

## **Coretan Diari Imam Abu Mahdy Hamanaka (Sulaiman Akira Hamanaka)**

*Terjemahan oleh Ibnu Dagang*

### **Bahagian 1: Jepun**

Aku dilahirkan pada tahun 1953. Waktu di mana Jepun sedang berusaha membangunkan semula negara selepas perang. Ayahku bekerja di kilang penapisan minyak, tetapi, sebagaimana kuat pun dia bekerja masih tidak mampu untuk menyara kami sekeluarga secukupnya. Ibuku juga bekerja menjahit berdekatan rumah untuk menampung keluarga. Tidak lama selepas itu, adikku lahir, disebabkan oleh kekangan hidup, aku yang sulung telah dihantar untuk dijaga oleh atuk dan nenek di kampung.

Ekonomi Jepun berkembang pesat, gaji ayahku pun nampaknya semakin cukup untuk menyara kami sekeluarga. Sejak tadika aku diambil semula oleh emak dan ayah, beserta dengan 2 adik lelaki, menjadikan kami 5 orang sekeluarga. Sejak waktu itu ayahku sangat suka bermain badminton, dia mendirikan tempat latihan di tempat kerjanya, dan juga menjadi orang penting dalam Persatuan Badminton Ehime. Boleh bermain badminton untuk mengisi masa lapang menunjukkan kehidupan keluargaku bertambah baik dan lebih banyak masa terluang.

Aku dan adik-adik secara sendirinya mengikuti minat ayah, dan menjadi suka bermain badminton. Di sekolah menengah tinggi aku masuk ke Sekolah Menengah Tinggi Matsuyama, dan semestinya menjadi ahli kelab badminton sekolah. Dengan usaha kuat semasa latihan, aku berjaya menjadi Juara Ehime dan juga mewakili sekolah dalam kejohanan sekolah tinggi seluruh Jepun. Apapun waktu itu sangat sedikit maklumat berkenaan sukan badminton, dari luar negara mahupun dalam negara, pemain mana yang paling hebat, macamana cara dia bermain, tiada sebarang maklumat yang sampai. Sampaikan juara dunia pada masa itu, Rudy Hartono (Indonesia) pun aku hanya tahu gambar dan keputusan perlawanannya sahaja. Ini membuatkan aku merasa sangat-sangat ingin mengenalinya lebih, dan disebabkan mahu dapatkan maklumat tentang Rudy Hartono ini membuatkan Indonesia menjadi negara idamanku.

Oleh kerana aku belajar di sekolah yang mementingkan sambung

belajar, hari demi hari kegusaran terhadap ujian kemasukan ke universiti semakin dirasai. Pada masa itu, ada sahaja aktiviti yang dibuat untuk lari dari memikirkan situasi sebenar. Walaupun aku berada di kelas aliran sains, idaman terhadap Indonesia membuatkan aku mahu menyambung pelajaran ke Univ of Foreign Studies, jurusan Bahasa Indonesia, dan cuba mendapatkan buku berkaitan Bahasa Indonesia di kedai-kedai buku.

Juga, untuk kelas aliran sains ini, mata pelajaran sejarah dunia bukanlah subjek yang penting, hanya sebagai mata pelajaran pelengkap jadual. Cikgu mata pelajaran Sejarah berusaha untuk menarik minat pelajar supaya tidak mengantuk dengan mengalihkan pandangan dari pemerhatian sejarah dunia berasaskan barat secara buku teks, kepada pemerhatian sejarah dunia secara lebih adil, ini sangat menarik minat aku. Di situ, topik yang kurang diambil perhatian, iaitu berkenaan sejarah dunia islam, cikguku telah menceritakan berkenaan Islam yang muncul pada kurun ke-7 di semenanjung arab, berkembang pesat di Timur Tengah, berkembang ke seluruh dunia, dan masih terus berkembang sehingga sekarang. Melihat perkembangan ini aku merasakan mesti ada sesuatu pada islam yang membuatkan orang tertarik kepadanya. Cikgu juga ada menyebut, untuk pelajar yang akan mengambil peperiksaan kemasukan ke universiti seperti kamu semua mungkin tiada masa untuk ini, tapi jika ada masa cubalah baca kitab suci meraka, Al-Quran, sesuatu yang sangat menarik. Tertarik dengan kata-kata cikgu ini, aku pergi mendapatkan kitab suci al-quran, buku terjemahan dalam bahasa jepun di perpustakaan sekolah. Buku tersebut ditulis dengan bahasa sangat tinggi dan klasik, juga terdapat ilustrasi Muhammad. Aku sangat tertarik dengan buku terjemahan Quran yg lama ini, terus kupinjam tanpa memulangkannya kembali.

Sebagai cara untuk lari dari kenyataan perlu menduduki peperiksaan kemasukan universiti, aku membaca buku berkenaan Bahasa Indonesia, juga buku-buku berkenaan Islam. Tetapi, untuk masuk ke Univ of Foreign Study dalam jurusan Bahasa Indonesia adalah amat tidak praktikal bagiku dan terpaksa pasrah untuk berputus asa. Pembacaan buku-buku berkenaan Islam pun tanpa disedari telah dilupai. Akhirnya aku masuk ke universiti awam dalam jurusan sains.

Berjauhan dari emak ayah, mulalah kehidupan ku sendiri di hostel.

Selari dengan kemasukan ku ke universiti, aku juga menjadi ahli kelab badminton, ku tumpukan sepenuh perhatian kepada latihan. Pada masa itu Badminton Club di Okayama Univ merupakan kelab terkuat di kalangan universiti awam Jepun, secara sendirinya latihan amat lasak dan memenatkan. Dengan keahlian yg ramai melebihi 100 orang, kelab ini menjadi satu kelab gergasi. Hubungan secara hirarki (senior & junior) juga amat tegas, menjadikan hubungan sesama rakan seumur lebih kuat. Selesai latihan, diajak senior keluar makan, berkumpul dan makan bersama-sama di hostel, bermain mahjong, menjadikan kehidupan sebelah malam pun agak sibuk.

Pada satu hari, ada seorang rakan kelab badminton datang bermalam. Tujuannya untuk mengajak sertai persatuan keagamaan. Pada malam itu, hanya dia bercakap secara sebelah pihak. Malam seterusnya dia datang lagi, kali ini aku mula bertanya. Malam ke-3, aku mula menerangkan agama yang ideal bagi ku. Apa yg aku cakapkan pada waktu itu hanyalah secebis pengetahuan yang ada (melalui pembacaan sebelum ini) berkenaan Islam yang aku tahu, aku merasakan dapat terangkannya seperti sangat sistematik. Selepas peristiwa itu, aku merasa sedikit faham tentang agama Islam. Tetapi itu tidaklah memberikan minat yang lebih mendalam kepada ku.

Untuk badminton, masa selain kuliah digunakan, dari pagi sampai malam, setiap hari kehidupan berpusat kepada badminton. Tetapi, tetap ada ruang dihatiku, yang berputik semasa sekolah lagi, idaman aku terhadap negara luar muncul kembali. Aku dapat melanjutkan pelajaran ke universiti yang dikatakan agak bebas (aku lulus univ pertahanan dan univ okayama, aku pilih okayama kerana lebih bebas), agar dapat mengintai peluang mengembara ke negara luar. Semestinya tujuan akhir adalah ke Indonesia. Untuk mengumpul sumber kewangan, aku mula bekerja sambil, disamping memperkembangkan pelan perjalanan. Perjalanan dengan kapal terbang pada masa itu sangat mahal, aku cari di akhbar, terjumpa perjalanan murah dengan kapal ke Singapura pada harga 60,000 yen menggunakan khidmat Oyama Shipping. Peringkat akhir pengumpulan sumber kewangan aku adalah dengan meminta duit poket dari emak ayah supaya diawalkan untuk 4 bulan. Aku berjaya menipu emak ayah untuk tujuan ini.

Pengembaraan kapal menjadi realiti. Tidak disangka, yang aku jangkakan kapal kargo merupakan sebuah kapal penumpang mewah Inggeris, Oh Cadiz. Tetapi, aku hanya dapat bilik seperti dorm di bahagian bawah kapal. Di bilik bawah ini terdapat ramai anak muda yang mengimpikan untuk menjadi kelasi. Kapal mewah ini berlepas dari Kobe singgah di Nagasaki, Hongkong dan Singapura menuju ke Australia. Aku dan ramai lagi kebanyakannya akan turun di Singapura, hari-hari sebelum sampai kami bercerita tentang impian masing-masing, bertukar maklumat dan menjadi akrab.

## **Bahagian 2: Singapura**

Kapal Oh Cadiz berlabuh di Singapura yang sentiasa di musim panas. Kebanyakan pemuda Jepun bermalam di YMCA Hostel Katong yang merupakan tempat backpacker berkumpul. Di sini merupakan tempat yang dapat mengumpul seluruh pelajar dari Asia Tenggara untuk belajar di universiti atau business school di Singapura. Ia asalnya sebuah rumah utama dan sampingan di dalam taman berpadang rumput kepunyaan orang kaya yang telah diubah suai, kesemuanya ada 10 bilik, setiap bilik boleh memuatkan 2 ke 6 orang. Aku sebilik dengan pelajar Malaysia dan Fiji, serta 3 orang pelajar Jepun yang datang bersama-sama dengan ku.

Dari hari ini, aktiviti kawan-kawan Jepun bermula. Ada yang memulakan perjalanan berbasikal mengelilingi dunia, ada yang ber hitch-hike ke asia tenggara, seorang demi seorang telah pergi. Ada juga yang mencuba untuk membuka syarikat di pelabuhan Singapura, untuk tinggal di sini mereka telah cekal bersedia, hampir setiap hari keluar untuk mendapatkan maklumat secukupnya. Untuk aku yang hanya bercita-cita mengembara ke luar negara, tiada matlamat yang pasti, hanya banyak bergerak bersama mereka yang masih berada di hostel.

Setiap pagi, aku beli surat khabar dan sarapan di warong berdekatan perumahan, buat sementara waktu ini aku banyak membaca surat khabar. Mulanya akan sentiasa membelek kamus, lama kelamaan boleh berbual, jika ada pelajar luar lain aku pun sudah boleh bertanya makna perkataan yang aku tidak faham kepada mereka. Juga, di hostel ini ada kapten dari Kelab Badminton Politeknik Singapura yang juga orang Malaysia. Aku selalu ikut dia berlatih secara berkala.

Aku telah kumpulkan duit dengan menipu emak ayah untuk datang ke Singapura, aku yang sepatutnya berada di Okayama telah menulis surat kepada emak ayah memberitahu yang sekarang berada di Singapura. Perjalanan ke luar negara masih merupakan perkara yang jarang berlaku di waktu itu, tidak dapat digambarkan betapa terkejutnya emak ayah ku. Tetapi, dah alang-alang berada di luar negara, aku memujuk mereka dengan menjanjikan akan mahir berbahasa Inggeris. Sejak itu aku mula mengikuti pengajian di Business School dan kursus bahasa di univeristi. Selain itu, semasa aku di sini ada pertandingan badminton terbuka Singapura, aku telah meminta ayah mengiriskan duit melalui pemain Jepun yang datang bertanding, duit untuk keperluan sara hidup dan tiket pulang nanti telah dikiriskan.

Di hostel YMCA Katong ini kebanyakannya pelajar yang datang untuk jangka masa panjang. Aku pun join sekali dengan mereka. Orang Indonesia yang bermain badminton secara akrobatik, kapten Kelab Badminton Politeknik Singapura yang disebut di atas, Cina-Malaysia yang selalu bermain gitar, kawan sebilik dari Fiji, juga kawan sebilik India-Malaysia yang selalu berfalsafah, telah menjadi rakan akrab ku. Ada seorang yang tidak menonjol tapi menarik perhatian ku. Dia keluar awal pagi, pulang setelah gelap, belajar di Politeknik Singapura, orang Serawak yang nampaknya agak serius.

Masa dia pulang ke hostel, aku nampak seperti dia akan keluar semula untuk pergi makan, aku bertanya “ada ke warong yang buka lewat malam ni?” Dia jawab “semua tutup tapi OK sebab ada tempat yang aku selalu pergi makan”. Aku minta untuk ikut sekali. Seperti diduga, semua warong dah tutup, dia telah pergi ke satu rumah persendirian. Rumah makcik warong yang menjual nasi campur. Mereka seperti baru mula untuk sembahyang. Ayahnya di depan, baris ke-2 ada 3 orang lelaki, makcik tersebut berdiri di baris ke-3. Sembahyang tersebut berakhir dalam 5 minit, ayahnya berpaling dan bercakap sesuatu kepada anak-anaknya. Anak yang paling kecil mula menangis, makcik dibelakang cuba menenangkan. Inikah sembahyang orang Islam? Aku bertanya kepada kawan dari Serawak itu. Dia jawab yer. Dalam sembahyang itu ada perjumpaan keluarga, ada hormat kepada ketua keluarga, ada syarahan, ada pujukan dari si ibu di belakang. Jepun telah seakan hilang nilai kekeluargaan, tapi di sini ada di setiap kali sesi sembahyang. Pada



masa itu aku berkata kepada kawan Sarawak, jika mereka ini semua muslim, aku ingin membina keluarga muslim. Tentunya kawan Sarawak ku adalah muslim. Bermula dari situ di hostel, aku sering ke bilik dia bertanyakan pasal Islam.

Pada waktu itu juga, ada palajar Takushoku Universiti baru pulang ke hostel selepas menumpang orang dari Malaysia. Mendengar kisah perjalanannya, katanya di Masjid Negara Kuala Lumpur, ada bekas senior pelajar Takushoku Universiti yang juga seorang muslim tinggal di situ. Dia juga menumpang di bilik senior tersebut dan baru masuk Islam. Katanya dia akan bertolak untuk berjalan dengan menumpang orang lagi, dan aku minta untuk ikut sekali sampai ke Kuala Lumpur. Matlamat ku adalah untuk memeluk Islam.

Kuantan, Terengganu, Kota Bharu menumpang orang ke utara melalui pantai timur. Pantai timur walaupun miskin mempunyai ramai muslim, orangnya sangat simple dan baik-baik. Kota Bharu ke Kuala Lumpur adalah jarak yang jauh tetapi agak mudah mendapat tumpangan, dan akhirnya aku sampai ke tempat bekas pelajar senior Takushoku Univ di Masjid negara.

Senior itu telah dengar dengan matlamat aku datang masjid negara, lalu berkata “kamu datang untuk masuk islam, sebelum itu aku ada satu pertanyaan untuk Muslim Jepun”. Soalan tersebut hanyalah untuk mencari kepastian. Soalannya, “budaya sosial Jepun telah kukuh dengan budaya minum arak bersama-sama, bukan?” Dia juga memberikan kata-kata yang agak keras. “Kebanyakan orang Jepun yang masuk islam semasa mengembara hanya mahukan nama muslim, selepas itu ramai yang melupakan Islam. Jika kamu mahu memilih Islam, jadilah penganut yang benar-benar beriman, dan aku nak kamu menjadi muslim yang boleh mengajar Islam kepada orang lain. Kalau tidak sampai tahap itu, tidak perlu kamu masuk Islam”. “Aku ingin menjadi yang sebenar” jawabku. “Jika begitu, hafal perkara berikut dan aku benarkan kamu masuk Islam”, aku diberi memo yang tertulis Syahadah, Al-Fatihah, dan 3 surah pendek dari Al-Quran. Aku terus hafal, dan memeluk Islam di Masjid Negara. Kawanku pelajar Takushoku Universiti yang datang bersama hitch-hike pun beredar meneruskan perjalanan meninggalkan aku. Setelah masuk islam aku terus berkhitan, apabila luka sudah sembuh aku pulang ke

Singapura.

Menjadi seorang muslim dan pulang ke Singapura, aku disambut meriah oleh keluarga makcik warong. Mereka adalah Keluarga Komeng. Aku bersembahyang sebaris bersama 3 anak lelaki mereka. Di siang hari aku mengikuti program pengajian islam untuk muallaf dalam bahasa Inggeris yang dibuat oleh Majlis Ugama Islam Singapura (MUIS), 2 kali seminggu. Tetapi sebelum aku sempat berdikari sebagai muslim, aku terpaksa pulang ke Okayama. Waktu cutiku sudah lama habis.

### **Bahagian 3: Kembali ke Jepun**

Kembali ke Okayama kehidupan ku sebagai pelajar bermula kembali. Aku telah keluar dari kelab dan pergi, sukar untuk kembali semula ke kelab badminton yang agak feudal ini. Jika mahu kembali, walaupun aku di tahun 2, aku perlu bermula balik seperti tahun 1, di mana perlu melakukan kerja-kerja pembersihan, dan untuk bertanding dalam mana-mana kejohanan, perlu menunggu kelulusan majlis tertinggi kelab. Setahun yang lalu aku ditangga ke-3 perseorangan bagi wilayah Chugoku/Shikoku, juga bintang universiti, tetapi sekarang perlu bermula dari awal seperti orang baru. Selain itu, berbeza dengan sebelum ini, aku sudah menjadi seorang muslim.

Aku perkenalkan apa yang pernah ku tulis berkenaan waktu itu di website Islam Homepage di mana aku sebagai Adminnya.

[Selepas memeluk islam di Masjid Negara, aku meneruskan kehidupan di Okayama. Ada episod pada masa itu yang masih aku ingat sehingga kini. Pada waktu itu tiada seorang muslim pun di sekitarku, sumber maklumat berkenaan Islam yang boleh diperolehi hanyalah buku-buku di kedai dan perpustakaan. Sebelum bermula Ramadan pada waktu itu, pertubuhan Islam di Tokyo ada menghantar jadual berbuka puasa. Aku menampalnya di dinding dengan cermat, setiap hari aku berpuasa berpandukan jadual itu. "Puasa adalah menahan makan dan minum di siang hari", ku ambil kata-kata ini dengan penuh serius. Sebab itu aku tidak makan dan minum, aku hanya hisap rokok. Selain itu, apabila waktu berbuka tiba, aku makan dengan penuh rasa syukur, sambil melihat matahari yang masih tinggi bersinar di barat. Dengan cantiknya pemandangan itu, dapat berpuasa

satu hari, aku dapat merasakan satu kepuasan dalam diri. Waktu berbuka dalam jadual tersebut sebenarnya waktu untuk Tokyo, Okayama berada di sebelah barat yang mataharinya masih tinggi. Seperti cerita kelakar. Pelajar universiti pun tak pandai tengok jadual waktu? untuk dikata sedemikian aku terima. Tetapi jadual yang dicetak, dan puasa ialah tidak makan dan minum, sahaja maklumat yang aku ada, rasanya sesuatu yang tak dapat dielakkan.

Jika berkata berkenaan sembahyang ku pada masa itu, ini pun satu yang mengejutkan. Dalam masa lebih kurang sebulan masuk islam, aku cuba meniru segala cara dan gaya kanak-kanak di Singapura bersembahyang, hanya dengan beberapa kali sembahyang, hanya itulah yang ada dalam ingatan. Bila aku merasa hendak sembahyang, seorang diri aku letak kepala, aku bangun, bentuk pergerakan dan bilangan pun adalah caca merba. Tapi, dalam hati, masih ku ingat yang aku merasa sangat takut dan syukur pada Allah ketika itu, boleh dikatakan ianya merupakan salah satu sembahyang ku yang paling khusyuk. Itulah aku ketika itu.

Matlamat pertama aku membangunkan homepage ini adalah untuk memberi maklumat berkenaan islam yang sebenar kepada pemuda muslim yang lurus seperti aku ini. Jika ketika itu aku menjumpai homepage seperti ini, rasanya aku akan rasa sangat berterima kasih. Bagaimana nak sembahyang? puasa macamana? dalam situasi ini sebagai seorang muslim apa yang perlu dibuat? Untuk perkara seperti ini, aku mahu menjadikan homepage ini dapat menjawab persoalan itu. Ketika aku buat bilik kaunseling islam 3 tahun lepas, orang yang aku berurusan itu adalah seperti diri aku sendiri 27 tahun lepas. 30/12/1999.]

Selepas beberapa ketika, kedudukan aku dalam kelab telah diberi semula seperti sebelum ini mengikut tahun pengajianku, aku juga dapat menyertai pertandingan. Selepas tahun 3, aku mula menonjol. Akhirnya pada tahun 4, perseorangan pelajar bagi wilayah Chugoku/Shikoku, aku nombor 1, berada dipuncak dalam kategoriku. Itu merupakan usaha keras aku sebagai pemain badminton. Bertentangan dengan ini, aku tidak berusaha lebih untuk belajar Islam, pengetahuan islam ku sama seperti masa berada di Singapura dahulu. Keimananku pun makin pudar. Jika terus begini, aku menjadi risau Islam akan hilang dari hatiku. Di sini aku nekad, untuk menjadi seorang muslim yang sempurna aku mesti pergi

belajar islam di luar negara.

#### **Bahagian 4: Malaysia**

Aku nak belajar Islam. Tapi tak tahu nak pergi ke mana. Yang aku tahu hanya di Singapura. Dengan bantuan Keluarga Komeng, aku datang mengharap ke Majlis Ugama Islam Singapura (MUIS). Di Singapura pada masa itu tiada tempat yang boleh belajar Islam secara sepenuh masa.

Aku menyusuri jalan yang pernah ku lalui dulu bersama pelajar Takushoku universiti, secara menumpang orang, sekali lagi dengan bersendirian. Tapi, berbeza dengan dulu, aku telah muslim, aku mengembara sambil singgah di masjid-masjid untuk mencari tempat yang sesuai untuk aku tinggal. Malangnya tiada hasil, akhirnya aku sampai di Masjid Negara. Orang Jepun yang dulunya di situ sudah tiada lagi, sambil menunggu sembahyang maghrib, di senja hening aku duduk menghilangkan penat mengembara. Memandang kepada pemuda Jepun lusuh dan kepenatan ini, seorang pemuda yang lalu di situ menegurku. “Datang dari mana?”, “Dari Jepun”, “Datang untuk apa?”, “Cari tempat untuk belajar Islam”. Sebenarnya pertemuan inilah yang menjadi asbab untuk aku dapat memulakan pembelajaran ku di luar negara.

Malaysia boleh dikatakan negara baharu, merdeka dari Inggeris pada tahun 1957. Sebagai projek negara yang pertama, Masjid Negara siap pada Oktober 1965. Ketika aku sampai ke Masjid Negara (tahun 1975), ramai qari-qari hebat dari seluruh negeri berkumpul untuk belajar di tahfiz Quran (Sekolah Hafazan Quran) yang baharu ditubuhkan. Dan pemuda yang menegur aku tadi merupakan ketua pelajar di sekolah ini, Ustaz Basri. Apa yang aku dengar selepas itu, Ustaz Basri jarang-jarang sekali berjalan mengililingi masjid, pada hari itu kebetulan die merasa untuk berjalan. Inilah yang dikatakan takdir. Jika tidak kerana pertemuan ini, aku mungkin pulang semula ke Singapura tanpa apa-apa hasil. Pemuda hebat dan simple inilah yang tolong menanyakan kepada badan yang menjaga mereka iaitu agensi agama kerajaan (sekarang JAKIM). “Mohon juga diberikan tempat untuk orang luar negara yang mahu belajar Islam. Jika tiada sistem seperti itu, patut diwujudkan”. Tetapi, di ibu negara Kuala Lumpur ini tiada sekolah menengah tinggi agama. Sistem biasiswa pun, aku tidak tahu orang Jepun sebelum ini dapat dari mana, mungkin

dari Perkim iaitu badan agama yang memberi khidmat sokongan kepada saudara baharu. Pada waktu itu tiada sistem seperti itu di agensi agama kerajaan. Walaubagaimanapun, selepas mengambil masa yang agak lama agensi agama kerajaan memberikan aku bantuan biasiswa.

Hasil usaha Ustaz Basri memohon kepada sekolahnya, aku dibenarkan tinggal di asrama untuk sementara. Ustaz Basri juga tolong carikan aku sekolah untuk belajar. Jepun muslim yang sebelum ini tinggal di Masjid Negara telah pergi belajar di UKM. Secara sistemnya, untuk orang Jepun sambung belajar di universiti Malaysia, jika mempunyai kelulusan sekolah menengah tinggi, boleh masuk dengan hanya mengikut prosedur biasa. Universiti di Malaysia majoritinya menggunakan bahasa Inggeris dalam kuliah, aku dapat gambarkan ianya sesuatu yang mudah bagi pelajar dari Jepun untuk masuk. Tetapi, kalau ingin belajar Islam secara sebenarnya, lebih ideal untuk masuk ke sekolah menengah tinggi agama, duduk sebaris dengan pelajar melayu. Aku dari awal lagi mahu belajar agama yang sebenarnya, aku memberi tahu Ustaz Basri yang aku mahu belajar di sekolah menengah tinggi islam bersama orang melayu sambil mengenal budaya mereka.

Pada masa itu Kuala Lumpur adalah di bawah negeri Selangor. Syarat yang ditetapkan oleh agensi agama kepada aku adalah mesti mencari sekolah di dalam negeri Selangor. Dalam negeri hanya ada 2 sekolah, Kolej Islam di Kelang, dan Sekolah Menengah Tinggi di Sabak Bernam berhampiran sempadan negeri Perak, aku hanya ada 2 pilihan.

Sekolah di Sabak Bernam juga merupakan sekolah asal Ustaz Basri, sekolah ini nampaknya telah banyak mengeluarkan pelajar hebat, aku pergi untuk melihatnya sendiri. Sekolah ini sebelum ini di panggil Pondok, diajar oleh Sheikh berkarisma, pelajar akan datang mengililingi beliau, tinggal bersama, bukan hanya belajar agama, tetapi juga sama-sama bercucuk tanam. Pelajar perempuan kebanyakannya tinggal di asrama besar 2 tingkat bersebelahan dengan rumah Sheikh, pelajar lelaki tinggal di rumah kecil (bersaiz 2 tatami) atau pondok yang boleh memuatkan 2 atau 3 orang pelajar, di sekeliling sekolah. Tiada air paip dan elektirk, hanya cahaya lampu pelita dari tin kecil untuk membaca dan belajar, air hujan ditakung dengan botol kaca, daun dan sabut kelapa juga kayu digunakan sebagai bahan api untuk memasak. Pelajar membawa

beras dan kain sarung dari rumah, dan juga baju sekolah. Dahulu tiada had umur untuk pelajar, katanya umur dari 10 ke 40 tahun boleh masuk belajar. Selepas penambahbaikan sistem pendidikan, dikawal oleh kerajaan negeri, setiap pelajar mendapat meja dan kerusi, menjadi sekolah yang bilik darjah dilengkapi dengan papan hitam, umur pelajar dari 12 ke 18 tahun, menjadi sama seperti sekolah gabungan menengah rendah dan tinggi di Jepun. Sheikh menjadi pengetua, pengajar-pengajar lain menjadi guru, belajar menggunakan kurikulum yang telah ditetapkan, dan jika lulus semua tahap, boleh terus sambung belajar di universiti. Cumanya wajah pondok seperti dulu yang masih kekal ialah pada asrama kediaman perempuan dan pondok kecil untuk kediaman lelaki.

Bersama Ustaz Basri aku pergi berjumpa dengan pengetua sekolah, aku meninjau kawasan sekolah. Pengetuanya ialah Ustaz Ahmad Yusof, tiada orang yang tidak kenal beliau di kawasan ini, seorang sheikh yang berkarisma. Jika dahulu hanya jawapan dari Sheikh sahaja yang perlu dan boleh terus belajar di sini, tetapi kini aku masih perlu untuk pergi ke pejabat agama kerajaan negeri untuk membuat permohonan kemasukan.

Hari berikutnya, aku membawa surat sokongan daripada agensi agama kerajaan dan pergi ke pejabat agama negeri. Ini adalah kes kemasukan pelajar asing yang pertama katanya, mungkin perbincangan menjadi begitu teliti, selepas menunggu beberapa jam, aku terpaksa datang semula keesokannya. Untuk proses kali ke-2 ini, pejabat agama negeri memberikan kelulusan, aku menerima dokumen berkaitan kemasukan sekolah dan semua proses telah berakhir.

Aku terus berpisah dengan rakan-rakan di tahfiz Al-Quran (Sekolah Hafazan) yang banyak membantu, dan aku berjaya mendaftar di sekolah menengah tinggi Sabak Bernam. Nama rasminya ialah Sekolah Arab Menengah Tinggi Salahuddin Abdul Aziz Shah. Untuk aku, pengetua sekolah telah menyediakan rumah yang agak moden, di situ aku tinggal bersama anak lelaki ke-3 pengetua yang juga belajar di sini, bersama juga dengan saudara dekat pengetua, menjadikan 3 orang tinggal bersama. Tahap pengajian yang diberi kepada aku ialah di tahun 1 menengah rendah. Tahun 1 menengah rendah ada 2 kelas. Dalam 50 orang sekelas, tapi pada tahun itu ada 1 kelas untuk pelajar dari Sabah yang datang hanya untuk setahun. Seperti dihantar oleh kerajaan Sabah bagi tempoh

singkat untuk meningkatkan tahap pendidikan mereka.

Aku berumur 22 tahun. Jika menaiki tahap sekolah secara biasa aku akan habis pengajian pada umur 28 tahun untuk sambung belajar di universiti. Ini terlalu lama bagi ku. Aku bukannya mahukan sijil tamat sekolah tinggi, tak boleh ke aku lompat tahun? aku cuba tanyakan kepada pengetua. Satu kelas ada 50 orang, jika dapat keputusan 5 terbaik, penggal pengajian depan boleh lompat 1 tahun, dengan syarat aku akan belajar sendiri dalam 1 penggal ini untuk setahun punya pengajian, mohon ku. Pengetua mengatakan OK, tetapi memerlukan kelulusan dari pejabat agama, aku pergi ke sana dengan menerangkan kepada mereka dengan penuh semangat, dan diluluskan. Untuk pejabat agama, serba serbi perkara baharu bagi mereka, dan ini mungkin agak memeningkan. Dan peperiksaan akhir penggal pertama berlangsung, jangankan lompat tahun, aku mendapat keputusan yang teruk, 49 dari 50 pelajar.

Di sekolah menengah tinggi ini, sebagai aktiviti kokurikulum, ada kelab sukan. Bermain bola sepak disebelah petang yang matahari masih tinggi, bila tiada angin di waktu malam, dengan rakan yang sama bermain badminton di luar, akhir sekali bermain sepak takraw bersama rakan yang masih ada. Bermain badminton di waktu petang merupakan aktiviti yang glamour, ini kerana pelajar perempuan dari asrama akan datang memberi sokongan. Hero bermain badminton merupakan hero sekolah. Di sini aku pun ikut sekali. Walaupun badminton dikatakan permainan kebangsaan orang Malaysia, pelajar sekolah kampung tak mungkin akan dapat mengalahkan pemuda yang telah berlatih keras di universiti Jepun. Populariti hero hensem tempatan semakin pudar, muncul hero baru orang Jepun. Berita ini cepat menular ke seluruh daerah, pasukan amatur paling kuat di Sabak Bernam “Garuda”, telah menawar aku untuk bermain bersama mereka, dan aku pun mula berlatih bersama pasukan amatur ini. Dengan badminton, pergi ke mana pun dapat mengeratkan perhubungan sesama manusia.

Nampaknya aktiviti sukan ini menjadi aktif kerana akan ada pertandingan antara sekolah menengah peringkat kelayakan daerah. Setiap sekolah akan memilih 2 orang wakil, untuk bertanding beberapa minggu di dewan daerah, perlawanan perseorangan telah berlangsung. Kebiasaannya sekolah biasa yang bukan aliran agama mempunyai bilangan pelajar

yang ramai dan level permainan mereka lebih tinggi, untuk muncul juara di pertandingan ini aku sendiri pun merasa agak sukar.

Bekas hero yang hensem muncul. Masuk gelanggang dengan menggalas harapan sekolah dan pelajar perempuan, tapi langsung tidak dapat melawan dan tewas mudah. Oleh kerana harapan tinggi yang diberi, suara kekecewaan pun kuat didengar, pagi hari berikutnya digelar “sangat lemah”. Aku sebagai hero baru muncul pada hari lain, sememangnya perlu berlawan dengan menggalas harapan yang tinggi. Cerita berkenaan aku dikhabarkan dengan berlebih-lebih, lawan menjadi seakan gentar untuk berlawan dan banyak membuat kesilapan sendiri. Ini memudahkan aku menang dan menang, dihari akhir berjaya ke separuh akhir dan akhir. Lawan diperlawan akhir mempunyai bakat dan seorang pemain yang bagus, agar sukar untuk menang, perlawanan yang sengit, tapi dia banyak membuat kesilapan sendiri dan aku muncul juara.

Pengajianku menjadi lebih baik, kelas pun sudah boleh faham, peperiksaan akhir penggal 2 aku mendapat nombor 3, dan dapat melompat tahun. Setelah itu disetiap peperiksaan akhir penggal, aku mendapat nombor 5 terbaik, dalam masa 2 tahun aku dapat menghabiskan pengajian yang sepatutnya 6 tahun.

Di tahun 1 aku tinggal di rumah berdekatan sekolah, oleh itu aku bersembahyang maghrib di masjid sebelah sekolah, sementara menunggu isyak dalam sejam lebih setiap malam aku berbual dengan orang-orang tua tempatan sambil hisap rokok. Orang-orang tua pun sangat menyambut baik kehadiran ku, dapat belajar apa yang tiada dalam buku teks, menambahkan pengetahuan berkenaan keimanan, kebanyakannya hanya melalui perbualan berdasarkan pengalaman. Perbualan seperti ini banyak membantu, sedikit demi sedikit aku merasakan imanku semakin melekat.

Dari tahun 2 aku berpindah ke rumah di dalam hutan. Melalui jalan kecil untuk pulang, takut bertemu dengan ular bisa, aku mengelak dari bergerak waktu malam. Aku pastikan pulang semasa hari masih terang. Di sini aku tinggal berdua bersama pelajar tahfiz. Setiap hari selepas sembahyang 5 waktu, aku mesti akan membaca Quran selama 1 jam. Rakan akan dengar, dan akan betulkan jika ada kesilapan. Untuk setahun



ini tahap bacaan Quranku dirasakan naik dengan banyak.

Sementara itu, untuk sambung visa, aku di panggil oleh agensi agama kerajaan, aku kadang-kadang akan ke Kuala Lumpur. Kebetulan selepas sembahyang di Masjid Jamek, aku ditahan oleh seorang melayu. Dia pastikan aku orang Jepun, “ada seorang tua warak yang misteri, tak nak jumpa ke”, katanya. Orang tu seorang Jepun, boleh baca gerak hati, ada super kuasa, katanya. Dia menceritakan beberapa kisah lelaki itu yang agak menakutkan, dalam dunia yang misteri. Dia bercakap penuh semangat membuatkan aku percaya kepadanya dan pergi untuk berjumpa dengan orang Jepun itu. Pertamanya, dia mampu membaca gerak hati seseorang, dikatakan ada pagar di mana orang yang tidak beriman tidak akan dapat melangkah masuk ke kawawan rumahnya.

Hari berikutnya aku menuju ke tempat tinggal orang Jepun tersebut di Melaka. Aku pastikan alamat kedai basikalnya dan nama kedainya, ku ucap “Assalamualaikum” dan berdiri di depan kawasan kediamannya. Betul-betul muncul orang tua seperti Jepun menjawab “Walaikumussalam”. Aku nampak senyuman di sebalik kaca matanya. Aku lulus fasa pertama dan dapat masuk melalui hadangan pintu dan terus ke tempat kerjanya. “3 hari di sini, mohon ajarkan islam kepadaku” kataku. Dia tidak banyak bercakap “kalau begitu, ikut aku” hanya itu yang dia sebut. Bila dengar azan, kerja ditinggalkan, seperti pekerja korporat di Tokyo dengan langkah yang cepat dia menuju ke masjid berdekatan. Apabila tutup kedai, dia bergeras ke rumah, tukar pakaian dan pergi ke masjid. Selepas makan malam, dia pergi sembahyang Isyak, lepas itu melakukan zikir sufi. Selama 3 hari dia membonceng aku dengan motornya bergerak ke sekeliling. Tiada apa yang diajar melalui kata-kata, pergerakannya yang cergas, dan gerak badannya yang aku rasa menunjukkan seperti ada rahsia islam yang tidak dapat disampaikan melalui kata-kata. Pada hari akhir dia berkata, “Islam tiada di Jepun, sebab itu aku tak ingin pergi”, seakan menyengat hatiku dengan kritikan ini. “Islam perlu disuburkan di Jepun”.

Isterinya ada bercerita “Dia tidak pandai baca Quran, tidak pandai berbahasa melayu seperti kamu, pengetahuan tentang islam pun mungkin tiada, tapi keimanannya tidak kalah dengan orang melayu” katanya.

Selepas perjumpaan tadi, aku kembali ke Kuala Lumpur, pergi ke Masjid Jamek, sekali lagi berjumpa dengan orang melayu yang misteri. “Jika kamu berjaya dalam dakwah, kita akan jumpa lagi di sini” ditinggalkan kata-kata ini dan berlalu pergi. Selepas itu dalam puluhan tahun aku ada pergi ke Masjid Jamek, tapi belum berjumpa dengan orang melayu misteri itu.

Di Malaysia, keimanan, bacaan Quran, asas pengajian Islam, budaya orang melayu, kurasakan telah dapat diperolehi. Setelah 6 tahun masuk islam, barulah aku dapat merasakan nikmat keimanan yang semakin berbunga.

Untuk setiap perubahan penggal persekolahan, di antaranya ada cuti. Apabila cuti semua pelajar di asrama dan pondok akan pulang rumah keluarga masing-masing, aku pun sebenarnya pulang ke rumah Keluarga Komeng yang aku anggap sebagai keluarga. Umurku tidak tidak sebaris dengan anak-anaknya, En Komeng itu aku panggil abang, isterinya aku panggil kakak. Melihatkan aku yang semakin berdikari sebagai seorang muslim, dia sungguh bangga memperkenalkan aku kepada jiran-jirannya. Juga, bila habis cuti dan waktu untuk pulang ke Sabak Bernam dia akan bekalkan aku dengan pakaian dan makanan. Kakak akan menangis kesedihan di stesen bila kami berpisah. “Kamu adalah ahli keluarga Komeng, Singapura adalah kampung mu, pulanglah bila-bila masa” ucapnya.

Aku telah naik ke tahun 6 (sekolah tinggi tahun 3), selepas ini tahap universiti, aku pergi ke agensi agama kerajaan, berjumpa dengan pengarahnya untuk membuat permohonan pertukaran tempat pengajian. ”Jika terus belajar di sini berterusan aku akan sambung belajar ke Nilam Puri yang merupakan universiti agama, ataupun ke universiti biasa dalam jurusan kesusasteraan dan agama, tetapi untuk aku, ini akan menjadikan aku terpaksa menggunakan bahasa arab dan bahasa melayu, dua bahasa asing bagiku untuk terus belajar. Aku telah di didik di Malaysia sehingga ke tahap ini, tetapi untuk peringkat seterusnya aku mahu belajar Islam di tempat asalnya di arab, dan dalam bahasa asalnya sahaja, bahasa arab”, ku sampaikan kepadanya. Pengarah agak kecewa, tapi dia menghormati keputusanku dan membenarkan aku pergi.

### **Bahagian 4-1: Jerteh**

Dalam mencari tempat untuk belajar, tanpa arah tuju aku bergerak seorang diri dari Singapura ke arah utara menyusuri jalan pantai timur dengan bermalam di masjid-masjid, bermusafir secara 'hitch-hike'. Ketika di Mersing, imam mempelawaku ke rumahnya kerana katanya tak selesa tidur di masjid. Aku mendapat layanan yang baik dan dapatlah menghilangkan kepenatan berjalan. Pada waktu itu, untuk aku yang berusia 23thn, anak perempuan imam yang dalam usia sekolah menengah, menegurku dan berbual denganku penuh minat, telah menjadi kenangan yang sangat menarik. Perjalananku lancar ke Kuantan dan Kuala Terengganu. Sebelum tiba di Kelantan, perjalananku terganggu oleh hujan lebat di Jerteh, pekan di utara Terengganu. Oleh kerana tidak dapat meneruskan peralajanan, aku bermalam di sebuah masjid kecil di pekan Jerteh. Keesokannya hujan masih tidak reda, malah makin lebat. Aku terpaksa terus bermalam di masjid. Di situ ada seorang pakcik miskin yang juga bermalam di masjid, kami bersolat dan berbual bersama sementara menunggu hujan reda.

Di pagi hari ke-3, hujan mulai perlahan. Untuk pergi ke pekan, aku bersama pakcik itu pergi ke perhentian bas, didapati jambatan besar jerteh telah hanyut. Mengikuti saranan pakcik itu, kami pergi ke warong untuk makan pagi. 'Oleh kerana kamu muslim baru, aku belanja' kata pakcik dengan nada yang bersungguh. Untuk aku bayaran itu tidak seberapa, tapi untuk pakcik itu, dia terpaksa membelanjakan seluruh harta yang ada untuk makan pagi aku. Kelihatan bayarannya sedikit tidak cukup, tapi pakcik itu mungkin mengatakan 'Dia muslim baru yang datang dari Jepun, kamu pun tolonglah sekali' kepada tuan kedai tersebut. Semua duit dari poketnya dikeluarkan. Aku merasa amat tersentuh dan sangat berterima kasih sambil menikmati makan pagi tersebut.

Kami pergi ke tebing sungai. Jambatan besar Jerteh keseluruhannya dihanyutkan air, kelihatan askar menggunakan tali untuk membolehkan bot bergerak. Arus air sangat laju dan apapun boleh dihanyutkan. Pakcik pergi ke arah askar yg tengah sibuk tadi, dia cuba meminta agar aku dibenarkan untuk ke seberang, aku katakan padanya 'semua orang nak ke seberang, aku takpe, aku bukan tergesa-gesa' dengan menggunakan bahasa melayu yg mudah dan lenggok badan. 'Aku tak faham muslim

sekarang ni' marah pakcik pada askar tadi. Dalam hati aku berkata 'pakcik, cukup dgn perasaan pakcik yang nak tolong', aku tarik pakcik kembali ke perhentian bas. Diperhentian bas, dikatakanada satu lagi jambatan di hulu berjarak 10km tidak dhanyutkan, jika lalu ikut sana boleh terus ke Kota Bharu. Aku memutuskan untuk menggunakan laluan itu. Pakcik nak bayarkan aku tiket bas, tapi aku tahu poket dia dah kosong. Aku naik bas dan lambaikan tangan kepada pakcik sehingga dia tidak kelihatan lagi. Dalam hati kuucapkan terima kasih berulang kali.

Dikedai aku sekarang ada seorang pembantu yang juga pelajar dari Malaysia, dia dari Jerteh. Aku selalu mengimbau kenangan yang berlaku di Jerteh. Ku harapkan agar dapat pergi ke Jerteh lagi.

#### **Bahagian 4-2 : Mohammad Ali Jepun**

Aku pernah bersolat di Masjid Jamek yg berada di pertemuan antara Sungai Gombak dan Sungai Klang yang juga merupakan tempat lahirnya nama Kuala Lumpur. Itu pun kerana secara kebetulan aku lalu di situ, kebiasaannya aku jarang ke masjid itu. Seusai solat, selepas menyarungkan kasut ketika untuk beredar aku disapa oleh seorang pakcik. Bila dia tahu yang aku ini orang Jepun, die mengajakku untuk singgah di rumahnya, aku terima pelawaannya dan pergi ke rumahnya. Namanya Bashiron, rumahnya dalam 15min berjalan dari majid Jamek, iaitu di Bukit Nenas. Dia berceritakan tentang seorang Jepun yang bernama Muhammad Ali. Semasa Perang Pasifik, beliau datang ke Malaya sebagai tentera Jepun dalam skuad payung terjun, tetapi ditemui dalam keadaan cedera parah dan tergantung di hutan, dan telah diselamatkan oleh orang tempatan. Bila perang berakhir, beliau tidak pulang dan menetap di negara ini. Selepas itu beliau berkahwin dengan wanita tempatan dan meneruskan hidup sebagai seorang muslim. Sehingga dipanggil warak disebabkan oleh tahap keimanan yang kuat yang ditunjukkan. Beliau meninggalkan banyak episod. Diantaranya yang agak pelik ialah beliau dapat membaca hati orang, sehingga dikatakan tahap keimanan seseorang yang lemah tidak akan dapat melepasi pintu masuk ke rumahnya. Juga dikatakan beliau mampu meneka apa telah berlaku pada seseorang itu. Juga, seperti yang dikatakan oleh En Bashiron jika bersungguh ingin berjumpa beliau, tanamkan dalam hati, akan kedengaran suara orang berzikir, dan jika mengikuti arah suara itu, akan jumpa beliau sedang duduk berzikir. Ini

satu dunia yang sangat berbeza dengan apa yang aku belajar tentang Islam, seakan beliau seorang yang mempunyai kuasa yang pelik.

En Bashiron mencadangkan aku untuk pergi berjumpa Mohammad Ali ini, dan belajar daripadanya. Untuk pergi bertemu dengan seseorang yang dikatakan mampu membaca isi hati orang, aku merasakan diri ini akan dilihat kesemuanya. Tetapi, memikirkan beliau orang Jepun yang dikatakan mempunyai tahap keimanan yang tinggi, aku merasakan satu keperluan untuk aku pergi dan belajar sesuatu darinya, aku putuskan untuk pergi berjumpa.

Aku mendapat maklumat yang Muhammad Ali mempunyai kedai basikal di pekan kecil Masjid Tanah, Melaka. Aku menunggu cuti sekolah bermula dan menuju ke Masjid Tanah. Bila ditanya “Kedai Basikal Muhammad Ali Jepun”, seperti diduga, semua orang tahu.

Inilah masa yang gementar bagiku, aku berdiri di depan kedai, kelihatan seorang yang berumur dalam 50an, dengan riak wajah seperti seorang Jepun yang serius. Aku menegurnya dalam Bahasa Melayu, disambung dengan bertanya bolehkan dalam Bahasa Jepun. Aku datang untuk belajar tentang Islam. Aku menyebut apa yang ku sebut dalam Bahasa Melayu kepada Bahasa Jepun. Die terus menjawab dalam Bahasa Jepun, “masuk lah”. Bila aku mendengar jawapan itu, aku rasa lega kerana telah dapat melepasi halangan pertama.

Dia sangat fokus memperbaiki basikal. Tahap penumpuan yang ditunjukkan seperti seorang tukang di kilang kecil yang sangat mahir dan jarang dijumpai. Bila kedengaran azan, dia terus berhenti dan berjalan ke masjid dengan baju kerjanya. Cara pergerakannya yang agak pantas tidak seperti orang bekerja secarasantai di kampung, malah seperti seorang ahli perniagaan di bandar. Dia solat Jemaah di masjid, selesai solat tanpa mengerjakan solat sunat, die terus kembali ke kedai dan sambung kerja. Aku bersamanya selama 3 hari, semua solat zohor dilakukan seperti ini.

Selesai solat asar, dienyiapkan kerja yang tinggal dan bersiap untuk pulang. Aku membonceng motorsikalnya di belakang, dia singgah di pasar membeli barang dan terus pulang ke rumah. Isterinya kelihatan seperti wanita melayu biasa. Apa yang kurasa pelik ialah dia ada membela

anjing untuk menjaga kawasan rumahnya. Rumah muslim Malaysia biasa tiada yang membela anjing dan kebanyakannya tidak suka anjing. Aku yang dah semakin menjadi seorang melayu merasa agak terkejut, tetapi jika difikir kembalikan, baru aku sedar yang membela anjing untuk menjaga rumah bukan lah menjadi kesalahan untuk seseorang muslim. Petang itu diemotong kayu dan membersihkan kawasan rumah. Bila semakin gelap, aku dengannya pergi ke masjid berdekatan dengan motorsikal. Selesai solat kami terus pulang dan makan malam. Selesai makan, sekali lagi naik motorsikal pergi ke masjid, tetapi kali ini masjid yang lain dari yang solat maghrib tadi. Di situ, selepas solat, yang masih tinggal membuat bulatan dan mula berzikir. Mungkin ini cara orang sufi di sini. Aku hanya ikut dan tiru zikir ini yang berlarutan selama 1 jam. Selepas itu kami pulang ke rumah, berbual sambil minum teh dengan keluarga dan tidur awal. Keesokan paginya, sekali lagi aku membonceng motorsikal Muhammad Ali untuk ke masjid bersolat, terus pulang dan lepas sarapan kami pergi ke kedai basikal. Muhammad Ali sibuk dengan kerjanya, aku hanya memerhati dan bertanya sesekali kepadanya, juga ada masa aku berjalan pusing-pusing kawasan sekitar kedai. Kehidupan biasa seperti ini berterusan 3 hari. Aku tidak diajar apa-apa olehnya, hanya memerhati pergerakannya dan cuba ikut. Tetapi, dalam kehidupan seharian yang biasa ini, aku dapat belajar caranya yang bekerja dengan tiada membuang masa, inilah sepatutnya cara hidup seorang muslim. Dia ke masjid 5 kali sehari, tetapi selepas itu tidak melarat duduk bersahaja di masjid atau solat sunat.

Dia berasal dari Nagoya. Aku tanya kepadanya “jika orang seperti kamu berada di Jepun, muslim di sana pun akan berubah, tak mahu pulang ke Jepun ke?”. Jawabnya mudah “Jepun ialah negara yang tiada Islam, aku tak fikir untuk pulang”. Aku terfikir, mungkin dia maksudkan tiada muslim yang betul-betul muslim di Jepun sekarang termasuk aku sendiri, katanya tadi membuatkan aku berfikir panjang. Isterinya ada berkata, “bahasa Melayu suami ku ini jika dibandingkan dengan kamu pun tidak sebagus kamu, Quran pun dia tak boleh baca dengan lancar, cuma tahap keimanannya tidak kalah dengan orang-orang Melayu sekitar ini”.

Apa yang aku dengar dari En Bashiron tentang kuasa pelik yang Muhammad Ali ada, tiada ku dengar apa-apa darinya. Tapi, dia tak banyak bercakap, dari perbualan yang sedikit ini mungkin pada masa itu ada maksudnya

lebih dalam yang tersembunyi. Aku anggapkan seperti itu. Kehidupan 3 hari bersamanya, memang memberi kesan yang berterusan kepadaku.

Pada suatu hari, aku terserempak dengan En Bashiron di bandar. En Bashiron meninggalkan perkataanyang pelik kepada ku. “Kalau kamu menjadi seorang muslim yang hebat, kita akan berjumpa lagi”. Selepas perjumpaan itu, dah 30 tahun masa berlalu. Masa aku belajar di Malaysia pun, selepas kahwin dan menetap 6 bulan di Kuala Lumpur pun, semenjak aku selalu datang ke Kuala Lumpur pun, 2 kali setahun dalam beberapa tahun ini, aku masih belum berjumpa dengan En Bashiron.

Setiap kali melalui masjid jamek, aku akan teringatkan En Bashiron dan En Muhammad Ali. Walaupun hanya 3 hari tinggal bersama, sangat terkesan dalam diriku, jika ada apa-apa berlaku ianya telah mengingatkanku kembali tentang kehidupan yang ideal sebagai seorang muslim. Aku mahu terus menjalani hidup seperti ini.

### **Bahagian 5: Mesir**

Aku kata nak pergi ke tempat asal (asli islam), tapi aku tidak melakukan apa-apa prosedur persediaan. Yang aku tahu, tempat pengajian islam paling tinggi ialah di Universiti Al-Azhar dan aku mahu ke situ, tanpa visa, tanpa arah tuju, aku terjun masuk. Seperti masa aku mula-mula belajar di Malaysia, selepas banyak menumpang orang aku sampai di Masjid Negara, disebabkan oleh secara kebetulan bertemu dengan Ustaz Basri, aku dapat belajar, sama seperti waktu itu, aku terpaksa terjun masuk.

Jika ada masalah boleh pergi ke sini, Pengarah (agensi agama Malaysia) telah memberikan memo kepadaku, ia merupakan alamat “Rumah Malaysia” di Abbasiah. Aku yang tiada arah tuju, daripada lapangan terbang terus menuju ke Rumah Malaysia. Apabila aku berdiri di pintu masuk bersama barang-barang ku, pelajar yang lalu di situ menegur. Pelajar ini berasal dari Kelantan. Bila dia mendengar latar belakang ku, dia tumpangkan ku di biliknya. Dia telah meminta kepada ketua persatuan pelajar Malaysia untuk membantu ku. Pada malam itu aku tidur menumpang secara senyap dibiliknya. Persatuan pelajar telah berunding dengan Kedutaan Malaysia yang menjaga Rumah Malaysia, menolong

membuat permohonan biasiswa dan proses masuk belajar hingga selesai, juga tolong usahakan untuk aku dapat tinggal di Rumah Malaysia ini secara percuma beserta makan sekali, keadaan yang kurasakan seperti mimpi. Ini juga mungkin kerana aku pernah mendapat biasiswa dari agensi agama Jabatan Perdana Menteri, dan juga dengan pertalian yang cukup baik antara persatuan pelajar Malaysia dengan pihak kedutaan.

Dikatakan di asrama Universti Al-Azhar ada beberapa orang pelajar Jepun, aku dibawa ke sana. Mereka adalah pelajar yang dihantar oleh Persatuan Muslim Jepun, belajar bahasa arab di Dilasat Hassa, pelajar yang telah di tahun ke-2, lebih kurang sebaya denganku atau sedikit lebih tua. Orang Jepun seperti aku yang muncul tanpa apa-apa prosedur, mungkin sepatutnya di tolong oleh pelajar senior dari Jepun ini, tetapi melihat kepada tahap pengetahuan dan bahasa arab mereka yang kurang berkeyakinan, dicadangkan untuk teruskan meminta pertolongan dari pelajar Malaysia.

Permohonan biasiswa dan proses masuk belajar ku dilakukan oleh pelajar dari persatuan pelajar yang sangat pandai berunding, telah banyak menyelesaikan prosedur yang susah, iaitu En Mat Daud. Prosedur di Mesir pada masa itu, banyak kali terpaksa ke kaunter, dihalau, diminta ke sana sini, dokumen hilang dan sebagainya selalu berlaku, ada terjadi jika hanya menurut arahan secara lurus, satu prosedur pun akan mengambil masa berbulan-bulan. Untuk menyelesaikan urusan dengan lancar, perlu sabar, pandai berbahasa arab, perlu ada hubungan sesama orang sana. Prosedur aku bermula dari 0, orang biasa tidak akan mampu menyelesaikan proses ini. Hanya Mat Daud yang mampu melakukannya. Dia berjaya menyelesaikan proses permohonan biasiswa dalam beberapa hari, juga dapat membuat kunjungan hormat ke Sheikh Al-Azhar. Aku dapat menyelesaikan permohonan masuk belajar iaitu di Dilasat Hassa, tempat yang sama dengan pelajar Jepun yang lain, aku juga telah dapat tinggal di asrama Universiti Al-Azhar. Akhirnya, semua prosedur dapat diselesaikan dalam masa lebih kurang 3 bulan. Selama jangka masa itu aku menumpang di Rumah Malaysia.

Aku mendapat banyak pengalaman semasa di Rumah Malaysia, syarahan dari Timbalan Perdana Menteri Mahathir, En Anwar Ibrahim, dan ramai lagi yang telah menjadi orang penting dalam dunia politik Malaysia. Di



majlis sosial aku bercampur dan berbual dengan tetamu. Mat Daud ialah orang Kelantan, aku selalu pergi ke bilik pelajar dari Kelantan, dan ketua mereka, En Mawardi secara individu juga telah mengajarku berkenaan Islam. Mawardi ialah cicit kepada Tok Kenali, orang hebat Kelantan dan seorang Sheikh yang disegani.

Waktu itu merupakan zaman krisis minyak, beberapa lama selepas itu datang permintaan bahasa arab yang melambung. Disebabkan itu lah ada orang Jepun yang masuk islam, dan datang ke universiti islam negara-negara arab untuk belajar dalam jangka masa yang panjang. Mereka itulah pelajar-pelajar yang dihantar oleh Persatuan Muslim Jepun. Jika bukan untuk belajar dalam jangka masa panjang pun, masuk dengan visa pelancong, orang Jepun yang belajar bahasa arab di Universiti Kaherah atau Universiti Amerika Kaherah adalah ramai. Aku dengar pada masa yang ramai melebihi 50 orang.

Tepat pada waktu itu jugalah aku masuk ke asrama Universiti Al-Azhar, dan memulakan kehidupan sebagai pelajar miskin. Duit biasiswa selepas ditolak bayaran asrama, makan pagi dan tengahari, tinggal 5 pound. Duit inilah aku terpaksa gunakan untuk makan malam, bayar bas, buku dan lain-lain, jika tidak dipotong mana-mana keperluan aku tidak akan dapat hidup. Makan tengahari aku makan separuh, tinggalkan separuh lagi untuk makan malam. Untuk perjalanan jarak dekat, kebanyakannya aku tidak akan guna bas, hanya berjalan kaki. Ada juga perjumpaan bersama pelajar-pelajar Jepun, untuk aku pelajar yang miskin ini, jika tidak ada perkara mendesak, aku tidak akan turut serta. Tapi, di rumah En K seorang sarjana arab-muslim yang tinggal berdekatan dengan kedutaan Jepun, menjadi tempat yang mudah untuk pelajar muda keluar masuk, jika keluar ke bandar aku pun akan singgah di situ. Satu lagi tempat, di Angloswiss iaitu sebuah hostel yang ramai orang Jepun tinggal untuk jangka masa sederhana dan panjang. Tempat untuk berkumpul adalah banyak.

Beberapa waktu setelah mengenali En K, adik perempuannya datang ke Mesir. Oleh kerana sukakan Mesir dan mempunyai minat terhadap Islam, En K meminta aku untuk mengajarkan Islam kepada adiknya. Dalam sekali seminggu aku mengajar adik perempuannya berkenaan keimanan dari segi Islam. Selepas beberapa lama dia ingin memeluk

Islam. Kebetulan bakal isteri En K pun perlu memeluk Islam, aku bawa kedua-duanya ke Masjid Al-Azhar untuk diislamkan. Inilah kes yang pertama aku dapat membawa orang untuk diislamkan.

Adiknya perlu dididik untuk menjadi muslim yang boleh berdikari, aku bawa dia ke rumah rakan pelajar perempuan Indonesia untuk dia tinggal bersama. Belajar Islam dari pelajar Indonesia, nanti akhirnya untuk dapat masuk ke fakulti perempuan di Al-Azhar. Tetapi dalam hatiku, dari dia tinggal di Angloswiss bersama orang Jepun yang lain, secara khususnya letakkan dia berdekatan dengan kawasan aku, itu yang sebenarnya. En K suam-isteri mengatakan “Adikku telah menjadi muslim, bakal suami pun mesti juga seorang muslim. Bolehkah kamu mengambalnya? Ini yang terbaik untuk kamu berdua”, aku mendapat sokongan yang besar. Adiknya tidak biasa dengan bangsa arab, hidup dalam keadaan tertekan yang berterusan, setiap kali aku datang akan terukir senyuman, dia pun sebenarnya sentiasa menunggu kedatanganku. Aku yang belajar Islam dan hidup dalam keadaan serba kekurangan ini merasakan mungkin tidak akan dapat kahwin, tetapi di sini cinta lahir dengan cepat dan kami berkahwin.

Berkenaan dengan perkahwinan ku, En Mahmud yang berasal dari Perlis, Malaysia mencadangkan agar majlis ini diadakan oleh Majlis Tertinggi Islam (Agensi Islam Mesir). Kedua-duanya orang Jepun, bertemu dan berkahwin di Al-Azhar, dengan alasan kes ini tidak pernah berlaku, dia meneruskan prosedur. Majlis Tertinggi Islam digerakkan, Presiden Majlis Tertinggi dan Sheikh Al-Azhar hadir, Duta Jepun ke Mesir juga turut diundang, menjadikan majlis perkahwinanku dilangsungkan secara besar-besaran.

Untuk aku yang tidak berduit ini dilangsungkan majlis perkahwinan, dan juga melalui perkahwinan ini aku dapat isteri dan juga duit simpanan isteriku. Dengan duit ini aku sewa rumah, bermulalah kehidupan sebagai pengantin baru. Pembelajaran di universiti aku pun lancar, beruang-alik ke Dilasat Hassa setiap hari, tahun ke-2 aku selesai prosedur kemasukan ke Fakulti Agama, Universiti Al-Azhar untuk tahun 1.

Dilasat Hassa berada di dalam kawasan asrama pelajar Al-Azhar, setiap hari aku berulang alik dengan berjalan kaki, merupakan sebuah pusat

persediaan sebelum masuk universiti, aku dapat belajar mata pelajaran asas Islam dalam bahasa arab di sini dengan penuh kepuasan.

Selain dari itu, apa yang aku bersungguh hadir, di masjid asrama diadakan 3 kali seminggu kelas tajwid. Mulanya aku hadir bersama seorang lagi muslim Jepun, disebabkan terlalu banyak pembedaan dan arahan buat semula, dia menjadi tidak bersemangat dan terus tidak hadir. Lebih kurang 20 orang pelajar dari pelbagai negara bercampur, hadir secara berterusan, seperti dijangka pembedaan dan arahan buat semula kepadaku selalu banyak, makraj yang betul (bunyi huruf), gerak mulut, bentuk mulut, arahan yang sangat detail, hingga dikata OK aku berterusan mengulanginya. Paling tidak pun, dari orang Malaysia dan Indonesia yang datang sekali itu aku rasa bacaanku lebih betul, tapi untuk mereka bacaan jarang dibetulkan. Satu hari, aku bertanya kepada guru itu, “bacaanku lebih teruk dari kawan Malaysia ke?”. “Secara jujurnya dikalangan pelajar, bacaan Quran mu boleh dikatakan yang terbaik. Tapi, untuk pelajar yang datang dari negara Islam, mereka baca tidak bagus pun tidak mengapa, ramai lagi yang belajar baca Quran dengan pakar. Untuk itu bagi mereka setakat boleh baca sudah memadai. Tapi, dengan kamu berbeza. Kamu mesti mahir tajwid secara sempurna. Ini kerana orang Jepun selain kamu tiada yang boleh baca Quran dengan baik. Sebab itu aku lebih tegas betulkan kamu”. Aku pun menyangkakan begitu. Tapi, bunyi yang aku keluarkan dengan bunyi yang sampai ke telinga sebenarnya adalah berbeza, anggapan yang merasakan diri sendiri sudah betul ini salah, aku rasakan pembedaan kepada bunyi yang sampai ke telinga guru mesti dilakukan tanpa dipertikai.

Juga, secara minat, aku ke masjid untuk mendengar bacaan Quran yang dibaca sebelum sembahyang fajar. Waktu itu qari (pembaca quran) yang popular ialah Sheikh Mahmud Halirul, Fusari, Sheikh Abdul Basit, Sheikh Ali Rubanna dan lain-lain lagi, jadual pembaca Quran itu ada dijual, aku memeriksa nama masjid dan nama qari, dan pergi mendengar bacaan quran mereka secara langsung. Oleh kerana terlalu kerap pergi, mereka mula mengenali aku, jika aku sampai akan dipandang mesra.

Semasa aku tinggal bahagian akhir di Mesir, satu hari selepas kelas Quran, guru menahanku dan berkata “tahniah, inilah fardu kifayah (tanggungjawab untuk bangsa atau komuniti yang seorang kena

laksanakan) bangsa Jepun”. Inilah antara penghormatan yang aku terima di Mesir.

Untuk sembahyang Jumaat, aku selalu pergi ke Masjid di asrama atau masjid yang berdekatan Rumah Malaysia. Untuk masjid yang kedua ini, ramai pelajar Malaysia dan pekerja kilang, pekerja buruh binaan dan sebagainya berkumpul. Simbol bagi masjid yang aku dapat melihat orang-orang dari 2 negara yang aku dididik. Orang Malaysia, dihari Jumaat akan datang ke masjid dengan baju yang dibasuh bersih, sementara orang Mesir ramai yang datang sembahyang dengan baju kerja yang agak kotor. Orang Malaysia selalu menkritik orang Mesir yang seperti ini. “Kebersihan adalah separuh dari iman” katanya. Di masjid semasa khutbah (syarahan), tabung derma untuk kerja pemulihan masjid akan digerakkan, caranya jika ingin menderma masukkan duit secara senyap, jika tidak dapat menderma, majukan tabung ke sebelah. Orang Malaysia dan juga aku akan masukkan duit dalam Yen sebanyak 10yen atau 100yen, tetapi pekerja buruh orang Mesir yang berada ditepi ku memasukkan banyak helai tindanan wang kertas yang tertinggi nilainya. Lebih kurang 30000yen. Dalam hatiku seperti tak percaya. Gaji bulanan mereka tak akan sampai pun 30000yen. Apakah perasaan mereka yang membolehkan mereka menderma dengan banyak untuk masjid.

Juga, orang Malaysia ramai sembahyang di bilik yang bersih sendirian, kebanyakan orang Mesir jika ada orang yang bersembahyang di tepi jalan, yang lain akan masuk saf tanpa memikirkan sangat dengan keadaan baju mereka yang kotor. Sembahyang adalah digalakkan untuk dibuat seawalnya dan secara berjemaah (ramai-ramai).

Orang Mesir mungkin lebih menekankan keperluan utama dalam Islam. Aku suka orang Mesir yang seperti ini.

Agak lama selepas itu, aku pernah singgah di sekolah rendah Islam di selatan Thai. Selepas memberi syarahan, semasa meninggalkan sekolah, sebagai derma aku tinggalkan 100000yen dan pulang. Akhirnya mungkin aku pun dapat berdiri sebaris dengan orang mesir.

## **Bahagian 6 (akhir): Libya**

Perkahwinan kami masih belum mendapat restu emak ayah di Jepun, juga aku ingin perkenalkannya kepada yang banyak membantuku di Singapura dan Malaysia, untuk itu aku pulang setelah agak lama. Dikala itu iaitu tahun 1970an, askar merah Jepun terlibat dengan kegiatan pengganas antarabangsa, arab yang berbau seperti bahan letupan ini membuatkan emak ayahku risau. Berkahwin pula dengan perempuan muslim yang mereka tidak pernah jumpa menambahkan lagi kerisauan. Tetapi selepas berjumpa sendiri dengan isteriku, kerisauan mereka hilang.

Selepas itu aku pergi untuk berjumpa keluarga Komeng, sekolah menengah tinggi di Malaysia, dan akhir sekali Pengarah Agensi Agama. Pengarahnya En Nawawi menunjukkan riaksi yang kurang senang dengan keputusanku untuk terus belajar di Al-Azhar. Di Mesir biasiswanya kecil, untuk hidup terpaksa bekerja. Ini akan menyebabkan pembelajaran menjadi tidak sempurna. Belajar Islam adalah sama di mana-mana negara sekalipun. Dengan pemberian biasiswa yang mencukupi, belajar menjadi lebih fokus, dia menasihatkan aku pergi ke Arab Saudi atau Libya. Dengan ihsan agensi agama aku dan isteri diberi penginapan percuma dalam kawasannya, dan aku membuat prosedur sambung belajar. Sehingga sekarang pun jika di Malaysia, dengan alasan bekas penerima biasiswa agensi agama, aku mendapat layanan istimewa.

Menteri agama Arab Saudi datang ke Malaysia. Inilah peluang bagiku, selepas pengarah berjumpa, aku turut dibenarkan masuk. Pengarah memperkenalkan aku dan meminta agar dapat dibawa ke Arab Saudi. Menteri memberikan persetujuan. Aku sangkakan terus dapat pergi ke Arab Saudi bersama rombongan menteri, namun, setiausaha menteri telah memaklumkan kepada kedutaan, segala prosedur akan diuruskan oleh pihak kedutaan. "Menteri telah memberikan kebenaran, anggaplah ianya sesuatu yang sudah pasti", katanya. Segala prosedur telah sampai ke kedutaan Arab Saudi, tetapi tiada sebarang perkembangan. Aku telah menunggu beberapa bulan. Isteriku yang sedang hamil, perutnya pun sudah makin menonjol. Aku tidak boleh menunggu lebih dari ni, kataku kepada pengarah. Sebagai jalan yang terbaik, pengarah membatalkan semua prosedur ke Arab Saudi, dan dia menghubungi kedutaan Libya. Hanya selepas 2, 3 hari, permohonan sambung belajar ku ke Libya telah mendapat kelulusan.

Aku membawa isteriku yang perutnya semakin membesar, kami sampai di lapangan terbang Tripoli. Tiada sebarang masalah dengan visa yang diisukan oleh kedutaan, tapi tiada wakil dari Universiti Dakwah Islam yang datang menjemput. Kerana tiada pilihan, aku menggunakan teksi ke pejabat utama universiti. Mungkin ada kesilapan, namaku tidak sampai ke pejabat utama. Aku tidak terkejut kerana perkara seperti ini biasa berlaku di negara arab. Dan semua prosedur boleh terus dibuat secara serta merta pun juga arab. Aku memohon biasiswa, kemasukan dan tempat tinggal untuk aku dan isteri.

Universiti Dakwah Islam merupakan universiti baharu, tahun itu merupakan tahun batch pertama bergraduat. Sekolah tinggi yang juga merupakan pusat persediaan universiti pun baru dibuka. Presiden universiti, Syaif Subhi yang juga merupakan menteri agama. Berbeza dengan Universiti Al-Azhar yang pelajarannya puluhan ribu datang dari seluruh dunia, dewan kuliah yang besar, kelas menggunakan mikrofon, kedatangan tidak diambil, jika tidak hadir pun boleh pinjam nota kuliah dan masih boleh menduduki peperiksaan naik tahun, sebaliknya di Universiti Dakwah Islam ini pelajar satu kelas hanya lebih kurang 40 orang. Jika tidak hadir terus dapat diketahui, kadang-kadang kes pensyarah datang mengetuk pintu bilik asrama pun ada, sebab itu tidak boleh ponteng kelas. Peperiksaan ulangan ada, tapi untuk naik tahun perlu lulus semua kursus, sukar untuk membuat helah, pelajar terpaksa bersungguh-sungguh untuk menghadapi peperiksaan naik tahun.

Pertamanya, ada temuduga untuk penentuan tahun. Sekolah tinggi baru sahaja siap, menduduki peperiksaan hanya sekadar syarat, boleh dikatakan semua sekali akan bermula dari tahun 2. Dalam ini, ada pelajar PhD dari Indonesia, dia terpaksa bermula dari sekolah tinggi tahun 2, menjadikan tahun pengajiannya seperti tidak tentu arah. Dalam kes aku, bersama isteri yang perut makin membesar, isteriku juga mendaftar sebagai pelajar dan hadir kelas, pihak sekolah memberi keistimewaan kepadaku dengan menyediakan bilik keluarga dalam asrama lelaki. Pelajar satu batch dengan ku seramai 80 orang yang hampir kesemuanya pelajar lelaki, isteriku dan seorang pelajar lagi Thai sahaja yang perempuan. Dari sekolah tinggi tahun 2 hingga tamat universiti adalah selama 6 tahun, dari 80 orang pelajar, yang tidak boleh naik tahun akan tertinggal ditahun bawah, ada berhenti dipertengahan, sudahnya pelajar yang bermula dari

masuk hingga bergraduat secara terus cuma tinggal 20 orang lebih. Semestinya ada pelajar tahun atasan yg jatuh ke bawah, menjadikan bilangan pelajar yang bergaduat bersama seramai lebih kurang 50 orang. Agak getir yang tidak dapat digambarkan di universiti di Jepun.

Kehidupan di sini serba cukup. Tidak lama selepas itu anak pertama (perempuan) lahir, menjadikan kehidupan kami 3 orang sekeluarga, di asrama ada disediakan makan pagi, tengah hari dan malam, setiap kali waktu makan aku akan bawa makanan ke bilik untuk di makan bersama keluarga. Biasiswa cukup walau tidak mewah, aku tidak menghadapi sebarang kekangan kewangan. Cuma aku kagum dengan isteriku yang tegar bersahaja walaupun terpaksa tinggal bersama keluarga di asrama lelaki.

Di sekolah tinggi tahun 2, untuk peperiksaan naik tahun, markah penilaian pensyarah adalah 50 markah penuh, markah peperiksaan pula 50 markah penuh, jika jumlah kedua-dua ini 50 dan ke atas akan lulus. Seminggu sebelum peperiksaan, markah penilaian pensyarah untuk setiap kursus diberi, aku tergamam dan pergi bertanya kepada pensyarah. Pelajar dari asia tenggara hampir semua mendapat markah 30 ke 40 untuk penilaian pensyarah. Pendek kata untuk lulus hanya perlukan lagi 10 ke 20 markah. Markah penilaian pensyarah untuk aku 20, aku terpaksa dapatkan 30 markah ke atas untuk lulus. “Apa perbezaan aku dengan pelajar asia tenggara yang lain?”, “Mereka semua native dan belajar islam sejak kecil, kamu masih baru memeluk islam, masih tidak ditemani dengan pemahaman islam”, “Prof, aku tidak boleh terima. Paling tidakpun aku belajar islam seperti orang Malaysia, pemahaman Islam ku pun aku tidak fikir kurang, dan juga markah penilaian pensyarah ni seperti membuli saudara baru, bukan?”. Tetapi, berkenaan markah penilaian pensyarah ini, aku juga dapat rasakan bukanlah tiada sebab. Ini kerana semasa dalam kelas aku akan menerangkannya kepada isteriku dalam bahasa Jepun, mungkin dia salah faham merasakan suami isteri ini bercakap perkara lain dalam kelas. Sudahnya markah aku kekal, dengan usaha keras ku untuk peperiksaan aku mendapat 40 markah, dan berjaya naik tahun. Pensyarah pun selepas itu selalu mengambil berat tentang aku. “Kamu memahami apa yang diajar” ujarnya.

Untuk peperiksaan ini, keputusan nombor 1 ke 20, ditampal, ini

menjadikan aku lebih bersemangat. Di universiti, untuk yang dapat keputusan terbaik, selain ditampal apa yang mengejutkan aku, untuk 5 terbaik akan dapat sumbangan duit yang agak tinggi.

Program sekolah tinggi selama 2 tahun berakhir dengan baik, aku masuk ke tahap universiti. Untuk rumah, kami menyewa rumah di Souq Turk bersama dengan 3 keluarga pelajar Indonesia. Berhadapan dengan jalan berbatu, ada satu pintu, bila pintu itu dibuka ada taman yang dikelilingi oleh rumah 2 tingkat 4 bilik, ada dapur, merupakan rumah tradisi arab. Di situ kami tinggal 4 keluarga. Untuk isteriku, dapat keluar dari ketegangan tinggal dalam asrama lelaki, juga dapat berbual dengan isteri-isteri lain, satu segi yang kurasakan sangat baik. Juga selepas isteriku melahirkan anak pertama, dia telah berhenti menjadi pelajar, waktu itu dia telah menjadi suri rumah sepenuh masa. Kehidupanku berulang alik dari rumah dan universiti, membeli belah bersama-sama di supermarket dan pasar berdekatan. Tetapi, masa demi masa sekatan ekonomi oleh negara barat dan sekutunya terhadap Libya menjadi semakin ketat, sehingga ke situasi tidak dapat membeli barang yang diperlukan.

Tidak lama selepas tiba di Libya aku diminta untuk mengajar di sekolah tusyen orang Jepun. Hanya seminggu sekali semasa hari cuti, untuk pelajar sekolah rendah dan menengah, mengajar budak-budak bahasa Jepun dan matematik, aku bekerja selama 6 tahun sepanjang berada di Libya. Selain itu, selepas naik ke universiti, aku juga diminta untuk menjadi penterjemah oleh syarikat-syarikat. Kos sara hidupku cukup dengan biasiswa, tapi dengan kerja sampingan ini, aku dapat pendapatan yang banyak. Tetapi, oleh kerana ada limit untuk penukaran Libya Dinar kepada mata wang lain, yang terkumpul hanya Libya Dinar.

Tidak lama selepas berpindah ke Souq Turk, anak ke-2 ku lahir (lelaki pertama). Sekatan ekonomi terhadap Libya merisaukan En K yang juga abang iparku, dia memilih untuk mendapatkan kerja di syarikat Jepun di Tripoli Libya selama setahun. Mungkin dia risaukan berkenaan anak-anak dan kehidupan kami. Dia selalu datang ke rumah, juga membawa barang makanan yang sukar didapati.

Satu hari, anak lelaki ku sakit tiba-tiba, aku mendukungnya dan bawa ke hospital, terpaksa menunggu dari pagi hingga lewat petang di bilik



menunggu. Libya merupakan negara sosialis, kos perubatan adalah percuma, tapi bilangan hospital (sedikit) terhadap bilangan pesakit yang ramai, dalam keadaan begini pun terpaksa menunggu. Keadaan hospital pun, jika difikir di bawah sekatan ekonomi seperti ini, menjadi negara yang sukar untuk tinggal. Akhirnya, apabila habis tahun 2 di universiti, aku menghantar keluarga ku ke Jepun. Isteri dan 2 anakku tinggal bersama emak ayah ku di Bandar Hojo, Ehime.

Aku yang sudah tiada keluarga, dari tahun 3 aku berpindah ke asrama, aku habiskan hari-hariku hanya untuk belajar. Semasa aku pulang sekejap itu, Muslim Jepun En E aku bawa bersama dan telah masuk ke sekolah tinggi, lebih bersemangat kerana dapat junior yang perlu aku ajar. Tidak ikut jejak langkah ku yang hanya belajar, aku nasihatkannya peningkatan perbualan dalam hanya bahasa arab untuk peningkatan.

Keputusan ku semakin baik sejak selepas sekolah tinggi. Masa di tahun 2 universiti, untuk orang Jepun yang dianggap mustahil, aku berjaya mendapat kan 10 terbaik. Cuma masih tidak sampai untuk mendapatkan ganjaran duit. Disamping itu, berapa agaknya ganjaran tersebut, dalam yen Jepun lebih kurang untuk No.1, 600,000yen, No.2, 300,000yen, No.3, 200,000yen.. kalau tidak silap dalam ingatanku.

Untuk peperiksaan naik tahun di tahun 3, disediakan ganjaran yang mengejutkan. Pelajar 20 terbaik akan mendapat tiket pergi haji dan duit poket, 5 terbaik akan mendapat ganjaran duit yang lebih dari biasa. Cumanya dengan syarat membawa Jemaah haji negara masing-masing dan memberi tunjuk ajar kepada mereka. Banyak kursus yang menjadi kegemaranku pada tahun itu, keputusanku ialah No.2, aku mendapat duit ganjaran beserta tiket haji. Tiket haji menjadi perjalanan mengelilingi dunia yang tak disangka kepadaku. Ianya Tripoli – London – Tokyo – Jedda – Rome – Tripoli. Aku pulang ke nagara asalku mendapatkan visa haji, bersama Jemaah haji dari negara asalku menuju ke Mekah. Tetapi Jemaah haji dari Jepun pada tahun itu tiada, yang medapat visa haji dari kedutaan Arab Saudi di Tokyo hanya aku seorang.

Aku sampai di Jeddah seorang diri, menuju ke Mekah. Diperjalanan aku singgah di pejabat pendaftaran haji, oleh kerana tiada Jemaah haji dari Jepun, melalui saringan muka, aku dimasukkan sekali bersama

Jemaah haji dari Uighur. Penginapan di Mekan adalah di rumah yang dipunyai dan diselenggara oleh orang berdarah Bangladesh, bersama dengan lebih kurang 50 orang Uighur dan aku seorang. Yang dari Uighur nampaknya ada lagi Jemaah yang lebih kurang 50 orang menginap di rumah lain. Ketua mereka Ustaz Damullah bersama aku di rumah yang sama, oleh kerana hanya dia yang mampu berbahasa arab, aku menjadi pembantunya. Jemaah seramai 100 orang yang kebanyakannya orang tua berumur 60 tahun dan ke atas, aku memimpin tangan mereka, mejadikan haji ku penuh bernilai dan beremosi. Sementara di sana insiden duit palsu, masalah dengan jemaah haji negara lain, dan banyak lagi insiden yang aku hadapi, orang Uighur banyak membantu dan mempertahankanku. Perjalanan haji ini akan aku tulis dikesempatan yang lain.

Selama aku belajar di Libya selama 6 tahun, aku diberkati dengan rakan sekelas yang baik, masa di luar kuliah banyak perbincangan berkenaan dakwah diadakan. Terutamanya perbincangan dengan pelajar dari negara budhist Thai, yang aku boleh padankan bersama Jepun dengan banyak, juga sambil membuat simulasi terhadap masyarakat Islam Jepun pada masa hadapan, dan banyak berbincang bersama. Apa yang aku fikirkan pada waktu itu, sebetulnya menjadi perkara yang diperkatakan di Jepun sekarang ini membuatkan aku rasa terkejut.

Melalui pembelajaran ini, sambil menambah ilmu, aku mempunyai masa yang cukup untuk memandang kembali turun naiknya keimananku. Dan juga, ada mimpi yang telah memberi pemangkin kepada keimananku. Aku masih ingat dengan jelas mimpi tersebut. Semasa di sekolah tinggi Libya, aku bermimpi Nabi memandang dari tepi sepintas lalu ke arah ku dan terus beredar, aku cuba menjejarnya. Seterusnya semasa tinggal di Souq Turk di tahun 2 universiti, anak lelaki ku jatuh dari tebing dan aku tidak dapat menyelamatkannya, di situ aku mengeluarkan suara yang tinggi. Kemunculan Nabi dalam mimpi mempunyai maksud yang bagaimana, aku tidak tahu, kedua-dua mimpi ini aku ambil sebagai amaran tentang keimananku yang lemah, hari selepas itu secara tiba-tiba aku sangat serius bersembahyang.

Selama 10 tahun aku belajar dan tinggal di Malaysia dan arab, mungkin ada yang merasakan aku sukar untuk aku menguasai bahasa. Tetapi, dimanapun berada aku tidak pernah merasa sukar untuk menguasainya.

Apa yang aku belajar ialah Islam, bahasa hanya sebagai cara (tool) untuk aku belajar Islam. Oleh sebab itu aku tidak boleh disukarkan dengan bahasa.

Untuk peperiksaan akhir tahun 4 iaitu tahun terakhir, bagi kebanyakan pelajar dari negara islam, peperiksaan ini sangat penting yang akan menjadi penentu masa depan mereka. Ada 4 tahap penilaian keputusan iaitu Mumtaz (cemerlang), Jayyid Jiddan (sangat baik), Jayyid (baik) dan Maqbul (lulus). Tetapi, jika di sijil graduasi ditulis Maqbul, sukar untuk mendapat kerja sebagai pengajar, daripada itu berlaku lebih baik mengulang tahun dengan mengambil peperiksaan akhir tahun berikutnya. Semua akan berusaha untuk mendapatkan keputusan yang baik walaupun sedikit. Aku pun berusaha keras, tapi keputusan ku jatuh pada sejak tahun 3, aku di No.5 mendapat Jayyid Jiddan. Aku telah berusaha dengan masa belajarku dalam setahun ini kurasakan tidak pernah sebanyak ini aku belajar. Tahun itu kursus paling getir ialah “khutbah (syarahan)”. Subjek penting yang tidak dapat dielak untuk menjadi sheikh yang sebenar. Berdepan dengan para professor, perlu berkhotbah mengikut tajuk yang diberi secara terus dan spontan. Kefasihan bahasa arab itu sudah tentu, hafazan quran, kepelbagaian hadis yang boleh dikumpul, perlu ada daya pujukan, subjek yang memerlukan kepandaian secara menyeluruh. Kesilapan bacaan Quran akan diberi markah kosong, oleh itu tidak boleh menggunakan ayat yang kita tidak yakin. Untuk aku dan juga pelajar asia lain, ini merupakan kursus yang getir.

Apapun aku telah bergraduasi dengan jayanya. Sebelum pulang ke Jepun aku pergi ke Singapura jumpa Keluarga Komeng dan berjumpa Pengarah Agensi Agama Malaysia, En Nawawi untuk memaklumkan yang aku sudah bergraduasi dan mengucapkan terima kasih kepada mereka. Pengarah telahpun menyediakan pekerjaan untuk ku. Iaitu sebagai pensyarah di Universiti Islam Antarabangsa Malaysia (UIAM) yang baru ditubuhkan pada 1983. Di situ aku katakan kepada pengarah “Di Malaysia ini sudah ramai orang seperti aku, sheikh yang keluar dari universiti Islam. Tapi di Jepun boleh dikatakan tiada. Jika aku tiada pekerjaan yang baik sekalipun, penting bagi aku untuk terus tinggal di Jepun. Aku sebagai “tiang Islam”, akan hidup di dalam masyarakat Jepun. Jika aku terus berdiri sebagai tiang, akan ada orang datang mencari dan bergantung kepadaku. Malaysia telah mendidik aku, ianya bukan untuk

membuat aku keluar di TV Malaysia dan mendapat tepukan gemuruh sebagai seorang Jepun yang pelik, bukankah ianya untuk memacak tiang Islam di Jepun?” En Nawawi memahaminya dan menghantar aku. Tahun itu nampaknya merupakan tahun akhir beliau sebagai pengarah. Tahun selepas itu dengarnya beliau telah ditawarkan menjadi Pengerusi Lembaga Pengarah UIAM.

**Biodata Akira Hamanaka**

- 1953/3/12 Born in Matsuyama, Ehime, Japan  
 1957 Adopt by grandparents  
 Yuuho nursery, Oshima, Yamaguchi
- 1958/4 Back with parents in Matsuyama  
 Mibu kindergarten, Matsuyama, Ehime
- 1959/4 Mibu Elementary School, Matsuyama, Ehime
- 1965/4 Tsuda Junior High School, Matsuyama, Ehime
- 1968/4 Matsuyama East High School, Matsuyama, Ehime
- 1971/4 Okayama University
- 1972/ Revert to Islam in Masjid Negara, Kuala Lumpur
- 1975/ Moved to Malaysia  
 Maahad Salahuddin Abdul Aziz Shah, Sabak Bernam,  
 Selangor
- 1976/12 Moved to Egypt  
 Dirasat Khassah, Al-Azhar University, Cairo
- 1977/12 Faculty of Usul Ud-Din, Al-Azhar University, Cairo
- 1978/2/28 Married (Cairo, Egypt)
- 1979/1 Islamic Call College Affiliated High School, Libya
- 1979/4/7 1st daughter Rahmah born
- 1980/9 Islamic Call College, Tripoli, Libya (Faculty of Islamic  
 Da'wa)
- 1981/2/7 1st son Mahade born
- 1982/8 Wife & kids moved to Hojo, Ehime
- 1983/9 Performed Hajj
- 1984/10 Graduated from Islamic Call College  
 Moved to Kamifukuoka,  
 Saitama Started Islamic class at Islamic Center Japan
- 1985/12/5 2nd son Atallah born
- 1988/2/1 Moved to Niihama, Ehime
- 1988/9 Established Smash Club
- 1988/11/1 Racket Shop Hamanaka open in Niihama
- 1989/4 Niihama Badminton Association, Executive Director
- 1989/6/16 2nd daughter Barkah born
- 1990/4 Niihama Badminton Association, Vice President

- 1990~2007 Badminton coach in Niihama city
- 1994/4 Established Niihama League
- 1997/5 Racket Shop Hamanaka website started
- 1997/5 Ehime Badminton Association official website started
- 1997/5/21 Started Islamic discusion website for Japanese  
(after Islamic Homepage)
- 1998/4 Niihama Badminton Association, President
- 1999/6 Contacted with Nusa Mahsuri Badminton Club
- 2000/4 Ehime Badminton Association, President
- 2000/10/18-20 Partipated in 6th Word Islamic Dakwah Association  
Conference, Jakarta, Indonesia
- 2001/10 Strenghtent Collaboration with Nusa Mahsuri
- 2001/12/9~25 Outreach Activity in Afghanistan
- 2003/8 Masjid Niihama, Open
- 2004/11/24~12/2 Participated in World Islamic Dakwah Meeting,  
Tripoli, Libya
- 2005/4 Ehime Badminton Association, Executive Director
- 2006/10 Misbun Sidek & Hafiz Hashim Badminton Clinic in  
Ehime
- 2007/4 Niihama Badminton Association, Vice Chairman
- 2008/7/4-6 Represent Japan in OIC Minority Muslim Symposium,  
Seoul
- 2009/6 Islamic Center Japan, Fellow member
- 2010/12/6-11 Represent Japan in International Convention on  
Awareness Through Mosque Tour, Bangi, Malaysia
- 2011/6 Islamic Center Japan, Auditor
- 2011/12/13~15 Participated in Islam Media Meeting, Jakarta,  
Indonesia
- 2016/10/2 Distinguish Service Award by Niihama city

## **Badminton Background**

Elementary School (Mibu Elementary School)

Join Ehime prefecture badminton tournament with father,  
Hamanaka Makoto

High School I (Matsuyama East High School)

2nd year, Ehime prefecture high school tournament,  
Single champion 3rd year, Ehime prefecture high school  
team tournament, Champion Participated in National High  
School Championship

University (Okayama University)

1st year, Chuugoku/Shikoku region student Tournament,  
Single 3rd place 2nd year, Join Badminton Club in  
Singapore Polytechnic 4th year, Chuugoku/Shikoku  
region student Tournament, Single Champion

Study in Malaysia (23-25 year-old)

Maahad Salahuddin Abdul Aziz Shah, Sabak Bernam  
Sabak Bernam District Tournament, Single Champion  
Join Sabak Bernam Badminton Club, Garuda Join  
Maahad Salahuddin Abdul Aziz Shah, Badminton Club

Interpreter during Thomas Cup Preliminary round (Japanese, English,  
Malay)

Study in Arab (25-33 year-old)

Al-Azhar University, Islamic Call College Teaching  
badminton

Saitama (33-35 year-old)

Coaching ladies team in Kamifukuoka and Sayama

Niihama (35 year-old~) As in biodata above

## **Rujukan:**

- 1) Akira Hamanaka, Islam Homepage,  
<http://islamjp.com/>,  
<http://www.dokidoki.ne.jp/home2/islam/hitokoto.htm>,  
<http://islamjp.com/profile/hitokotomokuji.htm>
- 2) Facebook akaun Abu Mahdy Akira Hamanaka,  
<https://www.facebook.com/hamanaka.japan>

## 彰 伝

—イマーム・ハッジ・スライマーン濱中 彰の生涯—

---

令和4年5月5日 初版発行

共 著 濱中彰・濱中曜子

〒792-0025

愛媛県新居浜市一宮町2丁目2-43

編集協力 愛媛新聞サービスセンター

〒790-0067

松山市大手町1丁目11-1

印刷製本 アマノ印刷

---

©Akira Hamanaka & Yoko Hamanaka 2022 Printed in Japan

\*許可なく転載、複写、複製を禁じます。



